

---

# マブラヴ暴走機械

ゴンザレス = アキヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マブラヴ暴走機械

### 【Nコード】

N1342Z

### 【作者名】

ゴンザレスIIアキヒロ

### 【あらすじ】

叔父が開発したVRゲームの実験に参加した船頭 海は、一人夏休みをゲーム三昧で過ごす予定だった。

しかし、実験は失敗。

カイの肉体は現実世界では死亡してしまう。

そして、自分の体が死んでいることに気づかないカイは、そのままゲームを進めていく。

しかし、その世界の人間はとてゲームとは思えず、敵も生々しい。

果たしてそこは現実なのか、異世界なのか、ゲームの世界なのだろうか。

降り立ち、世界は変わり始める（前書き）

移動しました、すみませんm（――）m  
ゴンザレスと言います、見ていただけたら、嬉しいです。

降り立ち、世界は変わり始める

少年が目を開けるとそこには、荒野が広がっていた。

「うむつ、流石オジキの創った世界だ！  
リアルと何ら変わらないなっ！」

そこで少年は、感心したように声を上げる。

少年の叔父である、船頭 拓也 が創ったゲームの初実験に参加した、船頭 海 は、初めて見たゲームの世界に感激していた。

「……よし、早速ゲームを開始しよう」

カイはそう言つと腕に装着された、機械のような物を操作する。

機械の操作方法は、予め叔父から説明されていたので、迷う事はない。

操作が終わると、少年の目の前に半透明の画面が出現した。

船頭 海

初期ポイント 10000  
現在 技術力Lv1

「開発可能なのは、何があるかな？」

カイが更に目の前に現れた機械を操作する。

ザク1

必要技術力1

開発必要ポイント 2000  
生産必要ポイント 500

ザク2

必要技術力 3

開発必要ポイント 3000  
生産必要ポイント 600

カイはそこまで見ると、画面を見るのを一旦止め、顎に手を当てて考え始めた。

（確かポイントは、敵を倒せば手に入る。

そして、技術力は色々開発させれば上がるんだよね  
それなら、まず旧ザクを開発、生産してその後ポイント稼ぎをしよ  
うかな）

とりあえずカイは、色々と開発できる物を開発していき、その後ポイントを溜める事に決めた。

ここはゲームの世界、装備を整え、レベルをコツコツ上げていく事が肝心だ。

カイは開発可能な物の欄を見て、まずは旧ザクの開発を開始させた。

すると、画面には

『旧ザクの開発を開始します、開発完了まで残り0時間10分00秒』

という画面に変わる。

（開発には時間が掛かるのか、結構凝ってるな）

カイはそう思うと、人工食料開発Lv1、CPU開発Lv1を選択し、その後岩に腰かけた。

CPUとは、自分が操作するMS<sup>モビルスーツ</sup>以外を自動操縦してくれる、装置だ。

その他にもアンドロイド開発Lv1や、MS次元収納庫Lv1等もあったのだが、技術力とポイントの関係でカイは諦めるしかなかった。

（確か開発しても、生産しなければ意味がなかったんだよね。残りはCPUが3000必要で食料が500、旧ザクが3000必要だったから、のこり3500ポイントしかないか。）

その後カイは、武器開発Lvと修理技術開発Lv1を発見し、ポイントを使った為、残り1500しかポイントを残せなかった。

「よし、旧ザクの開発が完了したか。生産開始、そして、武器の生産も」



するとカイの目の前に、光の粒子が集まり、旧ザクが出現。

そして、次にヒートホークとザクマシンガン、クラッカーも、旧ザクに装備された状態で出現する。

最も、ヒートホークはザク？用であり、ザクマシンガンも105mmの物だ。

そして、これでポイントは残り850になってしまったカイは、本格的に敵を狩に行かなければならない。

カイは浮かれた気持ちで、旧ザクに搭乗する。

カイは旧ザクに乗ると、機体を稼働させた。

旧ザクのモノアイが光、旧ザクはカイの操作によって歩き始める。

（流石に本物と違って、操作は簡単にしてあるみたいだな。  
転ぶ事もなかったし）

カイはそう思うと、荒野の中をザクに走らせた。

「お、敵発見」

しばらくザクを走らせていると、カイはレーダーに赤い点が映るのを見た。

赤い点の数は10ほど、序盤にしては多いとカイは感じたが、早く戦いたかった為、カイはその方向にザクを走らせた。

「いた！……随分気持ち悪い外見の敵だな」

カイはザクのモノアイから送られてくる映像で敵を確認し、そう感想を洩らした。

しかも、レーダーに移った赤い点は、どうやら重なっていたようだ。

モノアイから見た敵は、数えられないほど、うじゃうじゃ蠢いている。

二本の白い腕に長い首を持ち、多足の生物で、カイは敵の見て何故

か嫌悪感が沸いてくるように感じた。

敵ももう既にカイの存在には気づいているようだ。

凄まじい勢いで、カイの旧ザクに突撃してくる。

カイは3つのクラッカーを敵に投げつけ、スラスターで後ろに後退する。

クラッカーは地面に落ちると爆発し、大量の敵を爆死させていく。

（敵の体液が飛び散るって、これは明らかにR18設定だろ！）

カイはそう思いながらザクマシンガンを連射、ほぼ全ての敵を撃ち殺し、クラッカーを投げて残りを片付けた。

そして、カイは画面を出現させ、ポイントを確認する。

（おつ、2810ポイントになってる。

敵は50体くらい居たから一体につき40ポイントくらいか）

カイはそう思うと、10ポイントを消費して食料生産を発動し、食

料と水を出現させると、カロリーメイトのような物を食べる。

（不味い、食料開発のレベルも上げないといけないみたいだな）

カイはその後、更に2000ポイント近く消費し、旧ザクとCPU、武器のセットを出現させた。

（これで僚機の出来上がりか。

これから暫くは、敵を狩ってポイントを稼いでいこう。）

カイはそう思うと、僚機と共に索敵を開始した。

ひたすら、無限に沸いてくるように思える敵を狩り、無理ならばラスターでカイ達は撤退していく。

CPUには簡単な命令しかできないようだが、撤退くらいならば命令できるようだ。

カイは戦っている内に、二機ではきついと気づき、ポイントが入り次第ほとんどCPUと旧ザク、武器のセットを作っていた。

そして、MS部隊が20機程になると、カイは後方に下がり、CP  
UのMSに戦わせながら、ポイントを使って開発させ始めた。

既に技術力はLv2に上がっていたので、ザク?開発には残り1レ  
ベル必要だ。

旧ザク達の弾薬補給や修復を、ポイントを消費して済ませたカイは  
片っ端から可能な開発を進めていく。

途中物凄い勢いで突撃してくる、違う種類に見える敵がいたが、ス  
ラスターで勢員空中に回避し、後ろからザクマシンガン撃つて仕  
留めた。

その敵は、巨大だった為か1体につき100ポイント貰える。

かなりの高度のようだが、ザクマシンガンの集中放火なら、正面か  
らでも倒せるようだ。

武器補修技術開発や、MS強化技術開発を発動させながら、突撃し  
てくる敵を倒させていく内に、カイは漸く技術力が上がったのを確  
認した。

これで、ザク?の開発が可能になる。

カイは早速ザク？の開発を開始させ、今回は一旦撤退する事に決めた。

降り立ち、世界は変わり始める（後書き）

閲覧ありがとうございます（——） m

開発は始まり、鉄の巨人は目覚める（前書き）

よろしく願います



## 開発は始まり、鉄の巨人は目覚める

撤退したカイは、建造物開発Lv1をポイントを使ってLv2に上昇させ、拠点を設置した。

見張りは八時間稼働可能な、CPUに交替制で4体ずつさせることにして、カイは眠る事にした。

次の日、カイは目覚めると日用品生産Lv1で生産した服を着て、食料生産Lv2で生産した食料を食べる。

その後歯を磨きながらカイは、ぼんやりとこれからの予定を考える。

（今は夏休みだし、ゲームの中では時間が現実よりも十倍遅く進んでるんだよな。

ゲームに飽きるまでは、暫くこの世界にいても問題ないだろう。）

カイは現実では、栄養剤を一日三食注射されると聞いていたので、1ヶ月くらいは遊べるだろうと考えていた。

それ以上になると、現実に戻った後のリハビリが面倒なので、よほ

どゲームにのめり込まなければ大丈夫だと、カイは考える。

「とりあえず、ザク？の御披露目だな。」

カイは丸いドームのような形をした建物から出ると、ザク？を生産する。

「……おお！これこそザクだっ！」

見た目は旧ザクと同じく緑色だが、多少ゴツくなったその姿はまさしく有名な量産型のザクだった。

カイは武器生産能力Lv2で生産した、120mmザクマシンガンとヒートホーク、クラッカーを装備させると、ザクに搭乗した。

「ふふ、これこそMSだ。……ザク？を否定する訳ではないが」

カイはそう言うと、早速旧ザク20機を引き連れて、拠点から出撃した。

唸るザクマシンガンが、発見した敵を直ぐ様挽き肉に変えていく。

挽き肉とはいっても、口を近づけるのすら嫌悪するような物質だが。

途中凄まじい数の敵を見つけた時は、流石にクラッカーを投げつけながら撤退したカイだったが、僚機が脱落する事は一度もなく、逆にザク？をカイは2機更に生産させていた。

（数は多いが敵は強くないな、敵の装甲は結構硬いみたいだが、120mmと105mmザクマシンガンの集中砲火なら沈められるレベルだ）

結局その日は、カイ達はひたすら敵を狩り続け、技術力を上げる為にカイはどんどん開発にポイントをつぎ込みながら、MSを少しずつ増やしていった。

「ようやく技術力Lv4になったか、なかなか上がりにくいみたいだな」

カイはそう言うと、僚機の弾丸を生産し、補給させていく。

そして、この日は特に目新しい敵が出現する事はなく、カイは拠点に帰還した。

そして、次の日もカイは同じように出撃した。

作業ゲーではないかとカイは思い始めていたが、開発できる物はなかなか多岐に渡っていて面白い。

当面のカイの目標は、技術力Lvを5に上昇させ、新MSを開発する事だ。

ザク？ 20機と、ザク？ 7機で構成された部隊は、今日も敵を作業のように殺害していく。

「数は力らしいが……それは、同じレベルの時に限るらしいな」

カイはそう言うと、欠伸をする。

「ん？何が近づいている」

カイの見るレーダーに、不意に凄まじい勢いで迫る黄色い点が映った。

そして、次の瞬間旧ザクに光線が飛来し、旧ザクを大破させた。

「な！？何処から撃ってるんだ！

レーダーには、何も映っていないぞ！？」

カイはそう叫ぶと辺りを見回すが、敵の死骸しか辺りには存在しない。

しかも、そうしている間に、光線は再度カイの部隊に向かって飛来し、二機目の旧ザクに命中した。

旧ザクの残骸が粒子となって消えていくのを見ると、カイは僚機に撤退命令を出す。

各機はスラスターを全開まで噴出し、拠点に向かって猛スピードで帰還していく。

しかし、それでも敵は無慈悲に、三発目の光線を放ってきた。

カイの近くにいたザク？は回避行動を取ろうとしたが間に合わず、光線はザク？に当たり、ザク？を大破させた。

しかし、ザク？はギリギリ耐えたようで、爆発する事も粒子にならず消える事もない。

カイは近くの僚機に、ザク？に大破したザク？を運ばせる。

そして、更にカイは旧ザクを一機失う事になったが、何とか光線の範囲外から抜け出す事ができた。

「敵の攻撃はジムのレーザーガスプレーガンくらいのレベルか。ガンダムクラスでなくて、まだ良かったな  
まあ、ある程度ゲームバランスは整えられているということか」

カイはそう言うと、拠点開発にポイントを投入する。

元々拠点は防御力が高いようだが、レーザーには一発ほどしか耐えられそうにない。

カイは拠点のレベルを一気にLv4に上げ、一息ついた。

（超遠距離攻撃が可能な敵か。

ザク？でも大破するレベルだから、早急に対策を練らないと不味いな。

光線を撃つ敵が大量にいたら、即ゲームオーバーだ）

カイはそう思うと、MS改造Lvに目をつけ、MS改造のポイントを振っていった。

（このレベルをあげれば、MSの強化をポイントとレベル次第だが、行えるみたいだな）

カイは早速自らのザクを強化させていく、まずザクの頭にブレードアンテナを付け、色を赤色に着色させる。

これにはほとんどポイントを必要としなかった。

しかし、次の対レーザー用コーティングLv4は、一体につき1000ポイントを必要するようだ。

カイは迷わず自らのザクに付加させた後、暫く迷う。

（まだポイントには余裕があるが、一体につき1000ポイントは高いな）

カイはそう感じて、現在いるザク八機にだけ対レーザーコーティングを付加させる事に決めた。

そして、その後幾つか開発を進めていき、カイは就寝した。

そして、次の日もカイは出撃し、敵を駆逐していく。

数時間の間狩り続けたが、レーザーが飛来することはなく、カイはこの日は早めに切り上げることにした。

（技術力がなかなか上がらん、だがもう少しで上がりそうな気がするな）

カイはそう思い、次の日に備えた。

そして、カイは次の日も敵の討伐の為に拠点を出発した。

敵を狩ること三時間、カイ達部隊に向かって遂にレーザーが飛来し、カイは奴が来たことを察知した。

カイ達は直ぐ様突撃してくる敵にクラッカーを投げつけ、スラストの推進力を駆使して、閃光が飛来してくる方向に向かって突き進んでいく。

途中運良くレーザーを回避できる事もあったが、旧ザクは命中すれば一撃でやられていく。



（今のところザク？に三発命中し、同じザク？には二発命中したが、耐えられている。

どうやら、対レーザーコーティングLv4は有効みたいだな。）

カイがそう感じていると、何故か途中で飛来してくるレーザーの数が増えていった。

どうやら敵は複数いるらしい。

カイのザクのレーダーに遂に、敵を示す複数の赤い点が映った。

「よし、行ける！」

次の瞬間ザク？に光線が命中し、ザク？が大破する。

どうやらレーザーに耐えられるのは、五発が限界らしい。

カイは7000ポイントを消費し、ザク？全てに耐レーザーコーティングを塗り直させると、目の前にいる眼鏡をかけたような気持ち悪い生き物と、ずんぐりした生き物にザクマシンガンを連射させていく。

十体程いた新しい生き物は、ザクマシンガンの弾に当たり、あっさ

り爆散していく。

どうやら敵は、防御力は大した事はないようだ。

その後、回りに護衛のように着いていた敵も片付け、カイは達成感に満たされる。

（光線を撃つ敵は、一体につき1500と1000か。  
周りにいた敵のお蔭で、赤字にはならなかったが、効率は悪いな）

カイはそう思うと、拠点に帰還した。

カイは拠点に向かったのだが、そこには文字通り何もなくなっていた。

どうやら耐久力以上のダメージを受け、粒子になって消えたらしい。

そこには変わりに、敵が蠢いていた。

「ちっ、魔物の分際で俺の住処に手を出すとはな。

報いを受ける！」

カイの言葉と共にザク達は発砲を開始し、魔物達を殲滅していく。

「これは拠点に護衛を置くべきだったな。  
迂闊だった」

カイはそう言うと、他の場所に拠点を設置し直すことに決めた。

（MSも残り自機も合わせて七機しかないから、早急に部隊を建て直す必要がある）

カイは一先ず拠点を造り直し、MS部隊を建て直す事を決めた。

開発は始まり、鉄の巨人は目覚める（後書き）

閲覧ありがとうございました m ( ) m

**脅威の陸上型MS（前書き）**

よろしく願います。

## 脅威の陸上型MS

カイは拠点となる場所を探して、スラスターで飛行している途中に、街のような場所を発見した。

街とはいっても人気は全くなく、廃墟のような街並みが広がっているだけだったが。

（そういえば荒野辺りしか策敵してなかったが、確か宇宙から来た侵略者を倒すとかいう設定だったから、人間がいてもおかしくないんだよね）

カイはそう思うと、辺りをザクのモノアイ越しに見回すが、やはり人間の姿は一人も見当たらなかった。

「……一先ずこの辺りには拠点を設置するか。」

カイはそう言うのと、廃墟から少し離れた地点にLv4の拠点を設置した。

その後カイは自らの赤いザクを眺めて、暫くの間考える。

（このザクは確かに塗装しコーティングはしたが、それ以外はただのザクだ。

しかも、俺の操作技術はあの赤い彗星には遠く及ばない。

それなのに、大佐と全く同じ外見にするのは、もしかしたら大佐に失礼なのではないだろうか。）

カイはそう思い始め、自らのザクに黒い模様を施す事にした。

その後更にカイはザクを改造し、機動性を強化させる。

強化はLv4のためか、機動力は1 / 4倍になった。

（後10%低ければ……いや、気にする必要はない）

カイはその後、何気なく武器開発をLv3に上昇させた。

武器開発は、この技術力ではこのレベルが限界のようだ。

そして、30分が経過し、武器開発が完了すると同時に、カイの技術力がとうとうLv5に上昇した。

「よし、此でついにドムが生産できる！」

カイはそう言うと、ドムの開発を開始させた。

ドムの開発には15000ポイント必要な上に、開発時間一日掛かるようだが、仕方がない事だろう。

開発には大量のポイントが必要だが、量産型ならば生産にはそれほどポイントはかからない。

しかもドムは、ザクとは違い元々陸戦型の機体だ。

この地球では、多いに活躍してくれるだろう。

ザクでは地上で俊敏な動きをするのには、改造する必要があるが、地上用に開発されたドムならばホバー移動が可能で、俊敏な動きができる。

更に武器開発レベルになり、増えた武装の中にヒートサーベルが存在した。

これをザクにも装備させれば、近距離戦闘も有利に進められるようになるだろう。



（後は、自機をどうするかだが……せっかくザクの操作に慣れたのに、武装の違うドムに変えるのもな）

カイはそう思うと、自機を更に改造していく事に決めた。

脚部を改造して、ホバー移動を可能にし、スラスターの強化、装甲の強化をしていく。

本来なら無茶苦茶な改造なのだが、ゲーム故に可能になってしまう。

「魔改造ザク？、とは言ってもゲルググには劣るな。地上用の自機の変更は、出来ればゲルググにしたい所だ」

カイはそう考えるが、次に開発出来るようになる機体は、おそらく水中用だろうと予想していた。

このゲームはジオン版だった為に、連邦のMSは存在しない。

ジオンからティターンズの機体の開発を進めていくと、なっていくとカイは聞かされていた。

（ビーム兵器は水中戦用以外は、しばらく先になりそうだな）

カイはそう考えるが、それほど危機感は懷いていない。

あえていうなら、ビームを撃ってくる魔物が大量に現れれば危険だが、どうやら技術力が上がれば生産コストは少しずつ下がっていくらしく、対レーザーコーティングの必要ポイントが950に下がっていた。

しかも、レベルを1上げたので耐久性も上昇している。

このまま技術力を上げれば、レーザーを撃つ魔物も克服は可能。

他の敵は120mmザクマシンガンの敵ではない。

一日が経過し、とうとうドムが完成した。

武装は360mmロケット砲

どんな装甲も爆散させる破壊力を持っているだろう。

更にヒートサーベルはドム以外の全機にも配備し、ドムは合計18生産した。

その内5機は拠点の防衛を、それ以外の20機で魔物を駆逐していく予定だ。

ドムには全て最新式のCPU Lv5を配備している。

加えて、全てのドムに対レーザーコーティングを施し、拠点のレベルを1上げる。

拠点にも強力な対レーザードムを張れる建物を建設し、拠点の防衛性を強化した。

その為か、自機の強化も合わせてかなりのポイントを消費し、懐がかなり寂しくなってしまった。

暫くポイント稼ぎに専念する事に決め、それから三日間は魔物の駆逐に専念した。

そして、三日間でドムを10機増やし貯金を増やしカイは、次の予

定を考える始めた。

120mmは強力なのだが、集中放火しなければ硬い前衛の魔物には弾かれる事がある。

360mmロケット砲のお蔭で今は問題無くなってきたのだが、新たなマシンガンの開発は必要だろう。

更にまだ問題はあり、カイのザクの性能が急激に上昇した事により、カイはザクの性能に振り回される事が多くなってきた。

（反応速度上昇はポイントがかなり掛かるが、仕方ないか）

カイはそう思い自分の反応速度を10%上昇させる、ジオン軍の兵法書 初級編 を10000ポイントで入手した。

更に、反応速度を30%上昇させる、ジオン軍の兵法書 中級編 も続けて50000ポイントで購入し、カイは自分自身を強化させた。

すると、カイの技術力Lvが6にレベルアップする。

（予想以上に早いレベルアップだ、自己強化は高額な代わりに技術

力が上がり易いのか？)

カイはそう考え、喜びに笑みを浮かべた。

次のMSの開発は技術力がLv8必要だ。

何を開発できるかは、欄が?????となっていて、わからない。

最初には技術力Lv3までの情報は、公開されていたのだが、それ以上はわからなくなっているようだ。

しかし、カイは叔父からある程度の攻略情報を聞かされている。

(アンドロイドの必要技術Lv10必要だった筈だ。それ以外の情報もメモしておこう)

カイはそう思うと、紙に叔父から聞かされた情報をメモしておいた。

次に問題のザクマシンガンだが、口径を150mmに変更し、尚且つ初速を上昇させ、射的を伸ばしたオリジナルのザクマシンガン、

ザクマシンガン巨砲型に変更しようとした。

しかし、通常のザク？では反動が強すぎて、実践で使えなかった。

よってカイは自機専用の兵器として、このザクマシンガンを使う事にし、これからはドムを量産していく事に決めた。

しかし、小型種にはザクマシンガンは有効で、しかも中型や大型もザクマシンガンで倒す事は可能だ。

その為カイは、一応ザクを十機は揃えておく事に決め、それ以外をドムにする事に決めた。

**脅威の陸上型MS（後書き）**

閲覧ありがとうございましたm——m

巨大、進撃する要塞（前書き）

2話目投下します（ハ・ハ）／



## 巨大、進撃する要塞

今日もカイは、魔物を狩り続けていた。

ドム40機にザク11機の部隊は、大量の敵を狩り続けてはポイントに変換していく。

（最近では作業になってきた、対レーザーコーティングで光線も対処できるようになったし、もうすぐ技術力がLv8になるから、新しい機体も開発できる。  
そろそろ行動範囲を広げてみるか）

カイはそう考え、部隊を何時もより進めて行った。

敵は突撃するしか能がないようで、次々とロケット砲の餌食になっていく。

時々ロケット砲の弾幕から敵が抜けてきても、ザクマシンガンによってひき肉にされる。

「むっ、あれは何だ？」

カイはMS部隊を進めている最中、かなりの数の魔物をレーダーで察知した。

（これは何かあるようだな）

カイ部隊を慎重に進めていき、敵も徐々に近づいてきた。

「ちつ、レーザー型がいるのか」

カイは光線を撃ってくる敵の事を、レーザー型と呼ぶようになっていた。

超距離攻撃を仕掛けてくるレーザー型は、一番厄介だとカイは感じていた。

しかも、今回はカイは新しい種類の魔物を発見していた。

その姿は、カイの今まで見た魔物の中でも一番巨大で、鈍重な魔物だった。

その魔物は次々と体から小型の魔物を生み出し、カイ達に向かって殺到させてきた。

「ふん、デカブツが。  
ここまで接近できれば、最早レーザー型も敵ではない!」

カイはそう言うとき、ザクマシンガンを乱射し、先ずは厄介なレーザー型から片付けていく。

次にカイは巨大な魔物に標準を定めて、ザクマシンガンを発射する。

ザクマシンガンの弾丸は、敵の身体を抉っていくが、敵が巨大な為か致命傷を与える事ができない。

「弾丸の無駄か」

カイはそう言うとき直ぐに武装を変更し、360mmロケット砲を自機に装備させた。

通常のザクが反動で故障するような口径だが、カイの改造を施したザクは、壊れる事なく、このロケット砲を放つ事ができる。

ロケット砲の火が吹き、魔物に命中、続けて放ったドムの同口径のロケット砲も魔物に命中し、魔物を爆散させた。

「むっ、あの敵は一体10000ポイント貰えるのか！  
これは旨みがある敵だ」

実際には要塞型の体内にもBETAがいる為だが、カイにはわからない。

カイはその後近づいてきた大型の魔物を見ると、ロケット砲を粒子に変えてビームサーベルを構える。

魔物の長く太い腕のような物がカイのザクに向かって振るわれるが、カイはその腕をヒートサーベルで切断し、更に魔物の身体を真一文字に切り裂いた。

「ははっ、最高だ！！」

カイは次にザクマシンガンを両腕に一丁ずつ生産し、辺りの小さな魔物を掃討する。

そして、最後にスラスターで部隊は空中に滞空し、その後クラッカ―を下に投げつけ、一体残らず魔物を退治し終えた。

（巨大型は三体いたが、中には一体5000前後の奴もいたみたいだ

この群れだけで、三万ポイントも稼げた。  
巨大型は狙いだな)

カイはそう思い、更に敵を探しに部隊を動かした。

最近は開発に力を入れる事を止めていないが、ポイントの貯蓄もカイはある程度進めていく。

軽くしか読んでいなかった説明書をカイは最近じっくりと読み、ショートカット設定という機能をカイは、発見した。

ショートカット設定とは、例えば、ボタン一つでMSの生産と武装の生産、CPUの生産を一度に行うよう設定できるようにしたりできる機能で、これでカイは効率良くMSを補充できるようになった。

カイはザクの雇用や、ドムの補充等を幾つか設定し、武器もボタン一つで変更できるように設定した。

これで部隊の武器を一瞬で変更したり、僚機が撃破された瞬間にまた生産して補充する事ができる。

「技術力Lv8になったら、拠点防衛用MSを20機と、自動補充施設を設置し、拠点の強化も進めるか」

カイは顎に手を当てて考えながら、そう呟く。

技術力Lv8の新MSを生産したら、カイは三日かけて辺りを探索するつもりだった。

現在地が自動で確認できる、地図を生産できたのでカイは現在地が中国であるとわかっていた。

自動翻訳機も生産し着けたので、中国語でも理解できる筈だ。

できるなら、日本に行きたいとカイは考えていたが、今の状況がわからないので、とりあえず人を探す事が先決だと考えていた。

（本当は技術力をLv10まで上げてから行動に移した方がいいかもしれないが、いい加減ポイント稼ぎだけでは飽きるからな）

カイは更に数日でポイントを稼いでいき、MSを増やす事に専念していった。

そして、その頃。

ようやくカイの存在に気づく国が出始めていた。

かなり遅い発見だが、各国は防衛にそれだけ必死なのだろう。

そして、カイの存在に最も早く気づいた場所は、カイの部隊を見て、何とか最初に接触しようと、模索を始めていた。

そして、その間もカイは開発を続けていく。

技術力Lvは8に上がり、新たなMSが増えるが、カイはそれほど喜ぶことはない。

Lv8で開発できた機体はなんと4つ、ゴッグとアッガイ、ズゴック、そしてグフだ。

ズゴックはいずれ活躍できる筈だが、グフは完全に接近戦タイプであり、カイはグフの生産に乗り気ではなかった。

それ以外の二つは、生産されるかさえ微妙な所だ。

とりあえず4種とも一応開発はされたが、生産されたのはズゴック一機とグフ一機だけだった。

ズゴックは様々な改造を施し、真紅と黒のペイントを施して、カイの水中専用機にする予定のようだ。

そして、カイは今回のMSはまだ使えないので、戦力は今回の開発ではそれほど変わっていないと判断し、拠点から離れる事を一旦断念した。

そして、しばらくは開発に専念していく事にして、技術力Lv10を目標にする事にした。



巨大、進撃する要塞（後書き）

閲覧ありがとうございました

## カイの野望（前書き）

修正版です。

閲覧よろしくお願ひします m ( m

## カイの野望

魔物を狩り続け開発に集中した結果、ついに技術力Lvが10に到達した。

新たに開発できるようになった機体は、ゾック、ギャン、リックドムの三種類。

カイはおそらく次の13Lvで、ゲルググが開発できるようになるだろうと予想した。

そして、今回の目玉は何よりもアンドロイド開発だろう。

機体の操作Lvは、アンドロイドLvを最大まで上げたLv10で、CPUのLv10と同等だったので、他の仕事もできる分、アンドロイドの方が優秀だ。

しかし、カイはいきなりアンドロイドを大量生産する事はせずに、男性タイプを4体と女性タイプ4体しか製造しなかった。

男性タイプにはそれぞれ改造したグフかドムに搭乗させ、女性タイプにはオペレーターをさせる事にカイは決めた。

続けてカイは蠅のような偵察機を開發生産し、更にレーダーも高性能に改良して、効率良く動けるようにした。

（所詮はアンドロイド欲情はしない。

オジキが見てたら、終わった後からかわれそうだしな）

カイはそう思うと、普段通り魔物を狩りに出発する。

ポイントの貯蓄がもうすぐで50万ポイントになり、貯蓄が終わったら拠点を放棄して移動する予定だ。

「それにしても、本当に生きている人間に出会わないな。まさか人類が絶滅した世界とかは、ない筈なんだけどな」

カイがそう言いながら、隊を進ませていると、レーダーに赤でも黄色でもない始めて見る、白い点が映し出された。

『未確認物体が現在魔物と交戦中です。

生態反応から、おそらく人間だと予測されます』

カイはオペレーターの言葉を聞き、どうするか考え始める。

これは果たしてイベントなのか、カイは考えるが答えはでない。

しかもオペレーターから更に詳しく聞くと、どうやら人間側の方が押しているようだ。

ここで加勢しても、混乱を生むだけだろうとカイは判断し、速やかにその場から撤退する事に決めた。

そして、カイ達は撤退し、しばらく進み続けるが、何故か再度白い点が前方から接近してきていた。

（何だ、先ほどとは別の部隊か？）

カイは考え、ドムとザク達に警戒態勢を取らせながらも、部隊の移動を停止させた。

すると、相手の部隊もカイ達の部隊が見える位置まで来ると停止し、両部隊は向かい合う。

相手の機兵の内、一番先頭にいる機兵はカイ達を観察していく。

大量のドムと十機のザク、それに四機のグフと真紅のザク一機。

相手の機兵は、カイがリーダーであろうと判断したようだ。

外部スピーカーで、カイに向かって声をかけてきた。

『こちらに敵意はありません、代表の方はいらっしゃいますか？』

相手は英語でそう話しかけてきた。

英語はおそらく公用語として扱われていると思われるので、相手が何処の国の機兵なのかはカイはまだ判断できない。

『私がこの隊の代表です』

カイはそう言うと、一步前にザクを進めた。

『こちらは中華民国特殊戦術部隊です、そちらの所属をお聞きしてもよろしいですか？』

その言葉にカイは、一瞬考えた後答える。

『こちらはジオン傭兵部隊です。  
国の所属では残念ながらありません』

カイがそう答えると、何故か相手の部隊にカイは歓迎され、その部隊の基地に招待された。

(……イベントか？日本軍かと思っていたが、台湾軍か。  
まあ、話しだけは聞いておくかな)

カイはそう思うと、10万ポイント程消費し、自分の身体能力を二倍程に改造した。

カイは基地まで案内されると、MSから降りて軍の司令官の部屋に案内された。

カイはジオン軍の弁術指南書を部屋に入る前に慌てて使い、司令官の部屋に入った。

司令官の部屋のカレンダーを確認すると、驚くことにこの世界はまだ1976年年らしい。

カイは司令官の話を聞きながら、平行して基地にばらまいた蠅型の盗聴機からも情報を仕入れていく。

そして、魔物がBETAということ、BETAの進行で中国がかなり追い込まれている事等がわかった。

そして、追い込まれた中国は中華民国に共闘を提案してきたらしい。

台湾と中国は元々政治的には犬猿の仲だった。

しかし、こうなってしまったら中国に頼るしかない。

何故なら台湾は小さく、中国の助けがなければ、BETAに呑み込まれるしかないからだ。

しかし、その状況で台湾はある地域で、BETAが次々に駆逐されているのを発見する。

カイ達の部隊だ。

そこで中華民国政府は、カイに協力を依頼し、BETAから台湾を守りたいのだそうだ。



（提示された額はなかなかだな、ドル払いなのもいい。  
もし、裏切っても蠅型の偵察機で丸わかりだ）

「わかりました引き受けましょう」

カイはそう考え、依頼を受けることにし、司令官と握手を交わした。

そして、カイはそれからめざましい活躍を戦いの中で中華民国に見せつけていく。

ドムの360mmによるBETAの駆逐、しかも無限に弾を絶やす  
事なく打ち続けていく。

その上、カイの部隊のMSに搭載されたCPUは八時間稼働したら  
一時間休憩が必要だが、実質一日に三時間も休憩せずに働かせる事  
ができる。

しかも、MSは破壊されてもすぐ補充され、逆にBETAを倒す程、  
MSの数はどんどん増えていく。

（金は貰える上に、ドムの数は既に500機を越えた。  
イベントは起きないが、今のところ順調だな）

そして、カイの防衛力を過信した中華民国は、中華人民共和国の共闘要請を拒否。

中華民国政府は、カイを手放す事が出来ない状態に自分達を自分から追い込んでしまった。

（犬猿の仲だとは思ってたが、ここまで愚かな判断をする程だとはな）

カイはそれを聞いて呆れていたが、まあ色々事情があるのだろうと自分を納得させた。

台湾を守るためにカイは、現在それなりに苦労していた。

相手の物量攻撃は今まで戦った時の比ではない程激しく、その為MSは次々に破壊されていった。

そのためカイは、一旦開発を停止し、MSの生産に集中した。

一体破壊される度に三体生産する感じでカイは、次々にドムとズゴックを生産。

ドムだけで現在は500機。

ズゴックは300機稼働している。

ズゴックは水中専用であり、島国である台湾を守るのにはかなり適している。

更にカイは台湾政府と交渉し、台湾に食品会社を設立した。

台湾は現在、中国からも食料が輸入できず、深刻な食料問題に直面している。

そこでカイが僅かなポイントでそこそこ上手い食料をどんどん生産し、どんどん安く売っていき、民衆も喜び、カイも喜ぶ。

食料生産は、ポイントがほとんどかからなくなってきたので、リスクは少ない。

作業用のアンドロイドにポイントを消費するが、そこは割り切るしかないだろう。

そして、更に1ヶ月が経過すると、また新たな問題が浮上してきた。

それは今まで只でさえ大打撃を受けていた台湾の食品会社が、カイの会社の安価な食品が出回ったせいで次々に倒産。

大量に浮浪者が増え始めたようだ。

カイもそれは予想していたが、仕方ないとも思っていた。

千人浮浪者が出るかもしれないが、そのお陰で二千人が餓死せずに済むかもしれない。

だが、台湾政府はそれを黙って見ている訳にはいかない。

雇用の促進と、BETAの対策の為、軍備を拡張する事を表明した。

それを聞き付け、カイはザク？とアツガイの販売を政府に打診した。

アツガイとザク？は生産性に富んでいて、今のカイの技術力Lvである12ならば、様々な武装付加を施しても、一機につき800ポイントで済む。

しかも、その機体がBETAを倒したら、カイにポイントが入ってくる。

現在対BETAの主力は戦術機だが、まだ第一世代。

ザクは機動力こそ、第一世代より少し高いだけだが、火力は第三世代並み。

しかも、ヒートサーベルによる接近も可能。

操作方法はどちらかの手でレバーを握めば、まるでゲームのように簡単に動かせる仕様だ。

カイの打診の後、戦術機第一世代とザク？が未来で行われた事を再現するかのように対決する事が決定した。

ザク？と対決する機体はF-4ファントム。

アメリカ製の第一世代戦術機だ。

F-4ファントムには台湾人パイロットが乗り、ザク?にはカイが生産したアンドロイドLv13が乗ることになった。

ザク?とF-4ファントムが対峙し、試合は開始された。

F-4ファントムの武装は105mm滑腔砲と機関銃。

機関銃はザクの強化された装甲にはそれほどダメージを与えられない。

その上、105mmの滑腔砲は旧ザクが使っていたザクマシンガン  
の劣化品。

火力もザクが上回っている。

F-4ファントムの滑腔砲を回避し、ザクはカイによって追加されたホバーによってF-4ファントムとの距離を詰める。

防御力が高い第一世代戦術機のだが敏捷性はザクには劣る。

ザクはヒートサーベルをF-4ファントムのコックピットに突き付ける。

そして、勝敗は決した。

政府はしばらくの検討し、ザク？100機をテスト用に導入する事を決定した。

そして、ザクは中国本土において戦いでめざましい成果を上げていくのだった。

ザク？の生産開始。

しばらくした後、アッガイの生産も開始する。

両機の値段は第一世代戦術機の十分の一程だ。

問題点はザクの修理が不可能な点だが、カイが簡単に使用できる修理用機器やエネルギー補充用の機器を販売し、問題は解決した。

MSの生産には、カイが設置した拠点を利用。

技術Lv12で出現した、拠点開発の一つである量産機工場を設置し、地元の住民を雇っていった。

これを設置してMSを生産すると、量産機ならばポイントの消費が抑えられるようだ。

（これって内政ゲームだったか？）

カイは疑問を懐くが、叔父がやろうと思えば、ジオン公国を建国できると言っていたのを思い出した。

（かなり自由度の高いゲームだからな、もしかしたら台湾を足掛かりにして、ジオン公国を作れるんじゃないか？）

カイはそう考え、これからの予定を頭の中で考えていく。



## カイの野望（後書き）

閲覧ありがとうございました m (——) m

## 新進気鋭のMS軍団（前書き）

今回はツツコミ所が多いかも、反応が怖い。

感想をくれた皆様ありがとうございました。

閲覧してくださる皆様にも、感謝していますm（——）m

## 新進気鋭のMS軍団

中華民国が中華人民共和国から完全に独立を宣言。

それに反対した中華民国の政治家は、中華民国から脱出し、中華人民共和国と手を結んで統一中華戦線を結成した模様。

しかし、それでも統一中華戦線はBETAに押され続け、後退し続けているようだ。

カイはゲームの世界で既に100日、つまり現実で10日経過したのだが、まだ出るつもりなかった。

カイはまだゲームをクリアできそうもない為、ある手段に出た。

それはゲームの世界と現実世界の時間を更に離す事だ。

具体的には、現実世界の1日をゲームの世界の100日にする。

これでカイは後8年近く、この世界にいる事ができる。  
これをやると、ゲームが終わった後に頭が痛くなるらしいのだが、カイはやむを得ず決行する事にした。

そして、カイがゲームの設定を弄った瞬間、現実世界で植物人間と化していたカイの身体は、死亡してしまった。

しかし、カイはそれに全く気づく事はなかった。

そして、カイはその日、CPUと台湾軍兵士から供給されたポイントを使い、開発を進めていた。

そして、それが終わると予定されている、台湾政府総督との対談が行われる施設に、アンドロイドの秘書を連れて向かう。

「貴社のザクは相変わらず素晴らしい性能を誇っています。  
しかし、一部のパイロットからは機動力に不満が出ていると報告が出ています。その辺りは改善はできますか？」

カイは台湾総督と握手を交わし、席に座ると早速そう尋ねられた。

「そうですね……我が社の傭兵部隊で正式に採用されているドムを配備できます。

しかし、やはりザクと比べるとコストが掛かりますので、値段も上がってしまいます」

カイは総督にドムのスペックが書かれた紙を手渡しながらそう伝え、それからドムの性能を総督に伝えていく。

目玉はやはり、強化されたホバーにより、第二世代戦術機並の機動力を実現した所だろう。

しかも、近づく敵に対しては胸から拡散ビームを隠し持ち、小型のE T Aなら仕留める事ができる。

更にドムの主装備のロケット砲、ジャイアント・バズは、確実にB E T Aを仕留められ、要塞級を数発で仕留める事が可能だ。

そして、カイの交渉で少しずつだがドムも配備していく事に決定した。

数万の大群で責めてくるB E T Aに対して、M Sはこれまでかなり少数だったのだが、今はザクを何と一万体生産する事に成功している。

最も、台湾の人口はB E T Aの襲撃により減少し、人口は1130万人程しかない。

最も中国で台湾上陸に備える兵士を入れれば、もう少し増えるが。

よって、一万のザクの内80%以上はカイのアンドロイドだ。

なので台湾の総督は、カイに大きな態度を取る事ができない。しかも、カイの部隊を傭兵として雇う費用の一部を、台湾政府は勲章や軍の位等で免除してもらっている。

因みにカイはそのお蔭で、カイは中華民国MS部隊指令の位をもらい、現在少将として働いていた。

名目上政府が上だが、政府はカイに頭が上がらず、中將や大將も無闇にカイに命令できない。

カイは総督との話を終えると、自らが建設した軍事基地に向かい、あるMSの前に立っていた。

「遂に完成したか……ゲルゲグが」

カイの目の前にはザクに類似した、新たな機体が佇んでいた。

深紅地に黒い線を走らせた、カイ専用の塗装を施しており、既に前のザク以上の改造が施してあった。

「愛機<sup>ザク</sup>から変えるのは残念だが、ザクを改造するにも、残念ながら限界があるようだったからな」

カイはそう言うと、ゲルググに搭乗し、しばらくの間操作練習に励んでいく。

（まだ微妙に機体と操作が一致しない。  
慣れるまではザクの方が、良さそうだな）

そう思い、練習を終了させた。

実はゲルググの後に更にもう一機生産が可能になったのだが、カイはまだそれを生産すらしていない。

その機体の名はビグ・ザム。

その全高はザクの約三倍の59.6メートル。

360度全方向にメガ粒子砲を放つ事ができ、艦艇を一撃で仕留める威力を持つ。

しかし、ゲルググのビームライフルもそうだが、ビーム兵器を無闇に使うのは、よろしくないとカイはこの世界の技術力を感じていた。

普通のゲームならば、気にせずオーバースペックで無双してもいい気がするが、これはカイの叔父が作成したゲームだ。

あの凝り性の叔父が作ったゲームでそれを行うと、どうなるのか予想できない。

一先ずカイは、ビーム系兵器を水中戦用のMSにのみ使用させ、水中でしかビーム系兵器を使えないと思わせるようにした。

そして、かなり遅れて何故か突然連邦のボールが、開発可能になっていた。

カイもこれには首を傾げたが、もしかしたら叔父が連邦のMSもかなり遅れてなら生産出来るようにしていたんだと自己解釈し、納得する事にした。

最もボールは生産性は高いが宇宙でしか使えず、ザクの蹴りでやられるレベルなので、カイは開発こそしたが、生産はしなかった。



そして、更にゆっくりと時間は経過していく。

カイが台湾軍に入隊してから、一年が経過しカイの技術力はレベル20となった。

Lv19から20までの過程で、かなりの開発が必要だったので、Lvアップも徐々に遅くなってくるだろう。

カイが今回開発出来るようになったのは、ガルバルディ とガンタンクだ。

未だザクが主力の戦場ではハイスpek過ぎるため、ガルバルディの生産は未だ行われていない。

逆にガンタンクは操作しやくなる機能が予想以上に効果を発揮し、初心者でもほとんど訓練無しで乗れる程の、操作しやすい機体になっていた。

その為、後方支援用に韓国軍に出荷していく事が決定し、BETAに対して成果を上げていった。

そして、最近ではMSの情報を盗もうとする産業スパイが、多数カイの設置した工場に侵入するようになっていた。

しかし、MSの生産はアンドロイドがほとんどを行い、民間人は簡単な作業を行う仕事にしか着けないので、各国のスパイはなかなか情報を手に入れる事ができない。

しかも、アンドロイドが組み立てるので、MSの設計図はアンドロイドの媒体の中しか入っていない。

アンドロイドを脅しても意味がなく、アンドロイドを破壊すれば粒子となって消える。

ザクも同様に、破壊された部品は戦場で回収できず、解体する事も粒子となる為不可能だった。

その間にも歴史は進む。

欧州では連合軍が大反功が実行され、BETAの拠点であるハイヴへ連合軍が襲撃した。

しかし、結果は惨敗。

欧州の連合軍は致命的なダメージを受け、兵力を大幅に失った。

カイはその作戦の一部始終をスパイさせていたアンドロイドのアイカメラから見ていたが、ハイヴに蠢く凄まじい数のBETAを見て、BETAの危険性を再認識した。

（MSに慣れていなかった台湾兵も、一年の間に練度を上げていった。

そろそろザクのスペックを向上させ、発表する事にするか）

カイがそう考えた三ヶ月後、カイは新たにザク？改修型を発表、基本能力を全てドム並の機動力と全体強化を施されたザクが台湾兵士に支給されていた。

カイが考えるザクの展望は、何かを犠牲にする事なく、全体を強化していくバランスの良い機体だ。

防御を犠牲にしたり、機動性を犠牲にして突き詰めていくのは、他の機体でやればいいと、カイは考えている。

実戦で戦う兵士達からのザク？改修型に対する評価は良好だったが、

一部ドムを愛機としている兵士から不満の声が上がっていた。

機動力が売りのドムとザク改修型の機動力が同じでは、ドムの影が薄くなっていく。

その為カイはザク改修型発表の半年後、要望に答えてドム改修型を発表した。

機動力が更に増加され、ジャイアント・バズにも改良を加えられたドムの機動力は、戦術機第三世代に匹敵し、火力はそれ以上だ。

しかも、ザクより遥かに強固な装甲は、犠牲にされる事はなく、逆に多少強化された。

これらの無茶な性能強化が可能になった背景には、カイの技術力レベルがLv22になったという背景もあったかもしれない。

ドム改修型の生産は月産30機程だったが、台湾兵がドム改修型を見る機会も徐々に多くなる。

凄まじい攻撃に加えて機動性に富み、ザクよりも強固。

台湾兵からは、高機動要塞等と呼ばれる事もあったようだ。

そして、カイは久しぶりに台湾から離れ、ユーラシア大陸へと降り立っていた。

理由は今まで訓練したカイ専用ゲルググの実戦を、カイ自身が行う為だ。

ジオンの兵方書 上級編を使ったカイの反応速度は二倍になっており、練習によってゲルググの習熟度を上昇させていた。

武装は高出力ヒートサーベルと、ザクマシンガン改。

カイによって改造が加えられており、性能的にはあのガンダムよりもハイスペックだ。

久々の実戦にカイは多少緊張していたが、BETAの大群を前に気を引き締める。

『あんまり先行しないでくださいね』

カイが進もうとするとカイの直ぐ後ろにいる、四機のMSの内の一機がそう言った。

その男の名はシメイと言い、カイの側近の1%それ以外の二人の側近はアンドロイドだが、アンドロイドLv20は、人間との見分けが全くつかない程の完成度であり、人間よりもスペックはかなり高い。

台湾人の側近二人はそれなりにMSが扱えるが、実戦兵士には劣る。

その為、操作性と使いやすさに台湾軍でも定評のあるザク？改修型に搭乗していた。

因みに、側近のザクには頭部にブレードは付いていない。

そして、アンドロイドの側近二人は、第一線で戦う兵士すらも上回る操縦が可能だ。

その為機体は、新たに開発された機体であるドワッジと、グフを改造したグフカスタムに搭乗させてある。

ドワッジはドムの発展機体であり、ドムを越えた更なる機動力と、砂漠でも壊れない頑丈さがうりの機体だ。

グフカスタムも側近戦に置いては、他の追隨を許さないスペックとなっている。

その他にも、ドム十機とザク二十機を引き連れた部隊は、BETAに向かってMSを進めて行く。

『前方にBETAの反応があります。  
総数は約300体ほどだと思われます』

オペレーターの言葉を聞き、カイは口許に笑みを浮かべる。

ようやくゲルググの実戦を行えるのだ。

カイが出撃する事に、台湾政府も猛反発したのだが、結局カイが押しきった。

台湾政府は、今や台湾の心臓部分であるカイが負傷した時の損害を予想し、顔を青くさせていた。

『問題は何もない、このゲルググは現在この地上で最強のMS…  
…いや、現在では地上最強の人型兵器だ』

カイはそう言うと、BETAの大群に向かって突貫する。

無線でその言葉を聞いた瞬間に、カイが突貫し始めたのを見て側近達は驚き、MSの動きを停止させた。

しかし、それ以外のMSはアンドロイドとCPUしか搭乗、搭載されていなかったので動揺しない。

直ぐ様援護射撃を行い、側近のグフカスタムはカイに付き従って突貫していく。

『「ははっ、遅い遅い」』

BETAの光線を凄まじい勢いと反射神経で避け、カイは笑いながらそう言った。

突き進みながらも、ゲルググはザクマシンガン改をBETAに掃射し、次々とBETAを片付けていく。

『「現最強のスペックを見せてやろう」』



カイが改造が施されたヒートサーベルを振るうと、ヒートサーベルの刃が伸びる。

カイはヒートサーベルを自由に伸び縮みさせられるよう改造し、更にヒートサーベルの出力も強化していた。

『「ふむ、300では手応えがないな」』

ゲルググの周りには血によって大量の血溜まりが形成し、その中でも真紅のゲルググは側近の目にも良く映った。

『「やはりザクに比べるとクセが多少あるが、特に問題も見当たらない。」

次の群れと戦う時には、アレを試してみるか」』

カイはそう言うと、ポイントで変換したドリンクを飲み、一息つく。

台湾近辺の中国は、まだBETAに対して戦線を維持している。

しかし、それ以外は押されているらしい。

（これは支援も考えるべきかもしれないな）

カイはBETAを踏みつぶしながら、そう考えていた。

## 新進気鋭のM S軍団（後書き）

どうだったでしょうか？

カイ専用ゲルググに関してですが、本来のゲルググよりも更にポイントをつぎ込んで生産した、魔改造です。

ゲルググは地の利もありましたが、ZZでも使われて活躍はしています。

魔改造を施せば、Zくらいの機体には追い付けるのではないかと思います。

ポイントコストは、カイは自機の為に気にしていません。

実はカイのゲルググには、更に秘密がありますが、それはまた……。

後皆様にお聞きしたいのですが、戦術機は1師団につき108機ですよね？

多くても1師団で、324機だと自分は思っています。

違ふのなら、どうか教えてください。

合  
つ  
て  
た  
ら、  
M  
S  
の  
数  
が  
と  
ん  
で  
も  
な  
い  
事  
が  
発  
覚  
し  
て  
し  
ま  
う  
(  
^  
|  
^  
;  
)

外交の始まりと戦いの始まり（前書き）

今回は前編です、お楽しみ下さい。

## 外交の始まりと戦いの始まり

そろそろ外交にも力を入れないと不味い状況になってきたと、カイは思い始めてきた。

台湾は中国から独立したはいいが、そのせいで中華統一戦線との関係は余計に悪化している。

更に台湾は他国との繋がりも薄く、MSには多少世界の目が向けられていたが、各国は戦術機の開発に現在忙しく、そこまで注目はされていない。

そこでカイはまず、交易によって国交を繋いでいくという、安直な手段を取ることにした。

安直な手段なのだが、カイの能力があれば、国交とプラスして外貨も稼ぐ事ができる。

そして、肝心の輸出する品物だが、カイが目をつけたのは 食品だ。

カイは台湾の近海に巨大施設を建設させていく。

生産能力を使いながら、MSとアンドロイドも導入して建設の効率を上げ、施設は僅か1ヶ月で完成した。

ちなみに政府には了解をとり、最近では政府にも少しずつアンドロイドの人員を潜ませていき、密かな支配をカイは進めていていた。

台湾近海に建設された巨大施設は、大量の食料を生産する為の工場だ。

人工的に食料を作る技術はこの世界にもあるようなので、遠慮はいらない。

カイは工場でどんどんと食料を生産していった。

そして、本物と味も見た目も変わらない人工食品は、日本と韓国に輸出した。

値段は人工食品と同じ値段で、味は天然物と同じ台湾の食品は、日本と韓国で反響を呼び、続けて中国にも輸出される事となった。

食料輸出国であるオーストラリアやアメリカからは、多少非難されたが、食料の需要はなくならないので、そこまで責められる事はなかった。

更にBETAに押され続ける中国に対して、MS部隊の派遣を打診。

向こうは揉めたようだが、MS部隊の派遣は結局受理された。

MSはやられると粒子になる為、技術が盗まれる心配はない。

が、MSが一瞬で消えていくのは、余りにも不自然過ぎる。

今さら遅いかもしれないが、カイは技術Lv21で手に入れたブラックボックスという名の改良を、概存の全てのMSに施した。

ブラックボックスを施すと、MSは壊れても粒子化しなくなる。

更に大破したザクを回収されても、隠したい部分だけ複雑になったり未知の金属の部品となったりして、技術の秘匿を行える技術だ。

実はCPUにも、違和感を持たれていたのだが、それについてもカイは説明している。



少年ジャンプで連載されているトリコに登場するG Tロボ、から取った設定を使って。

実際に作ったその機能に、カイはわざと決定を作っていた。

特殊な服を着てヘルメットを着け動くと、操作しているザクがその通りに動くという機能は、台湾政府に注目され、危うく世界にも目を向けられそうになった。

だが、その機能にも欠点があり、操縦者の運動能力が大いに機体の性能を左右してしまい、機体の本来の性能を発揮できない所がある。

他にもカイは、MSの壊れた部分に痛みが完璧にフィードバックする機能もつけていた。

これにより、MSの死亡＝操縦者の精神的な死になり、それなら普通に操作した方がマシだという事になり、カイはホッとした。

CPUの方が前述の機能より、遥かに低コストで尚且つ強かったからだ。

そしてカイの傭兵部隊は相変わらず、痛みに対して訓練しているという設定で、CPUを使いまくっていた。

暫くすると、中国との関係も、中国が押されている事もあり、中国の方から近づいてきた。

カイはこの間にも台湾近海に更に巨大軍事基地を建設し、アンドロイドとMSを大量に建設していく。

基地を派手に建設できるのは、世界の目がまだ台湾に向いていない今が最後のチャンスだ。

カイは自重せずに、要塞を凄まじい勢いで近海二ヶ所に建設した。

更にカイは微妙に悩んだのだが、ジャブロー計画を台湾軍部と話し合っていた。

台湾近海に超巨大水中基地を建設、BETAに備える計画だ。

カイが迷った所は、地球連邦の本陣営の名前をジオン軍側が付けていいのか、という所だが、カイが今いる場所は地球。

コロニーではないので、結局結構する事に決めた。

そして、その頃になると徐々に台湾政府と軍部にも、裏でカイが操るアンドロイドが、侵食し始めていた。

後は時間をかけて侵食すれば、何れカイが軍も政府も裏から支配できる。

（そろそろBETA殲滅後も、視野に入れてミノフスキー粒子を開発するか）

カイはそう考える。

ミノフスキー粒子とは、高性能なレーダーや探知機を使えなくさせる兵器であり、これをばら蒔けば他国はミサイルも戦闘機や潜水艦のレーダーも使えなくなる。

最も、これはBETA戦後に使用する兵器。

かなり後にならないと、使用される事はないだろう。

「閣下、大変です！

台湾に向けてBETAの大群が進行中という連絡が入りました！！」

カイの部屋にカイの側近の一人であるシメイが入ってきて、そう伝えてきた。

「そうか、数は？」

（まあ、そろそろ来るとは思っていたがな）

カイはそう予想していたので、慌てた様子は無い。

中国が今まで必死に抗戦し、台湾も援護していたが、もうそろそろ限界だと思われていたからだ。

「進行してくるBETAの数は十万を超えています。中国に配備されている、8000機の機体では厳しいかと思われます」

シメイがそう言うのと、カイは直ぐに援軍の手配を進めさせる。

「俺も出る。」

とにかく時間が惜しい、急ぐぞ」

カイはそう言うと、席を立ち中国へ向かう準備を始めた。

一方、中国BETAを向かえ撃つMS大隊は、緊迫した雰囲気包まれていた。

MS8000機に対して敵は十万以上のBETA達、状況は絶望的だ。

しかし、MS8000機というのは、決して少ない数ではない。

他国の師団にもMS部隊が存在するが、通常は一連隊しかない。

戦術機の連隊は通常108機。

日本から中国に派遣されている師団には、三連隊の324機派遣されるらしいが、それでも所詮それだけだ。

今ここに存在するMSの中でガンタンクを抜いても、日本の戦術機数より今の台湾軍のMSの機数の方が多い。

しかし、台湾軍にはMSしかない。

艦船の数はまだ少なく、援護射撃はガンタンクに任せるしかない。

他国の軍では、戦術機を援護する戦車部隊と戦艦が多くいるのに対して、台湾軍は遅れを見せていた。

（大丈夫だ、此方には最新式のMSである改修型が配備されている。しかも、いざとなったらアレを起動させる許可をカイ閣下から頂いている）

台湾防衛軍の指揮官は、初の大規模戦闘に緊張し、顔を青くさせながらもそう自己暗示をかけようとしていた。

既にMS7000機と少数の戦車部隊が出撃し、敵を向かえ撃つ準備は整えている。

台湾に向けて海を渡る前に、中国で食い止める。

台湾兵士達は覚悟を決め、BETAの到来をひたすら待ち続ける。



数が多すぎる。

余りの敵の数に、ダメージを与えられたのかすら、確認する事はできない。

戦車の主砲を武器としたマゼラ・トップ砲の弾は、凄まじい破壊力で敵を葬る。

しかし、それを乗り越えBETAは止まる事なく進行を続ける。

「来るな、来るな、来るな、来るなあああ！」

兵士は汗を滴らせ、マゼラ・トップ砲をBETAに向かって乱射する。

弾丸はほぼ無限大、補給できれば尽きる事はない。

そして、BETAも黙って攻撃を受けているばかりではない。

空が光り、凄まじい速さで光線がMS部隊に向かって、飛来して来る。



しかし、それはMSに当たる事なく、途中透明な壁に阻まれる。

「対レーザーフィールドの構築がギリギリ間に合ったか」

「はっ、MSの光線による0との事です」

指揮官は部下の言葉でホツとしたが、まだ戦いは始まったばかり。

敵は止まる事がないのだ、何れ確実に接近線となる。

そして、ついにBETAの先方である突撃級が、ジャイアント・バズの射程に入る。

機動要塞とすら呼ばれるドムのジャイアント・バズは、パイロットが自慢するような破壊力を持っている。

何しろ360mmの巨大砲だ、これを受ければBETAの要塞級も只ではすまない。

「ドム部隊、もっと遠慮せずに敵に念入りに弾をぶち込んでいけ。ザク至上主義者供を黙らせる」

ドムの発展機であるドワツジに乗った部隊の隊長は、ドム部隊に向

かってそう鼓舞していく。

ついにB E T Aの姿が、兵士達の肉眼でぎりぎり確認できる距離へと近づく。

「前衛前へ」

ザク改修型の部隊がヒートサーベルを構え、前へと並ぶ。

前衛の全てのM Sは、C P Uが操作している。

破壊を恐れず、全ての機体は突撃して行くだろう。

「進め」

グフカスタムに乗った最新型C P Uの言葉で、ザク部隊は足に仕込まれたホバーにより、凄まじい速さで突撃していく。

怯えを見せる機体は一機も存在しない。

前衛のザクとグフ達は、まず突撃級にクラッカーを投げつけ、突撃級の勢いを多少削いだ後、ヒートサーベルで敵に切り込んだ。

ヒートサーベルは、強固な突撃級の装甲を切り裂き、その有効性を後方の兵士達に見せつける。

しかし、デストロイヤーと呼ばれる突撃級は、停止と言つ言葉を知らない。

ザクが突撃級を次々とヒートサーベルで仕留める中、同時に突撃級とザクとの相打ちが次々に発生していく。

数は敵の方が多いのだ、相打ちされたらBETAの方が圧倒的に有利。

ザクは器用にホバー移動で突撃級の自爆特効を回避しながら、ヒートサーベルで突撃級を片付けるが、余りのBETAの多さに回避しきれない。

その為空中にスラスターで逃げるが、その瞬間光線級のレーザーによる集中砲火を受ける。

いくら対レーザーコーティングを施されたザクでも、レーザーによる集中砲火を受けては耐えきれず、空中で爆散していった。

「大群の突撃級は厄介過ぎる。が、第一陣の前衛は良くやってくれた」

前衛が戦っている間にも、集中砲火は続いていたのだ。

突撃級は粗方片付けられていた。

（先鋒は倒したが、戦いはこれから。  
にもかかわらず、此方の前衛第一陣は壊滅状態か）

指令官はそう思いながら、近づくBETAの第二陣を睨む。

二陣で咆哮を上げるのは、戦車級と要撃級。

突撃級もその群れの中に混じっている。

「要撃級と戦車級はザクマシンガンが利くぞ！  
撃ちまくれ！」

ザク改修型に乗る隊長がそう叫ぶが、叫ぶ前にザクマシンガンは弾を吐き出していた。

ザクマシンガンで突撃級も倒せはするが、当たり所によっては弾かれる。

だが、特に戦車級はザクマシンガンで確実に仕留められる種類だ。

要撃級が長く無骨な腕で前衛のザクを蹴散らすのを見て、兵士達は冷や汗を流す。

BETAとの距離は確実に縮まってきている。

「舐めるな！台湾をこんな所で貴様何かに潰されてたまるか！」

グフに搭乗した兵士が叫び、兵士も混じった前衛第二陣が突撃する。

グフとザク部隊のパイロットは、雄叫びを上げながら要撃級に切り込む。

声が洩れるまで叫び、ヒートサーベルをひたすらグフは阿修羅のごとく振るっていく。

「あのグフ一機、やけに強いぞ。  
グフってあんなに強いのか!？」

兵士の一人が乗るグフの姿を見て、ドムに乗る兵士の一人が驚きの声を上げる。

だが、前衛の奮闘も虚しくBETAは、前線を突破してきた。

要撃級の長く硬い腕がドムの装甲を削り、戦車級がザクに引っ付き装甲を噛みちぎっていく。

「や、やめ……ぎゃああ!！」

また一つ、また一つとMSが爆散し、BETAの群れはMSを呑み込んでいく。

数は力だが、戦争ならば指揮官を倒す事で、戦いを勝利に導く事ができる。

しかし、BETAの指揮官は戦場にはいない。

例えば最後の一匹になろうとも、BETAは愚直に進んでいくだろう。

そもそもBETAにとって人間は敵という扱いですらなく、ただ害虫を処理するかのように、淡々と片付けていくだけの物体だ。

「と、止まれ、止まれよお」

顔中を汗まみれにさせながらパイロットが乗るドムは、ジャイアント・バズを突貫してくる突撃級に向かって放つ。

突撃級の硬い装甲ごと、ロケット砲は相手を仕留める。

だが、次の瞬間倒れた突撃級の後ろにいた突撃級は、倒れた突撃級を吹き飛ばして、ドムに向かって突き進んで来る。

パイロットは更にドムに、ジャイアント・バズの引き金を引かせる。

しかし、弾は発射されない。

「あれ、何でだ、何でだ？早くしないと、早く、早く、あああああ  
！」

単純に弾切れだろう。

しかし、パイロットはひたすら焦り、冷静になれない。

そして突撃級の体はドムの体を直撃、ドムの体は激しく仰け反り、  
ドムの機体は転倒した。

倒れたBETAを弾いた為か、突撃級は減速していてドムは完全には破壊されていない。

パイロットは慌ててドムを起き上がらせようとするが、それを次に  
来たBETAが阻止した。

ドムの体に要撃級のBETAが乗り掛かり、歯をくいしばっている  
ような表情の目のないBETAの顔が、ドムのモノアイによってパ  
イロットの目にアップで映る。



待て、パイロットは言おとした、B E T Aに聞こえる筈もないのに。

次にパイロットが見たのは、自らに迫る巨大な腕。

戦場にまた一つの命が、B E T Aによつて 駆除 された。

「やむを得ん、更に応援で500出せ」

「しかし、基地の防衛が」

作戦指揮官の言葉に、部下がそう返す。

「援軍が後30分程で到着するのだ。

何としてもその間は、B E T Aを前線で止めなければならん。

基地を破壊されたら、最早補給はできなくなる。

アレも出撃させるぞ、許可も頂いた」

指揮官の言葉に、部下は敬礼して応え、指揮官の部屋から出て行った。

指揮官は今でこそようやく平静を装うことができたが、モニターから見える光景には内心凄まじい恐怖を感じている。

モニターを見ながら、無線で指示をMS部隊隊長達に指示を出していくが、その隊長達もBETAによって、殺されていく。

（アレで時間を稼げなければ、もうお仕舞いだ。  
BETAは無尽蔵にいるかのように、溢れている）

指揮官はそう思うと、MS収納庫がある方向に一瞬目を向け、直ぐに指揮を続けた。

「ビッグ・ザム起動」

『問題ありません、MA-08対BETA用試作機の、出撃を許可します。』

『中華民国に栄光あれ』

「出撃する。」

「中華民国に栄光あれ」

## 外交の始まりと戦いの始まり（後書き）

閲覧ありがとうございました、後編は明日投稿する予定です。

## 終戦 赤い刃（前書き）

今回が一番批判が来そうかな？

1977年は昔過ぎたかと、反省しています。

そのせいで、原作が遠い。

ですが、早すぎとの意見もあるので、もう少しテンポは落とすべきかと考えています。

## 終戦 赤い刃

中国に向けて、全速力で台湾の艦隊は進む。

事態は一刻を争う。

援軍が遅れ、要塞が陥落すれば、次は台湾が戦場と化す恐れすらある。

「……………によって、MS部隊は後退を続けているようです」

台湾軍の戦艦の一室でカイは側近のアンドロイドから、そう報告を受ける。

「そうか、では直ぐ出撃だ。」

最新アンドロイド兵10人を呼び、MSの準備にかかれ」

カイがそう命令すると、アンドロイドの側近は敬礼し、戦艦の一室から去って行った。

（MS部隊を8000機揃えてこの様か、まだ兵士の練度は低い。兵士全体のMSへの習熟が、課題になることは今回で十分分かった。

加えて前衛も少ない。

グフの生産を少量にしたのは、間違いだったかもしれない。

カイがそう考えているとMSの準備が整い、カイは戦艦の一室から出て、MS収納庫へと進む。

今回は急遽カイが戦艦を生産し、MSを大量に戦艦に搭載した。

この戦艦の操作方法はMSとおなじく、簡単にできるようになっている。

しかし、訓練された船員は正規の戦艦に乗っているので、艦砲射撃には期待できない。

カイは自らの専用機である、真紅に黒い模様が施されたゲルググに搭乗する。

「カイ機出撃する、追従しろ」

カイの後ろには、最新式アンドロイド十体がガルバルディに搭乗し、追従する。ガルバルディ十機は赤から緑色に塗装されているが、性能は変わらない。

ガルバルディ は第一世代モビルスーツの中では、最強クラスの機体だ。

カイもガルバルディ に専用機を移そうか迷ったが、凄まじいポイントを使って改造したゲルググを使わないのは、余りにも勿体ないので断念した。

海上を飛ぶ11機の最新鋭MS達。

推進剤が無くなることもカイの能力故になく、まもなく戦場に介入することだろう。

そして、舞台はまた戦場へと移る。

「下がれ、のろのろしてると、BETAに尻を食い千切られるぞ」

前衛部隊はクラッカーをBETA達に一齐に投げつけると、ホバー移動で高速で後退していく。

これで新兵器が大して有効ではなかったら、ただ前線が下がっただけになってしまうからだ。



下がり過ぎると、光線級が対レーザーフィールドの膜を通過する。

そうなったら、ジ・エンドだ。

だが、兵士の期待は良い方向に裏切られる事になりそうだ。

地面が揺れる。

そして、突然MS部隊の後ろから、巨大な生物が歩いているような音が聞こえてきた。

兵士達の中には、もしや後ろから要塞級が現れたのかと思い、余裕が無いにも関わらず、MSを振り向かせる者さえいた。

後ろから現れたのは、巨大モビルアーマーであるビッグ・ザム。

ザクの三倍近い大きさを誇るその機体は、一体だけでなく合計三体出撃していた。

ただし、装備された武器は全て実弾兵器。

対レーザーフィールドで、阻まれる武装は一つも装備していない。

そして、本来は360度攻撃が可能だったが、カイの改造によって前方攻撃に特化させられた。

メガ粒子砲こそ撃てないが、火力は本物。

砲門は前方に集中し、通常より5基多い33基の砲門がビッグ・ザムには装備されている。

ビッグ・ザムは、莫大な電気エネルギーを消費しその33の砲門全てから超電磁銃を放つ事ができる。

実弾兵器だが、レーザー砲にも劣らない破壊力が期待できるだろう。

そして、三機全てのビッグ・ザムから電気が進む。

次の瞬間、99発の稲妻がBETAに向かって、横向きに突き進む。

弾は突撃級の5身体を貫通し、戦車級の50身体を通過、要撃級30体の身体も問題なく貫通していく、そして何かを守るかのように並ぶ要撃級の身体も突破した。

そして、遂に光線級に要塞級の身体から脱出した弾は、飛来する。

レーザー級を弾は串刺しにし、弾は遙か彼方に飛んで行った。

一発の弾でその威力だ。

それが同時に99発放たれたのだ。

数千匹のBETAが、一瞬で三機の機体によって一掃された。

再度、超電磁銃を放つのに少し時間が掛かるが、ビッグ・ザムのパイロットは急いでビッグ・ザムに次弾を装填させ、エネルギーをチャージさせ始めた。

勝てるのではないか、いやこの機体が仲間なら勝てる！

台湾兵士はそう感じ、士気は大幅に上昇する。

ビッグ・ザムの破壊力とザクマシンガン、ジャイアント・バズによる援護射撃より、瓦解しかけていた戦場は、何とか持ち直し始めた。

兵士達はこれならば、援軍が来るまで時間が稼げると確信し、雰囲気も悪くない。

しかし、それはほんの少しの間だけの事だった。

突然、対レーザーフィールドの目前に、地中から要塞級が出現した。

BETAとの戦いの歴史は浅く、地中からの襲撃等前線国家しか今のところ知らない。

台湾部隊もBETAの間引き活動を行うが、BETAが地中から攻めてくるのは台湾軍にとって予想外の事態だった。

しかも、出現したのは要塞級。

加えて出現した場所も悪く、対レーザーフィールドの目の前だ。

MSとビッグ・ザムは慌て、要塞級の大群に一齐に射撃を加えていく。

しかし、要塞級からはその前に多数のBETAが放出され、その中にはレーザー種も混じっている。

「光線級が対レーザーフィールドの内側に侵入した、優先的に片付けるぞ」

そう言った瞬間に、そう言った兵士のザクの機体を、光線が貫いた。

改修型のMS以外は政府の予算の都合上、対レーザーコーティングを施されていない。

対レーザーフィールドがあるので、今まではそれでも問題無かった。

だが、それは最早過去の事だ。

「ビッグ・ザムを守れ！要撃級がそっちに行つたぞ！」

直ぐ様ビッグ・ザムの周りにザクが集まり、ヒートサーベルを構えた。

要撃級はビッグ・ザムを脅威と感じたのか、優先的に攻撃を仕掛けてくる。

しかも、その間にも敵の大群は進み続けているのだ。

対レーザーフィールドの内側のBETAを倒しながら、外側も相手

にしなければならない。

光線級はビグ・ザムに光線の集中放火を浴びせたが、ビグ・ザムの  
Iフィールドにより、B E T A 光線は通用しない。

だが、打撃は利くのだ。

突撃級がビグ・ザムを守るザク達を弾き飛ばし、要撃級が道を切り  
開いていく。

そしてついに、ビグ・ザムの一機が地に伏した。

大量の戦車級がその機体に張り付き、装甲を噛み千切っていく。

そして、要撃級がビグ・ザムの足を破壊し移動不能に。

パイロットはビグ・ザムの中で死ぬのを待つしかなく、恐怖の余り  
機体から脱出した。

そして、脱出した兵士を待ち受けるのは、戦車級のB E T A 達。

脱出した兵士は、断末魔の叫びを上げることなく、B E T A によつ

て補食された。

「ぐつ、ビグ・ザム一機がやられた！もう一機もヤバイぞ」

兵士はの言葉を聞き、応援に行きたいと思うが、自分もBETAの相手に手一杯。

前進を進めるBETA達の中にも、徐々に対レーザーフィールドの内部に入り込むBETAが出始め、辺りに光線級のレーザーが飛び交い続ける。

兵士の中には、補給と言って要塞に逃げ出す者も出始めた。

後方にいたガンタンクは、機動力が欠如しているので、前衛がいなければ無防備となる。

ガンタンクによじ登り、装甲に噛みつく戦車級。

小さい戦車級には、ガンタンクの攻撃は当てられず、しかも身体に引っ付かれたら、もうそれで助かる見込みはほとんど無くなる。

「カイ少将だ、応援に来た」

その時、カイの声が全てのMSに乗る兵士に届き、兵士達の瞳に希望が宿った。

兵士達は、数千のMS部隊を期待し、カイ達の方角を向く。

しかし、応援のMSはたった11機。

兵士達は絶望し、見捨てられたのかと思い始める者もいた。

「選り取り見取だが、先ずは大きい奴等を片付けよう」

カイはそう言っていると、ゲルググを高速でホバー移動させ、要塞級へと向かって行く。

通り抜ける瞬間に、近くのBETAをヒートクレイモアでカイは二つに断ち、改造したゲルググの力を発揮させていく。

要塞級に近づくカイを危険と判断したのか、重光線級はカイにレーザーの照準を向ける。

カイはそれを見ても曲がる事なく真っ直ぐ進み、正面にいた要塞級を切り裂きながら、ゲルググのスラスタを放出させた。

重光線級はエネルギーを溜める。



だが、カイはそのエネルギーが放たれる前に、重光線級に刃を突き立てた。

「一般機の常識を、この機体にも期待するんじゃない。」

カイはそう言うのと、触手による要塞級の迎撃を避け、要塞級を熔断した。

その他の要塞級もガルバルディ が片付けていたが、最早戦線の維持は不可能に近い。

カイの奮戦虚しく、少しずつMS部隊は後退していく。

カイのゲルググが片手のヒートクレイモアで要塞級を切り裂き、ザクマシンガン改で光線級を撃ち抜いていく。

それでも後ろに、要塞が見えてきてしまった。

「援軍が来るまで後何分だ!？」

「後、10分程です」

カイの言葉に直ぐに側近が答え、カイは切り札の発動を決意する。

「3分間だけ、本気を出させてもらおうか」

カイの言葉と共に、ゲルググの内部から機械の機動音が鳴り、真紅のゲルググに施された黒い模様が、赤く輝き始める。

そして、ゲルググの周囲に陽炎のような、空気の揺らぎが発生。

次の瞬間、ゲルググは残像が見えるかと思う程の速さを発揮し始めた。

赤い光を放ちながら、一瞬でカイの乗るゲルググはBETAを次々と八つ裂きにしていく。

そして、カイの鬼気迫る猛攻と真紅のゲルググの性能により、一時的にBETAの進行を押しとどめるに成功した。

速すぎてあらゆる攻撃は当たらず、ゲルググが狙った相手は必ず穴だらけになるかもしれないが、大量の体液が周りに撒き散らされていく。

（遅い、全ての敵が……いや、味方のMSすらも遅いと感じる）

カイの鬼神のような働きに兵士達は盛り返し、援軍はその後ようやく到着した。

カイの生産した巨大戦艦と台湾の戦艦から、MSは次々と出撃して

行く。

対レーザーコーティングをされた機体はスラスタで空中を飛び先行し、対レーザーコーティングの施されていない機体は戦艦が陸に近付くまで出撃を待つ。

援軍の到来に更に兵士は士気を上げ、MS部隊は順調にBETAの軍を押し返していく。

カイは三分後、直ぐに前線から離れ、ポイントを消費して機体を修理した。

（ふう、何とか耐えたが危ない所だった。どうやらBETAを甘く見すぎていたらしい）

ゲルググの身体を冷却しながら、カイはそう思い新たな対策を練る事を決意する。

そして、カイは再度出撃し、続々と増えていく台湾のMS部隊と共にBETAの駆逐を進める。

台湾独自の軍事兵器により、BETAの大群を撃退する事に成功した。

そしてこの戦いにより、  
中華民国の名は世界中に広まる事となる。

## 終戦 赤い刃（後書き）

カイがやらかしてしまった。

ゲルググについての言い訳は次回に。

閲覧ありがとうございますm  
———  
m

今はただ耐え、反撃の時を待つ（前書き）

前話の終戦 赤い刃 は大幅に修正させていただきました。  
今回はそれほど進展はないかもしれませんが。

今はただ耐え、反撃の時を待つ

前回のBETAとの大規模戦闘で、カイはBETAの危険性を再確認した。

報告では、BETAとの交戦中に弾丸の補充という名目で基地に逃げ帰った兵士が、何十人もいると書かれている。

（絶対に命令が出るまで逃亡せず、アンドロイドよりコストが低いCPUは予想通り役に立った。  
更に積極的に生産いく事にしよう）

カイはそう考える。今回のCPUの活躍を見たらそう思うのは当然だろう。

カイはむしろ兵士全てをCPUにすればいいんじゃないかとすら考えていた。

しかし、レベルの高いCPUはそれに応じてポイント消費も高い。

レベルの低いCPUは、破壊の可能性が非常に高いので、普通のザク?くらいにしか搭載できない。

兵士の練度が上がれば、高レベルに匹敵する者も出てくるし、もし

かしたら天才パイロットが居る可能性もある。

カイは戦いで活躍したと報告があった将来有望な兵士達と戦術機に乗った経験のある兵士に、緑色のガルバルディを配備した。

戦術機とMSは操作方法が全く違うのだが、それでも戦術機のパイロットは、MSを上手く乗りこなす事ができる者が多いようだ。

（技術力の上昇も遅くなってきたが、現在Lv25。ジオングの開発が可能になった。そろそろ、に時代は移っていくか）

に移ると言うことは、そろそろハイザックが開発可能になると言うことだ。

ハイザックが配備され始めれば戦力も上昇し、BETAの被害をより少なくできる。

「兵士達には、MSで積極的にBETAの間引き作戦を行わせろ。BETAとの戦いの経験を積ませ、MSの操作訓練も行わせたい。そして後は、兵士のMS操縦の適正を調べてくれ」

カイがそう言うと、アンドロイドが敬礼して部屋を出て行く。

カイはそれを確認すると、机に置かれた書類に目を通した。



「やはり対レーザーフィールドだけでは、重光線級の攻撃を完全に防御するのは無理か。重光線級の攻撃が幾つか、対レーザーフィールドを貫通している」

カイはそう呟くと、中国にある台湾軍の要塞を思い出す。

MSの収納や修理、弾の補給が行えるようにはなっていたが、要塞はカイが設置した物ではなく、元々中国の軍が建設した施設を利用して台湾軍が使っているらしい。

その為か、要塞の防御力はさほど高くない。

全線を守るのがそんな要塞では、かなり不安だ。

カイはジャブロー建設の他に、新たな要塞の建設も計画する。

今回の戦闘で、ポイントはかなり稼ぐ事が出来たのだ。

結構な額の出費になるが、それはいつか台湾を守る為に役に立つだろう。

そして、一通りカイは今後の予定を確認すると、次は趣味に時間を

費やす事にした。

カイはゲルググに乗って、台湾近海に建設された島へと向かう。

元々カイはゲームを楽しみに来ているのであって、淡々とした仕事をしに来た訳ではないのだ。

MSの開発も面白いが、今回カイは自費でアメリカから購入した、第一世代戦術機を観賞する事になっていた。

現代の地球の主力兵器であるファントムは、確かに美しいとカイは感じる。

カイのコレクションが展示されている海上基地には、ザクやズゴック等今までカイが開発してきたMSが全て展示されているが、全て未使用でありカイはずっと観賞用に展示しておくつもりだ。

最近では、ジオング等も展示されたが、戦術機がここに入るのは初めてだ。

「うん、やはり戦術機もなかなか良い物だ。  
観賞用に集めて、MSと共に展示する事にしよう」

カイはそう決めたが、戦術機をコレクションするのはなかなか難し

いかもしれない。

現在、第二世代戦術機が開発されているが、どの国の機体も最重要機密とされている。

ある程度第2世代が普及するまで、手に入れるのは不可能に近い。

（台湾の政府以外の国にもアンドロイドを侵入させているが、他国ではまだ浸透率が低い。

戦術機を横流しさせるのは厳しいそうだな）

カイはそう思いながらMSを収納させるためにかなり広く高く建設されている展示室を出ると、今度は外に用意されたもう一機のファントムを眺めた。

この機体も新品だがこれは観賞用ではなく、かと言って実戦で使う気もカイにはない。

そして、カイは戦術機に乗り、機体を作動させる。

戦術機は剣を振るい、用意された銃を的に向かって放つ。

（MSとは全く操縦方法が違うな。  
だが、だからこそ面白い）

カイはしばらくの間戦術機に乗って楽しむと、機体から降りる。

「面白いし、見た目も良いが弱いのが難点だな」

カイはそう言うと、アンドロイド達に一度しか使っていないファントムの解体を命令した。

（このファントムを俺が今から改造し、最新機以上の力が出せるようにしようじゃないか）

カイはファントムの身体の部品と全く同じ形をした、部品をガンダリウム合金を使って開発し、生産していく。

（核融合炉とホバーの取り付けは確実に言い、後は適当に色加えていくか。）

カイはその後悪ノリし、ゲルググに付けた物の劣化版を機体に組み込んでいく。

その装置はゲルググに設置されており、わざと核融合炉を破壊し膨大なエネルギーを暴走させ、一時的に機体の1.5倍程機動力を上昇させるという機能がある。

そして、その装置は紛れもなく失敗策だ。

核融合炉を暴走させた三分後、MSの機体は徐々に崩壊し始める。

そして、五分後には機体は爆発、跡形もなく吹き飛びパイロットも機体も消し飛んでしまう。

しかも、装置は核融合炉を破壊するので、途中機能の停止は行えない。

通常なら、危険過ぎて使えない機能だ。

しかし、それは通常の話。

カイはポイントを消費する事で、MSの修理を行える。

三分機体を動かしたら、ポイントを使って機体を修復すれば良い。

機体に熱が残るので、連続使用はおこなえないが、熱はカイのMSに施された黒い模様のような箇所から、逃げていくように設計されている。

装置を機動させると、黒い模様が赤く光るのは、外に逃がして行く熱の温度が余りにも高い為。

MSから立ち上る揺らぎも、熱による物だ。

カイはその速い機動によって、赤い彗星とか真紅の稲妻とかの二つ名を、頭の片隅で考えていたが、カイの二つ名はカイが理想として  
いる物ではなかった。

なので、カイは二つ名等なかったのだと思い、全てを忘れる事にした。

「……完成。色以外は完全にファントムだが、中身は全く違う戦術機のようなMSができた」

カイは完成品を見ると満足し、今日は帰る事にした。

（第三世代ができれば、これと戦わせよう）

カイはそう思い、第一世代のファントムを倉庫に収納した。

次にカイはMSの生産施設へと向かう。

現在MSの生産施設は、大規模なBETA戦により破壊されたMSの機数を取り戻そうと、連日フル稼働している。

ここは言うなれば、台湾の心臓部だ。

台湾の海上で現在MSの生産工場の建設が進められているが、現在世界でMS工場はここにしか無い。

更に地下は巨大な研究施設となっている。

その為、前のBETAとの大規模戦闘もあり、この工場は世界中から注目されるようになってしまった。

各国のスパイが工場内に入り込もうとするが、工場内にいる者達の大半はアンドロイドであり、スパイは速やかに排除される。

しかも、工場内には蚊型の偵察機と、蟻型の偵察機が徘徊している。スパイが侵入したら、直ぐに情報は工場内のアンドロイドに伝わるだろう。

だが、それでもなかなか安心出来ないのも、この基地では通常機器では通信できず、アンドロイドのネットワークのみで情報を知れるようにカイは改造した。

「この工場の防衛の為に、ザク改修型30機とドム改修型30機が配備されています。」

例えば戦術機が攻めてきても、迎撃する事が可能です」

カイを案内している研究所の所長は、工場を生産したカイに工場の防衛機能を説明する。

可笑しな光景だが、カイは自分が生産した施設を完全に把握している訳ではないので、自分が生産した工場を見学していても楽しむ事はできた。

次に工場内にあるエレベーターにキーカードを挿し込み、カイと研究所の所長は地下へと降りて行く。

地下には台湾や、中国から脱出してきた研究者達が日夜研究に励んでおり、実はその一人一人には裏切らないか見張る為の小型の虫が付いている。

しかし、研究所の所長もそんな事は知らない。

知っているのは、カイだけだ。

「ヒートランスは完成したか？」

カイが研究所を見学しながら、所長に向かってそう尋ねる。

BETA戦でヒートサーベルだけでは、前衛が持たないと感じていたカイは、研究所でヒートランスを作らせていた。



ちなみにヒートクレイモアも、この研究所で開発された物だ。

MSの技術と戦術機の技術の融合。

それを果たす為に作られた研究所だが、こういう実践的な兵器も開発させ、その対価としてかなりの額の金をMS研究所に支払う。

研究費用は台湾政府も多少払っているが、ほとんどはカイの自費から支払われている。

今や台湾政府はカイに全く頭が上がらず、カイの要求はよほど無理ではない限り承諾してくれる。

「ヒートランスは完成していますが、機動テストはまだ行われていません。」

近日機動テストが行われ、結果が良好なら納入したいと思います」

カイはその話を聞くと頷き、ヒートランスの配備によって近接戦闘が少しは楽になるだろうと思った。

「じゃあ、例のMSはできそうか？」

カイが聞くと研究所の所長は首を横に振り、恐る恐る口を開く。

「例のMSですが、機動テストも含めるとまだ後1ヶ月程掛かります。」

そちらの都合も承知していますが、やはり直ぐに出来る物ではありません」

所長はカイがこの言葉を聞いて落胆するかと思っていたが、予想に反してカイは平然とした態度のままだった。

「そうか、ならば予定通り小出しにしていく事にするか……わかった、ありがとう。」

MSの件はその日程で作ってくれ」

カイはそう言っていると研究施設の装置を見学し始め、所長はホッと安堵の息を吐いた。

今回の問題は、BETAとMSの戦いを何処からか見ていた、各国による台湾への要求が原因だ。

超電磁銃やMSの情報を提供するよう国連は台湾に求め、その後ろでアメリカが台湾に圧力をかけてきた。

台湾等所詮まだ、小さな島国島国でしかない。

超大国にはとても対抗する事等できない。

そして万が一反抗したら、台湾は世界から孤立し、下手したらアメリカから核爆弾を撃ち込まれる可能性もある。

今は我慢して、カイは超電磁銃を改造し、レアメタルを大量に使う超電磁銃を開発すると国連に一つ提供する事にした。

レアメタルを大量に使うのは、カイの意趣返しの為だ。

最も他の部品でも作れるが、この世界にはない合金を使う事になる。

どのみち幾らアメリカでも、レアメタルを大量に使う超電磁銃は量産できないだろうと思い、カイは渋々ながら超電磁銃を提供した。

そして超電磁銃は流石に特許を取ったので、かなりの額が台湾に流れ込み、台湾の経済は成長していく。

カイはそれなりに長い間研究所を見て周り、レーザー兵器の分析を進めている場所を見学すると帰って行った。

（後は兵士の練度が上がるまで開発しながら、コレの介入を政府と話し合う事にするか）

そう思うカイの前には、あらゆる国にばら蒔かれた偵察機からの集めた情報が写した出された画面が、空中に出現する。

その画面には、通常ならカイが知る筈もないハイヴ攻略作戦という文字が映し出されていた。

（この作戦は見逃せない、まだどのハイヴを攻略するかは未定のよ

うだが、ハイヴの攻略情報はCPUを搭載したMS1000機よりも重要だ)

カイはこの作戦を詳しく偵察機に見張らせるよう、アンドロイドに命令する。

BETAの侵略を止めるため、オリジナルハイヴを狙う可能もある。

どのハイヴを攻略するにしてもカイは参加しハイヴのデータを手に入れたと思う、自らもそれに備えて動き始める事にした。

今はただ耐え、反撃の時を待つ（後書き）

MSは大丈夫でしたが、超電磁銃はアメリカに奪われました。

レーザー兵器もそろそろ出始めますが、各国のクレクレ攻撃への対応策に困りそうです。

## 旅立ち（前書き）

よろしく願います

## 旅立ち

ハイヴ攻略作戦に向けて準備をカイは進めていたが、ハイヴ攻略作戦が始まるよりも前に夏休みが終了する可能性が高いと判断する。

よって、カイは一度ログアウトし、叔父に今までプレイしたデータを保存してもらい休日等に少しずつ進めていこうと思った。

カイはその為に一度ログアウトを実行する。

しかし、ゲームの画面に『ログアウト機能の不具合により、現在ログアウト出来ません。』

エンディング終了後の強制終了機能を使うか、外部からのゲームの停止ををお待ち下さい。』

という文が、画面に流れた。

（ログアウト不可？まあ、時間がたったらどうせオジキがゲームを終了させるか。まあ、もし不具合に俺がプレイ中に気づかず、夏休みの終わりに気づいて修理し始めたら、もっと長くゲームができるかもしれないな）

カイはそう思うと、それから他の事を考え始める。

（レーザー兵器の実験は極秘で基地内で行われているが、問題はBETAがどれ程の時間に対応するかだな）

カイは戦闘機を無力化した情報を思いだしながら、どれくらいの期間レーザー兵器が有効か考える。

恐らくBETAは大量にBETAを排除する兵器には、優先的に対応してくる。

実弾兵器等に対応してこないのは良いが、敵にはレーザー級がいるのだ。

レーザーを無力化するBETAが出てきても、不思議ではない。

（中国でレーザー兵器の極秘テストを行う時は、レーザーで大量に敵を倒すのは止めた方がいいな）

カイがそう考えていると、アンドロイドが書類を持ってカイの方へ歩いて来た。

「MSの操縦に適正がある者達をリストアップしました」

アンドロイドにそう言われながらカイは書類に目を通し、兵士の名前が書かれた箇所に赤ペンで何度かマークを付けていく。

「マークを付けた兵士達にMSの訓練を受けさせ、徹底的に鍛え上げろ。」



教官は最新式のアンドロイドを幾人か派遣してくれ」

カイの言葉にアンドロイドは了承し、書類を受け取ると去って行った。

その頃、台湾軍とBETAの軍勢の決戦の映像はアメリカでも極秘で入手され、アメリカの高官達もこの映像を見て驚愕していた。

「機体の性能も第二世代……いや、下手をすればそれ以上、是非ともアメリカに欲しい機体ですな。」

特にあの巨砲は良い、推定360mmのあのバズーカはかなりの威力があるらしいと報告がありますし」

一人の者がそう言うと、隣に座る男が顔をしかめる。

「イエロー・モンキーの開発した機体に搭乗する等、正気の沙汰ではありません。所詮ちっぽけな極東の島国が開発した物、今回は運が良かったかもしれないが、すぐに故障するのが目に見えています」男がそう言うと、席のあちこちから賛成の声が上がる、賛成の声はほとんど全て男と同じ派閥に属している。

やはりアメリカでは、人種差別が激しいようだ。

「だからこそです。イエロー・モンキー達もBETAに破壊される前に私達が技術を有効活用してあげれば本望でしょう」

男が自信満々にそう言い切ると、周囲にいる男の仲間が賛成し始めた。

「ですが、献上（奪った）された超電磁銃はレアメタルを大量に使う上、大型で戦艦にしか使えません。

MSも所詮数だけだ。

MSを奪うのはMSの発展をしばらく見守り、最新型を見てからにしないか？」

男がそう言つと、あちこちから賛成と反対の意見が飛び交う。

台湾等、ここにいる人々にとっては所詮はちっぽけなイエロー・モンキーの国の一つでしかない。

その国が何かを開発したならば、アメリカに献上するのは当然の事だと思っている。

「最も惜しまれるのは、戦いの前半で砲撃に偵察機が巻き込まれ、最後まで戦いを見る事ができなかった所ですね」

カイが対レーザーフィールドがバレないように、偵察機を破壊させたのだが、高官達はそんな事は知らない。

「何、衛星からの映像勝敗はわかつたし、あの巨大なMSは見えたあの巨大なMSとやらの超電磁銃と台湾全てのMSとやらを集めて勝ったのだろう」

高官の発言は割りとのを得ていたし、あの量の兵器をどうやって台湾は製造しているのか疑問が残ったが、高官達はとりあえずそれで納得する事になっていた。

「そもそも、イエローモンキー共は何故大人しく技術を献上しないのだ、そもそも全ての国はアメリカがあつてこそ……………」

小型偵察機でこの光景を眺めていたカイは苦々しい表情をしていたが、現状確かにアメリカに圧力を掛けられたら何か技術を提供せざるを得ない。

会議の光景が見られているとは知らず、会議に参加した政府の高官や資本家達は台湾を罵倒し、どうやって技術を巻き上げるかを話合っていた。

（MSについては注目されているが、戦術機の開発を止めてまでMSに力を入れようとする覚悟がある国は流石にないか。

対レーザーフィールドは見られていないから超電磁銃だけで、アメリカはとりあえず満足したようだな）

カイはそう思うと一先ず安心し、映像は記録を続けさせながら別の映像にチャンネルを変えた。

しばらくたつと、ようやくMSの数が目標数を越え、技術力もLv30に到達した。

そして、カイはアンドロイドによってまとめられた、兵士達からのMSへの要望が書かれた書類を眺める。

あのBETAの大進攻から三年も経過すれば、台湾軍兵士のMS操作技術もかなりの向上を見せ、ザク改修型を手足のように扱えるようになってきた。

ドムもザクもほとんどの兵士が改修型に移行し、一部のエースからは新たなMSの開発も希望されている。

カイはザクカスタムとドムの改修機であるドワツジをMS研究所で発表させ、一部のエースにはパーソナルカラーを機体に塗装する許可をした。

ザクカスタムは一部のエースに配備する予定で、頭部にアンテナブレードが付いている以外は、通常機と見た目が変わらない。

しかし、MS研究所はザクカスタムの機動力がザク改修型の機動力

の1.3倍になっていると発表し、配備される予定となったエースパイロット達は今か今かとザクカスタムを待ちわびた。

一部でいい加減デザインを変更しろと言う声もあるが、三年でそう新しい機体は開発出来ないという意見とドム、ザクの愛好家によって封殺された。

エースパイロットにとっては新しいMSも嬉しいが、パーソナルカラーを機体に塗装出来ると聞いて狂喜乱舞していた。

しかし、中にはドワッジの色をドムと同じにしてくれ、というドムの愛好家等の姿も見られる。

（ザクの人気はわかるが、やけにドムが人気なんだよな。  
やはり巨砲はロマンを感じるのだろうか）

カイはそう感じて、他のMSを開発してもドムから乗り換えないと言われたら困るなと思い、後一年ほどしたら新たな機体を発表しようと思った。

そして、新たな機体の配備と並行してカイは遂にビーム兵器の運用テストを中国で行わせる事に決める。

カイも自ら中国へ向かい、MS部隊の指揮権を一端軍部に潜ませて

いたアンドロイドの大佐に任せる事にした。

本来の武器であるビームライフルを持ったカイのゲルググが地上に降り、続けて実験部隊のガルバルディ も地上に到着する。

ガルバルディ はいずれ量産を開始する予定ではあるが、今はまだ極端に数が少ない。

ガルバルディ に乗っている兵士達は全員アンドロイドにカイが訓練させ、エースパイロット級の実力を得た兵士達だ。

一応カイの直属となつてはいるが、カイは一人で戦う事を好む。

実践では活躍するだろうが、カイと共に背中を預け合つて戦う事はないかもしれない。

「こちら血道部隊、敵を捕捉しました実験を開始します」

そう部隊の者が言うと、ガルバルディ はビームライフルで前方のBETAに向けてビームライフルを発射する。

光線は命中、貫通し数体のBETAを纏めて殺していく。

「凄い、まるでビッグ・ザムの超電磁銃のような威力だ。しかもそれが携帯できるなんて……」

血道部隊の兵士達はビームライフルの威力に歓喜し、BETAを次

々と撃ち殺していく。

結局BETAの群れを実験部隊だけで倒す事に成功したが、BETAが光線が無効化するような事はなかった。

「やはり、大量殺害兵器には対応するが、群れを倒す程度の兵器にすぐに対応するという訳ではないか。

しかし、ハイヴ攻略でビーム兵器を使うとなると、いずれ効かなくのは確かか」

カイもビームライフルでBETAを撃ち抜き、その威力に興奮していたが頭だけは冷静にそう判断し、つい声を洩らした。

（ハイヴ攻略用にメガ粒子砲を装備したビッグ・ザムと超電磁銃を装備したビッグ・ザムが量産されているし、これのお披露目はやはりハイヴ攻略戦になるな）

カイはそう思うと同時に、そろそろ自分の操作の腕前を上昇させようと思い始める。

反射速度や身体能力、頭の回転速度上昇や攻撃察知等をポイントで強化しているが、MSの腕前を強化する事はできない。

アンドロイドの大佐を台湾のMS部隊指令代理に置く事が出来、自分分は自由に動けるようになった。

丁度中国に来ているのだ、オジキによって作り出された偽物かもしれないが、故郷の日本を訪ねるのもいいかもしれない。

カイはそう思うと実験部隊を台湾に帰らせ、久しぶりに自分一人だけになった。

ゲルググから降り、崖の上からカイは中国の地を眺める。

激しい戦いによって辺りは荒れ果てているが、最近建設された新たな要塞によって、BETAによる進攻は妨げられている。

周囲の土には木の芽が生え、自然の強さを垣間見る事ができた。

（改めてここがゲームの世界なのか、わからなくなってきた気がするな。

いくらオジキのゲームでも、ここまで自然の強さを表現できるのか？人間の感情もそうだ、大国は当たり前かもしれないが傲慢だし、兵士達は必死でBETAから祖国を守ろうと戦っている。

しかも、俺の体もきちんと成長して、身長も高くなってる。

余りに……いや、そんな筈はない）

カイは首を振って考えるのを止めると、地面に寝転ぶ。

空は青いが前の世界以上に、この空は汚染されているのだろう。



しかし、カイは前の世界と変わらない空を見て少しだけ心が穏やかになった気がして、再び起き上がる。

「暫くの間はよろしく頼むぞ」

カイは自らのゲルゲグに声をかけ、機体を撫でると搭乗し、赤いMSは中国の空を飛翔した。

## 旅立ち（後書き）

閲覧ありがとうございました m  
——（ m

## 放浪し刃は赤く染まる（前書き）

原作には主人公の今の状況なら、楽に介入できそうです。

しかし、白銀の周りのヒロイン達は救済した方がいいんですよね？  
白銀2周目にしたいので、純夏が助からないかもしれないんですが、  
意見があればもしかしたら変わるかもしれません。

まりも先生は二回あの死に方は……反対多数でなければ助けたい。

## 放浪し刃は赤く染まる

カイのゲルググは中国の地を一陣の風の如く高速で移動していた。

ゲルググのレーダーには大量の赤い点が表示され、BETAが前方に多数存在する事を示している。

更に戦術機を示す白い点もレーダーに映るが、BETAに呑み込まれかけているので全滅するのも時間の問題だろう。

「こちら台湾軍MS部隊、援護させて頂く」

一機だけでは怪しまれる為、カイはザクカスタムを五機程引き連れているが全てCPUが搭載されているだけで、簡単な受け答えしかできない。

実質会話ができるのはこの部隊では、カイだけだ。

「ありがたい、救援に感謝する」

カイはその言葉を聞きながら、全速力でゲルググをBETAに突貫させる。

身に付けた新型武装であるトランフォームウェポンを起動し、カイは武器をヒートハルバートに変形させる。

突撃級の攻撃に対してゲルググはヒートハルバートを振るい、突撃級のBETAの硬い装甲を溶断する。

続いて要撃級の硬い腕が、突撃級を乗り越えて現れた要撃級のBETAによって振るわれる。

頭を敵は正確に狙ってきたがカイは回避し、もう片方の腕に持つザクマシンガン改で要撃級を蜂の巣にする。

そして、その場からゲルググは素早くホバー移動し、武器をフライパンのように丸く平たい形にすると、大量に群れる戦車級をそれでプレスして焼き潰した。

「変形兵器は強度が心配だったが、改善されていたか」

カイは以前使っていた、伸びるヒートサーベルを思い出しながらそう思うと、ザクマシンガン改でBETAを片付けながら、突撃してきたBETAをヒートクレイモアに変形させた武器で焼き切っていく。

すると、突然BETAの群れが二つに分かれる。

「ちっ、光線級か！」

カイはそう言うのと武器を素早くヒートホークに変形させ、ゲルググにヒートホークを振るわせ始める。

ゲルググの直接上にいるのは最悪な事にチャージが完了した重光線級。

耐レーザーコーティングで攻撃は防げるが、機体が吹き飛ばされて倒れたらBETAの格好の的になるのは明白だ。

重光線級の強力無比な光線は、真っ直ぐカイのゲルググに飛来する。

中国の兵士もカイの奮戦を見ていたが、流石にあの攻撃は防げないと思っていた。

しかし、結果は中国の戦術機部隊の兵士達を驚愕させるには、十分過ぎる結果が出た。

重光線級のレーザーとカイの振るうヒートホークが激突する。

レーザーとヒートホークの間に一瞬スパークが走り、ゲルググはそのままレーザーをヒートホークで受けながら機体をずらす。

その後、ゲルググがヒートホークを振り切ると、レーザーは受け流され、後ろに向かって飛んでいった。

つまりカイは重光線級のレーザーを近接武器で弾いたのだ。

中国の戦術機部隊の兵士の中には今見た光景が、現実だとは信じられない者もいた。

カイのゲルググはそのまま光線級の群れに狙いを定め、ザクマシンガンを連射する。

BETA達は左右に分かれているので、光線級を守るBETAは一匹もない。

その全てのレーザー級はカイによって撃ち抜かれ、中国軍は光線級の脅威から一時的に解放された。

「数が随分多い、なかなか面倒くさいな」

カイはそう言うのとザクマシンガン改をしまい、もう片方の手にもトランフォームウェポンを装備する。

二本の武器が巨大なヒートグレートソードに変形、近づくBETA

を纏めて溶断していく。

「制限解除、ブラッドフォームに移行しようか」

カイのゲルググの黒い模様が全て赤く光る。

ゲルググの周囲が熱によって揺らぎ始めると同時に、急激にゲルググの機動力が増加する。

常人には耐えられないようなGがカイに掛かるが、カイは苦痛に思うことなくグレートソードを振るっていく。

途中要塞級に降下された重光線級がカイのゲルググに向かって光線を放ってきたが、ゲルググの赤い残像しか捉える事ができない。

羊の群れを食い殺す獅子のようにゲルググは暴れ、結果中国軍MS部隊の兵士達のが呆然した表情で見ている内に、全てのBETAがゲルググとザクによって片付けられた。

カイは直ぐにポイントを消費してゲルググを修理すると、機体を冷却させていく。

戦術機部隊の兵士達の動きはその後もしばらく停止していたが、ようやくカイの機体に中国軍の戦術機から通信が掛かってきた。



「応答を願います。こちら統一中華戦線第81中隊隊長 趙 海波  
少佐であります。」

そちらの所属と部隊名を教えてくださいいただけますか？」

海波少佐は目の前の光景が未だ信じられずにいたが、目の前の機体がどこの所属なのかは大体予想がついていた。

何故なら中国にも台湾のMSが応援に来る事があるので、ザクやドムは目撃されている。

しかし、技術漏洩を阻止する為に改修していないドムやザクしか、中国には派遣していないのだ。

中国軍がザクカスタムも含めた、目の前の機体達の機動力に驚くのも無理はない。

（特にあの赤いザク……赤く光ったと思ったら急激に機動力を上昇させたぞ）

海波少佐の目には赤いザク……ゲルググが、怪物であるかのように映る。

実はカイの新しい機体が現在開発されていて、その機体の機動力はゲルググを遥かに凌ぐのだが、勿論海波少佐は知らない。

よって、目の前の機体が台湾の最新鋭の機体だと予想し、自分の推論に疑いは持たなかった。

「此方台湾軍MS部隊司令長官、船頭 海。部隊名は無い。

階級は少将だ、BETAを発見したのでな、応援に駆けつけさせてもらった」

カイがそう言うと、周囲の空気がビシリと固まる。

(……司令?……少将?)

海波は今聞いた事が理解はできたが、受け入れられない。

そもそも、何故司令長官が実戦に出ているのかわからないし、しかも護衛の数も余りに少ないように思える。

「ご、ご助力ありがとうございました、つきましては我が統一中華戦線の基地に招待させて頂きたいのですが、いかがでしょうか?」

相手は台湾軍の少将、海波に比べて凄まじい階級差があるが、それでも目の前のMSの情報が欲しい。

基地に招待して二、三日滞在して貰えば、少しは情報が得られるだろう。

「いや、此方も残念ながら任務中でな、直ぐにこの場から離れさせてもらわなければならない。  
折角のお誘いだが、すまないな」

「はあ、わかりました。

ご助力ありがとうございました」

誘いを断られて海波は落胆したが、断られるのは薄々わかっていた。

しかし、あの機体を調べられれば中国兵士の命が何千人の命が、助かるかもしれない。

（お母さんも妹も、助かるかもしれない。それなら）

海波にある考えが浮かび、隊員に密かに命令を出そうとする。

カイとの回線が切れると海波は乾いた唇を嘗め、口を開く。

「みんな、あの赤いザク達が後ろを向いたら、一斉に攻撃するぞ。  
あの赤いザクを捕獲するんだ」

「何故だ！？」

「……勝てるのか？勝てても、台湾との関係が悪化するぞ？」

「了解」

「確かにあの戦術機に使われている技術がわかれば……」

海波の言葉に部下達は各々反応を見せる。

「あの技術があれば、祖国が救えるかもしれないんだぞ！  
迷う事はない、国を……家族を救うにはもう形振り構ってられない  
のはわかってるだろ！？……三秒後に行くぞ」

海波がそう言っている間に、ゲルググは海波に背中を見せる。

海波もこんな事をやりたい訳じゃないが、自分を逃がす為に死んで  
言った祖父や、BETAに殺された父親を思うと、罪悪感を感じな  
がらも使命感が勝る。

海波は隊長機として支給された殲滅8型を操縦し、背中を向ける力  
のゲルググの背中に発砲した。

「……残念だ、本当に残念だよ」

海波の耳に突然声が聞こえる。

（回線は切った筈なのに、何故カイ少将の声が聞こえるんだ！？）  
驚く海波の目の前で、カイのゲルググは銃弾を回避し、海波に向か  
って進んで来るのが見える。

「君達の愛国心は俺個人としては素晴らしいと思い、この発砲も許してやりたいと思う。」

しかし、この技術が漏洩してしまえば、新たな戦いを生む可能性もあるんだ。  
すまない」

カイはそう言いながら殲滅8型にゲルググを接近させ、ヒートホークを振るわせる。

海波は咄嗟にスーパーカーボン製の剣でヒートホークを受け止めが、剣は拮抗する事なくヒートホークに切り裂かれる。

「くっ」

海波は咄嗟に殲滅8型を後ろに下がらせると、部下のファントムが一斉にゲルググに向かって射撃を開始する。

「素晴らしいコンビネーションだ、腕前だけなら俺以上かもしれない」

しかし、弾はゲルググの機動力のせいで数発しか当たらず、しかもその上銃弾は命中したにも関わらず、ゲルググの装甲によって弾かれた。

海波はその間に、カイの部下であるザク達を見るが、ザク達は何故

か動いていない。

「残念だ」

ゲルググに乗るカイの声が海波達の耳にまた聞こえ、見るとゲルググによってファントムの内の一機が溶断されていた。

更にザクがザクマシンガン改をファントムに向かって放ち、ファントムを爆発させていく。

「みんな、すまない」

海波は血を吐くような表情でそう言うと、大破されたファントムからナイフを抜き取り、カイのゲルググに向かって機関銃を連射しながら突撃する。

「うおおおお！」

海波は叫び、殲滅8型は呼応するように剣を振りかぶる。

殲滅8型はヒートブレードを構えるゲルググと交差する。

一拍間が開き、殲滅8型は斜めにずれると大破した。

（所詮ゲーム、所詮ゲームなんだ）

カイはそう思うと顔色を青くさせながら、ゲルググに武器を収めさ

せる。

彼らの言葉をカイは回線に侵入し、全て聞いていた。

祖国を守りたい、家族を守りたいという言葉に、ゲームの世界だと思っ  
ているカイの心は何故か揺れてしまう。

（MSの技術が世界に露見したらどうなるか……全てのガンダムシリーズのよ  
うに戦争が起こるかもしれない、その可能性はかなり高い）

確かに技術はブラックボックス化している。

しかし、絶対に安全とは言い切れないのだ。

もし、天才的な頭脳を持つ博士でもいるなら、この技術は解明されていく。

そして、その天才がこの世界には確かにいるのだ。

（感傷的になるなんて、俺は以外に繊細だったのかもしれないな）

カイは自嘲ぎみにそう思うと、操縦席から戦術機に向かって手を合  
わせる。

その後、再度死んでいった部隊員に謝りながら証拠を完璧に隠蔽していく。

そして、カイは一息つき、何処かで少し休息しようかと考え始めた。

その時だった。

「カイ少将、台湾でついにクーデターが発生しました」

代理を任せているアンドロイドから、緊急の連絡が入ったのは。



## 放浪し刃は赤く染まる（後書き）

閲覧ありがとうございます、この後の展開についてのご意見ですが、完璧に反映できるとは限りません。

しかし、ある程度は要望に答えていきたいな、とも思っています。

## 島国は手に収まり（前書き）

何とか更新完了

一番面倒なのは、個人的には誤字を確認する作業かな、と思っています。たりします。

毎日、様々な話を編集しているので、見返すと前見た時よりも多少変わっているかもしれません。

誤字脱字が見つかりましたら、報告して頂けたら嬉しいです。

出来る限り、早く修正したいと思います。

## 島国は手に収まり

「そうか、では予定通りだ」

クーデターについて聞いてもカイは平常通りの表情で、アンドロイドの言葉にそう答えた。

カイとしては、台湾政府の人間がカイを裏切る可能性は半々位だと思っていたが、やはり結果的には裏切る事にしづらい。

（よそ者である俺の下にいるのは我慢出来ないという気持ちが爆発したか、まあそれも当然の心理か）

カイはそう思いながら、ゲルググを台湾に向かって走らせる。

今頃政治家達は、カイがいないとスパイによって知らされ嬉々として立ち上がっているのかもしれないが、カイはそれくらい予想していた。

今頃、台湾に上陸した1000機ズゴックと基地にいるドムとザクが、クーデターを起こした政治家や軍の高官家を焼き払っているだろう。

ここは徹底的に潰すべきだ、恩情は出さない。

台湾に向かってゲルググのスラスターを噴射させて急いでいたカイだが、突然何かを感じて機体を横に移動させる。

すると、カイの今までいた場所に、ザクマシニングの弾が命中し、地面を抉っていた。

（やはり並行して俺の命を狙うか。

自分が開発した兵器に自分が殺されそうになるなんて、笑えないな）

カイはそう思うと、飛来してきたジャイアント・バズの弾を撃ち抜き、機体を停止させる。

カイの身体能力や反射神経は、ポイントで全て強化されている。

その他にも直感や動体視力の強化、思考の加速や射撃能力強化はカイのMSの操作技量を飛躍的に上昇させているので何となくの領域だが、飛来する弾丸を予想し撃ち抜く事も可能だ。

「一応目的を聞こうか」

カイはゲルググに変則的な動きをさせてMS部隊の射撃を避けながら、目の前のMS部隊の回線に割り込み話しかける。

（敵MSは100機か、随分集めたな）

カイはそう分析すると、ゲルググを岩影に隠れさせ、崖の上から此方を見下ろすMS部隊を注意深く眺める。

「申し訳ありませんが、台湾の未来の為に死んでください」

カイは返事が返ってきた事を意外に思ったが、返事の内容は予想通り。

返事と同時にカイが隠れる岩場に向かってドムのジャイアント・バズが放たれるのを見て、カイはゲルググを直ぐに隠れている岩から回避させる。

「俺が死ねば、未来はいい方向に進むと思っている訳か。  
未来は俺にもわからないが、俺は中華民国を発展させようと一応努力しているつもりなんですけどね」

「……」

敵部隊の兵士は答えず、カイは弾丸を回避しながらMS部隊に向かってゲルググを進めていく。

ザクマシンガンの弾は時々ゲルググに命中するが、強化されたゲルググの装甲は弾丸を弾き、通さない。

カイはMS部隊がいる崖の下まで来ると、武器を長く伸ばし崖の岩を斜めに切断する。

「なにっ!？」

敵部隊の兵士の男は驚きに声を上げ、MS部隊のMSはスラスターを噴射して空中に逃げる。

しかし、空中は格好の餌食になりやすく、勿論カイはザクマシンガンを空中にいるMS部隊に向かって連射した。

MS部隊の者もそれを予想していたのか避ける者もいたが、ザクマシンガンの弾が機体に命中し大破して落下していく機体も少なくない。

（銃口を向けた瞬間に反応して避けた者もいた。手練れが多いみたいだな）

カイはゲルググのブースターを噴射させながら、そう思考する。

（こう同じ事が立て続けに何回もあつたら、考える隙すらない）

ゲルググはドムをヒートスピアで突き刺し、ドムは空中で爆発する。

そしてカイは武器を仕舞うとザクマシンガンを両手で掴み、二丁の

ザクマシンガンで敵のMSを次々と落としていく。

「ザクマシンガンはほとんど効果がない、接近戦でいくぞ！」

地面に降りると散開してMS部隊の兵士達は物陰に隠れようとしたが、MS部隊の隊長の声で各々近接武器を構え、着地したゲルググに接近する。

「居合い……はできないからなあ」

カイはそう言いながら操縦し、ゲルググはヒートサーベルを両手に構えると、ザク達のサーベルを捌いていく。

MS部隊の兵士はカイの予想通り手練れ、きちんと剣術を習っているのかカイよりも動きが洗練されている。

「お上手な剣技だが、遅い」

カイはそう言いながらゲルググを操作して二体のザクの首を同時に跳ねると、ザクを前方に蹴りゲルググに向かって放たれた、ジャイアント・バズの弾とザクの機体を激突させる。

「流石、赤鬼オーガと呼ばれるだけの腕前はある」

橙色のザクに搭乗した隊長だと思われる男が機体内でそう言つと、ヒートサーベルを構えてカイに向かって躍り出る。

「その二つ名は本当に止めて欲しいな。

速さ求めた機体にしたのに、速さが全く感じられない通り名とかネーミングセンスを疑うね」

カイは片方の腕で邪魔なドム達をザクマシンガンで射撃しながら、もう片方の腕でヒートサーベルを構え隊長機の攻撃に応戦する。

声に少しだけ苛立ちが籠っているのを聞くと、カイが本当にその通り名が好きではないのだとわかる。

「せめて速さをリスペクトして欲しい、な！」

カイはゲルググの体を下に沈み込ませて鋭く振るわれる隊長機のビームサーベルを避けると、ビームサーベルを持つ方の腕に向かってゲルググの足を蹴り上げさせる。

しかし、そうやっている内に隊長機のザクマシンガンの銃口がゲルググに向かって突き付けられる。

（ちっ、モノアイを狙うか。

避けざるを得ないな）

ゲルググが蹴りを中断し回避行動を取ると、ゲルググの装甲を発射



されたザクマシンガンの弾丸が掠めていく。

「もしかして君はNTか？それでも思考速度上昇とか反射神経上昇とか使ってるつもりなんだが……それに対抗するとは驚きだ」

ザクのヒートサーベルとゲルググのヒートホークが火花を上げる。

先ほど到着したカイのザクカスタム達に周囲にいたドムやザクは片付けられ、カイを暗殺しようとしたMS部隊のMSは隊長機しか残っていない。

「正直君の腕前は惜しい、降ってくれないかな？」

「……」

カイの言葉に相手は返さない。

腕前はカイより相手の方が上なのだが、カイが反射神経等を上昇させている関係で操作技量はほぼ互角。

しかし、機体の性能的に劣る隊長機が、やはり徐々にゲルググによって推されてきた。

「ここで私が降ったら死んでいった部下に示しがつかん、とかかな」

隊長機に乗った男を真似てカイがそう言うと、カイの相手はゲルググの突き出してきたサーベルを大きく払い、ザクの機体をゲルググに近づけてくる。

隊長機には自爆用の装置が設置されている、それを発動しようとしているのだろう。

「……自爆か、それは困るな」

カイはそう言うのと近づくザクをの胴体を蹴り、後ろに吹き飛ばすとザクマシンガンの銃口をザクに向ける。

「中華民国に栄光あれ、中華民国は何者にも屈しない………すまない、どうか中華民国の未来をお願いします」

MS部隊の隊長はカイに撃たれる覚悟を決め、目を瞑ると末期の言葉を行い、最後に小声で本音を洩らした。

「……人に全てを……押し付けようとするな！」

カイは激昂しながらゲルググにザクの機体を全力で殴らせると、それによって中に乗る隊長は衝撃で意識を失う。

「中華民国を頼む？俺は余所者だろう？」

俺に全て託すなんて身勝手だ、君にも頑張ってもらおうよ。

今までゲームだと思ってい……いや、ゲームだからこそ君も手伝う

ならば中華民国に栄光を与えてやるよ」

カイは目の前のザクをじっと見つめながらそう呟き、その呟きは目の前の隊長におそらく聞こえていないだろう。

暗殺部隊を全滅、内一人を捕縛したカイは台湾に帰還した。

中国から台湾に戻るまで二日程かったが、その間にクーデターの首謀者達の粛正は粗方終わっていた。

（準備をしておいて正解だったな、しばらくは息抜きに遊ぶつもりだったが残念ながら忙しくなりそうだ）

カイは台湾の地へ戻ると、休む事なく政府と軍部を掌握していく。

政府の官僚、軍の高官にもカイの派遣したアンドロイドが混じり、台湾はほぼ完全にカイの支配下に落ちた。

そして、捕縛したMS部隊の隊長だったが、目覚めると何故か大人しくカイに従うと申し出てきた。

最初は起きたら自決するかと思っていたカイだったが、そんな事はなかった。カイは意外に思う。

しかし、大人しく相手が従うと言ったとしても、カイは簡単には信用しない。

一度カイは相手と腹を割って話し、その後もしばらく相手に小型の偵察機を付けて、裏切らないかアンドロイドに見張らせるつもりだ。相手と話してわかった事は幾つかある。

最初に、相手の名前は天童 シュウイチ 秀逸と言い、日本人とのハーフだと言う事がわかった。

この点は、台湾が日本の植民地だった事を考えると、理解できる。

最早カイの暗殺を命令した上司もおらず、台湾は実質カイの支配下にある。

つまり、カイに就けば台湾の情勢が一番良くわかるのだ。

その他にも、カイに戦いで負けてしまったからには負けた相手に従うと、自分自信で決めたいらしい。

その他、カイの下で台湾の行く末を眺め、カイが台湾を裏切るような行為をしたら、シュウイチはカイを命を賭けて殺すつもりらしい。

カイはこの話を聞いて、部下にしてもいいのかしばらく迷う。

（まあ、そこそこ台湾にも愛着が出てきたから、多分台湾を裏切りはしない筈。

まだ信用はできないが、優秀なパイロットを部下にできるのは行幸か。

裏切ったら殺せばいい）

カイはそう考え、シュウイチを側近として部下に加える事にした。

その中には、カイは身体能力も強化しているので、生身ではそうそう殺されないだろうという考えもあった。

そして、カイは3ヶ月という月日を国内の掌握に費やした。

政府や軍の掌握は完了したが、国民の不安等の感情を伺いながら、慎重に政策を行う必要がある。

カイは3ヶ月経過して、台湾がようやく平常に戻り始めたと感じたカイは、ついに行動を開始する。

行動はあらゆる国で同時に行い、台湾への各国からの視線の集中を防ぐ必要もあるが、カイは既に数年前から布石は打っていた。

その布石を発動し、カイは技術というカードを切っていく。

しかし、カイは最初の策で躓いてしまう。

カイにとってはこの策が一番どうでも良く、しかし成功させたい策でもあった。

それは中華民国の国名をジオン公国に改名する事だ。

しかし、計画は挫折、企画は白紙となってしまうことになる。

「ははは、冗談って言ったじゃないか」

カイは冷や汗をかきながら、カイに向かって銃口を突き付けるシュウイチを説得する。

シュウイチのもう片方の手には『改名 ジークジオン！』と書かれた紙が、握り潰されぐちゃぐちゃなっている。

「でも、ジオン公国って名前に惹かれない？」

そう言うカイをシュウイチは冷ややかな目で見て、返事すらししない。

「はあ、本当に冗談だよ。本命の計画はこれだ。」

カイはそう言うと、もう一枚の計画書をシュウイチに手渡した。

シュウイチは拳銃をホルスターに仕舞うと、書類を眺める。

「新戦術機の販売、普通ですね」

シュウイチは計画書を眺めると、少しつまらなそうな表情でそう感想を洩らした。

「ああ、ありふれた戦術機の販売計画のように見えるだろ？もうすぐ第二世代戦術機がアメリカ力で生産され始めるのに、その書類に載っている戦術機の性能は1、5世代のレベルだ。

まあ、値段は第二世代戦術機に比べて、1割引きだけだね」

「では、何故今更こんな戦術機を生産し始めるんですか？」

カイの言葉にシュウイチは訝しげな表情でそう尋ねる。

「いずれわかるさ。まあ、実際乗ってみてもすぐわかるかな」

カイはそう言うとはくそ笑み、天然の茶葉を使った紅茶を飲むと、一息ついた。

## 島国は手に収まり（後書き）

一人仲間しましたが少し無理があったかな、と心配になってたり…。  
ま、まあ、刃をぶつけ合って通じる友情的な（ゝ ;）



多利多売（前書き）

戦いは質より量だ！

という言葉を信じて書いて見ました。

## 多利多売

1982年、新戦術機ザルークが台湾のジオニック社から発売され始める。

台湾は最初にサンプルとして、全線国家に100機ずつ戦術機を配布する事にした。

本来なら凄まじい損害になるのだが、材料の金属はカイがBETAから生産した物を100%使っているので、材料費は掛かっていない。

配布した戦術機なのだが、最初にスペックを見せた時は微妙そうな顔をされていた。

理由はわかりやすく、性能が最新機の割には低く、準第二世代程だからだろう。

しかも、もうすぐアメリカが第二世代戦術機の生産を開始する。

各国もいくら値段が安いからと言っても、普通ならばきちんとした第二世代の戦術機を買っただろう。

しかし、何故かザルークの人気は徐々に上がり始め、特に前線国家からは徐々にザルークに注文が入り始めた。

「うん、徐々にザルークの人氣が予想通り上がり始めたか。まあ、アメリカも最初は第二世代機を自分の国に優先的に配備している、という理由もあるけど」

カイがそう言うと、シュウイチは改めてザルークのスペックを見て、首を傾げる。

「確かに安いが、特に変わった機能もない。OSを変えたようだが、それ以外にも機能があるのか？」

シュウイチの言葉にカイは笑みを浮かべると、やっと製造した戦術機の性能を話し始める。

「この機体の特徴は幾つかある。一つ目は操作性だ、MSと同じように素人でも簡単に操作できるように改造してある。」

アメリカで近々配備される予定のF-14トムキャットだが、まだ微妙にクセがあり、乗って自由自在に操作するにはパイロットの高い戦術機に対する適正を必要としていた。

「二つ目は身体に掛かるGを軽減させる機能をコックピットに追加し、更に揺れを軽減させる機構を体の各所に仕込んである。ただし、これのせいで性能が落ち、準第二世代になってしまったけどね」

「何でわざわざそんな機構を追加したんだ？」

カイの説明を聞き、シュウイチが性能が下げてまで追加した機構について尋ねる。

「わざわざ性能を落としてまで付けたんだ、理由はあるよ。まず、これによってパイロットに掛かる負担が、通常の戦術機の半分以下になる。」

カイがそう言うと、シュウイチはやっと理解したのか、カイの言葉の後に口を開く。

「つまり、パイロットの適正が低い者や高齢化してきて、戦術機に乗るのが辛くなってきた者も乗れる機体になったのか」

シュウイチの言葉にカイは頷き、更に説明に補足を入れる。

「俺はあんまり詳しくないんだけど、何かOSとかいうのも改造したらしくてね。中身を整頓してメモリを軽くした後、操縦者に負担が掛かりにくい効率的な動きをするように改良したらしい。加えて、操縦者が載っている内にOSが操縦者の操縦に最適化して、操縦者に操縦しやすい動きをするようになっていくようだ。」

つまり、ザルークは世界で一番乗りやすい戦術機を目指した機体な訳だよ」

カイは得意げな表情でそう言うが、シュウイチは納得したような表情をしていない。

シュウイチの考えでは、パイロットの乗り心地よりも機体の性能の方が大事だと思っているようだ。

「シュウイチみたいなエースパイロットには、不満が残る機体かもしれない。

しかし、戦場ではエースクラスの方が少ないんだ、乗りやすさは重要なんだよ」

カイの説明を補足すると、ロシアや中国等の前線国家では、今や14歳くらいの少年や少女すら戦場に出ている有り様だ。

国は少年少女達にも戦術機に乗らせることがあるが、体の負担が大ききその状態で機体を操作するのは子供には困難だ。

しかし、ザルークならば操作性良さとパイロットの負担の軽減により、乗って少し練習するだけできちんと機体を操作できるようになる。

更に今まで戦術機の適正が低く、歩兵だった者もザルークの性能により戦術機に乗れるようになる。

（しかも、ザルークに一度乗れば、その快適さに他の機体にパイロットは乗りたくなくなるという、隠れた効果もあるだろう）

カイはそう言うと、ほくそ笑んだ。

最初はそれほど売れ行きがそれほど良くなかったザルークだが、徐々に評判が上がり機体の販売数がじわじわと伸び始める。

特に中国やロシア等は即戦力の戦術機部隊を作れるザルークを大量に欲しがった。

ザルーク販売の数ヶ月後に発売されたトムキャットも、最初こそ販売数がザルークを越えたが、徐々に負け始める。

機体性能はトムキャットの方が高いのだが、コストも高くきちんと訓練した兵士しか今のところ乗れないからだ。

アメリカは何故トムキャットよりザルークの方が売れるのか不思議に思い、スペックを調べるがやはりザルークの方が機体性能は低いので、トムキャットが売れない原因が、後方国家のアメリカにはわからない。

アメリカはザルークを購入し、トムキャットと実際に戦わせてみたが、トムキャットが性能で上回りザルークを打倒した。

テストパイロットに選ばれる兵士は大抵一流だ、一流のパイロットならば第二世代戦術機を十全に操作できる。

ザルークの狙いはエース用に購入してもらう為でなく、最前線で徴

兵されて戦う兵士に使って貰う為の機体。

エース同士の勝負では、機体性能が物を言うので、結果は明白だったのかもしれない。

ザルークに乗った兵士は、素晴らしく乗りやすいと感想を述べていたのだが、企業の上役は機体の性能しか見ておらず、トムキャットの勝利に喜び、そして再度ザルークが売れる理由に首を傾げていた。

そして、順調にザルークの売れ行きが伸びていくと、カイはソ連と中国にある提案を持ちかけた。

提案の内容は、中華民国の独立を認める代わりに、ザルークを現在の15%割引で提供するという内容だった。

中華民国は半ば独立状態だったが、中国はけして中華民国の独立を認めていないし、社会主義国家のソ連も一応民主主義政党が支配する中華民国独立を承認していなかった。

最初は中国も渋るが、今はBETAの進行で切羽詰まった状況なので、少しでも多く戦力が欲しい。

しばらく揉めた末、結局ザルークを通常価格の20%割引で二国に販売する変わりに、中華民国の独立を二国は承認する事に決め、交渉は成立した。

これによりアメリカの大事な産業の一つである、戦術機の売上が落

ちる事になるが、アメリカは何故かその時抗議しなかった。

何故なら、20%も戦術機の値段を下げたら、普通は採算が取れない。

大方政府が勝手に二国と交渉したのだろうと、アメリカは予想していた。

そして、戦術機を作っている台湾の会社であるジオニック社は、戦術機を生産する度に赤字になるとアメリカは予想。

それならば、しばらくすればジオニック社が潰れ、自然に競争相手が消滅するとアメリカは思ったのだ。

アメリカの大手の戦術機メーカーである、マクダエル・ダグラス社は台湾に対して対応しないアメリカ政府に多少抗議したが、マクダエル・ダグラス社もいずれ競争相手が消えると思ったのか、そこまですべて死になつて抗議はしなかった。

（予想通り大量の注文が中国とロシアから入った、アメリカ戦術機をヨーロッパに優先して輸出しているから、かなり大量に売りさばける）



カイは大量の注文に顔を綻ばせる。

戦術機生産には、雇用問題解決の為に雇った台湾人に支払う人件費と、輸送費しか掛からないのだ。

売れば売るほど儲かる。

今回の二国との交渉の本命は、独立を認める事を了承させる為ではなく、安く戦術機を輸出できるようになる理由が欲しかったからだったのだ。

しかも、ザルークはその微妙なスペック故に他国に技術が盗まれてもさほど痛くはない。

盗まれるとしたら耐衝撃構造等であり、確かにトムキャットにそれを付ければ衝撃等を和らげられる。

しかし、それを付ければトムキャットの性能も、準第二世代戦術機並みに落ちるのだ。

しかも、余分な機能を付けるので、値段は上がる。

（ふ、今回は微妙なさじ加減で輸出出来た。

これで、G弾に出資している大手の一つがG弾への出資額を減らす筈だ。新型機のイーグルとやらが開発されたら立て直されるかもしれないから、今の内にもう一手打たせてもらおう)

カイは戦術機の売り上げ額に満足しながらも新たなカードを切り、G弾への防波堤を造りたいと考えていた。

## 多利多売（後書き）

閲覧ありがとうございます（――） m

生産チートを使ってみたかった（・ ・ ・）

やはり数は力のような気がする。

## ザクの血統（前書き）

何とか投下できました（・・・）

相変わらず駆け足で進んでいきます。

しかし、原作はまだ遠いです。

キングクリムゾンは用法用量を守って使いたいですが、まだまだ未熟です（ゝゝ；）

## ザクの血統

台湾がザルークを販売し始めた頃、アメリカのある中規模企業の社員が作った

ある物が、アメリカ全土で話題となっていた。

それを最初に発表したのは、ベン ギブソン という人物だ。

ベン・ギブソン氏は1979年に、BETAのレーザーに対抗する特殊な化学物質についての論文を発表。

机上の空論だと言いきられ、ある会社以外からは相手にされなかった。

しかし、ベン・ギブソン氏は1980年にアナハイム・エレクトロニクス社に入社し1982年に、対レーザーコーティングの開発に成功する。

アナハイム・エレクトロニクス社は直ぐに特許を取得、対レーザーコーティングは試験的に戦術機に施され、BETAとの実戦で試験が行われる。

対レーザーコーティングを施された戦術機は、光線級のレーザーを

耐えきる。

重光線級の攻撃は貫通するし、防げるのも一度までだったが、このコーティングの有用性を全米に知らしめた。

米国でG弾推進派の大手戦術機メーカー、マクダエル・ドグラム社はアナハイム・エレクトロニクス社に業務提携を持ちかけるが、拒否される。

そして次に、G弾反対派のノースロック社が同じようにアナハイム・エレクトロニクス社に業務提携を申し込み、それが受理された。

マクダエル・ドグラム社としては、台湾のジオニクス社に圧されている現在、どうしても新たな技術が欲しかったのだが、その失敗に大いに落胆したようだ。

しかも、対レーザーコーティングという新たな技術を手に入れたノースロック社というライバル会社の存在も、マクダエル・ドグラム社にプレッシャーを与える。

しかし、マクダエル・ドグラム社は1984年に、後に第二世代の傑作機と呼ばれる第二世代戦術機イーグルを発表、特にヨーロッパでは絶賛され、業績を一時的にのばしていき、建て直しに成功した。

（対レーザーコーティングをアメリカでアンドロイドに開発させ、アンドロイドが経営する会社に入社させた。

これで更にノースロック社に投資していけば、アナハイム・ドグラム社はG弾への出資額を減らさざるを得ないだろう）

カイはアメリカのG弾推進派企業にダメージを与えた事でとりあえず安心したが、まだ少しG弾の開発が遅れただけだ。

カイは核兵器に似たG弾を使うことには反対してはいるが、それ以上に他の星に逃げる可能性を話し合っていたアメリカの高官達を嫌悪していた。

（核兵器を使っている今、G弾とやらは裏で開発を妨害はしているが、完成したら使用されそうだな。

まだ、それは許せるが逃げるといふ行為は解せないな）

カイはそう考え、人類の地球からの脱出を妨害する作戦を、思考し始めていた。

カイのこれからの計画は、ハイヴの情報をヴォルグデータ以外にもう一度手に入れ、その後ハイヴの攻略を台湾独自で行っていく予定だ。

（物量には物量で対抗する、CPU搭載のMSをハイヴに大量に投入し、BETAを押ししていく。

BETAを倒せばポイントは手に入るんだ、物量で負けはしない)

カイはそう思い、空に浮かぶ月を眺める。

(地球では各国がうるさいからな、月を戴こう。

台湾を拠点にMSを生産し、地球でハイヴ情報を手に入れる。

そして、その情報を元に月へMS部隊を投入し、BETAを駆逐して月に新たな国を建国させよう)

カイは頭の中でその計画を考え、ハイヴの情報を入手するまでは台湾の防御に集中しようと考えてる。

カイは台湾の周りに六つの島をポイントを消費して、作り上げていく。

それぞれ島毎に、MSの生産場、戦術機の生産場、食料日用品の生産者場、娯楽施設と大型ショッピングセンター、軍事基地、各国に輸出入する為の港を建設させた。

その台湾を囲む六つの島を繋げる橋をカイは、アンドロイドとMSに建設させていく。

現在の台湾を空から見ると、橋と島によって六角形に囲まれているように見える。



更にカイが作った全ての島と台湾を橋で繋げ、建設した全ての橋に線路を敷き、道路も橋に整備させた。

「こんな大規模工事を三年で終わらせるなんて、どんな魔法を使っただんだ？」

凄まじい早さで建設された橋を見て、シュウイチは頭を抱えた。

「建設は早かったけど、橋は爆破されても落ちない筈だ。台湾は国土が狭いから人工的に島を作るしかないんだよ。工事の早さは秘密ってことで」

カイはそう言いながら、MS越しに上空から台湾を見下ろす。

中心の台湾が政治を司り、台湾を囲む六つの島が他を担当する。

最早カイがいた現実の地球にある台湾と、この世界にある台湾は完全に別物と化していた。

しかも、台湾の周りの海底には巨大な軍事基地が今も増設され続けている。

ちなみに、ポイントは中国にいる兵士によって行われるBETAの間引き作戦によって、賄われていた。

「別に台湾を発展させるだけなら、君も問題ないのだろう？」

「……ああ、確かにな」

シュウイチはカイの言葉にそう答え、自分も上空から自分の祖国を眺める。

BETAが現れた今、どの国も以前のままではいられない。

しかも、台湾は最前線国家になりつつあるのだ。

中国に戦術機をいくら台湾が安く輸出しても、BETAの物量に中国軍は押されていき、旧満州の地に追い込まれていた。

まだ多少中国の戦線が残ってはいるが、戦線はどんどん下がってきている。

台湾が中国の沿岸部に建設した基地では、今もMSとBETAが死

闘を繰り広げているようだ。

カイは地上に戻り、台湾MS軍総司令部の自分の部屋に戻る。

カイの階級は既に一段階上がり中將になったが、カイの仕事は今もそれほど変わらない。

むしろ大体の仕事はアンドロイドが行っているので、暇な事が最近では多い。

（しばらく何も起きないから暇になるな。

前に一度旅に行った時は直ぐに帰る事になったし、今度こそ数ヶ月ぐらい旅を試みようか）

カイは一旦そう考えると、アンドロイドの少將にMS軍の指揮権を一時的に任せる事にした。

そして、カイは自分が使う機体の収納庫に向かう。

カイの使う機体は既に開発が完了し、生産され、改造が施されていた。

「元々赤色の機体だからか深紅のペイントが良く似合う」

カイは目の前に佇む、ザクと酷似した機体を見てそう感想を洩らした。

目の前の機体の名はマラサイと言う。

技術力がLv20を境に上がりにくくなり、Lv30になると更に上がらなくなったがようやく開発でき、生産出来るようになった機体だ。

最もカイが台湾近海の島を作ったり、中国沿岸部に要塞を建設してポイントを消費した為に開発にポイントがなかなか振れなかったという理由もあったが。

カイはその後、後ろで立っているシュウイチを見て、声をかける。

「実はシュウイチにも新しい機体が出来上がっている。  
あちらに行こう」

カイの言葉にシュウイチは一瞬驚いた後、顔を綻ばせる。

やはりシュウイチも、新しい機体が貰えるのは嬉しいようだ。

カイとシュウイチが隣の収納庫に移動すると、新しい機体は直ぐに見ることができた。

「ザク？……いや、ザクではないか」

シュウイチは一度目の前の機体を見てザクと言ったが、直ぐに訂正する。

「ザクとは流石にレベルが違う。この機体の名前はハイザックと言った、注文があれば機体のペイントや改造ができるよ」

「機体の色は黒に、そして、機動力を上げられるか？」

「可能だ、一日もすれば改造できるだろう、二日後には中国に向かう予定だから、準備を進めておいてくれ」

カイの言葉に事前に中国に向かう事を知らされていたシュウイチは頷き、一度二人は分かれる。

（今度こそ祖国に帰れる。だが、日本もどうやら実際の日本とは大きく変わっているようだからな）

カイは現代の日本の事を思うが、この世界にあるのは日本帝国。現代の日本とは、全く別物かもしれないとカイは無意識の内に予感していた。



## ザクの血統（後書き）

閲覧ありがとうございますm（　　）m  
やはり、キンクリ使い過ぎかなあ^ ^  
| ^ ;

放浪し救済する（前書き）

投下しました（^ - ^） /

今回は誤字確認がおざなりだったから、もしかしたら……



## 放浪し救済する

カイ達は巨大潜水母艦マッドアングラーに乗り台湾を出航、カイがアンドロイド部隊を投入して建設した軍港であるグリプス港に到着した。

マッドアングラーは浮上し、グリプス港でMSや弾薬等の積み荷を下ろしていく。

そして、このグリプス港から中国沿岸部にある、台湾防衛拠点である五つの要塞にMSや弾薬等が輸送されていくのだ。

「久しぶりに来たが、以前とは比べものにならない程にこの港も発達してきたな」

シュウイチは活気溢れる港の様子を眺めて、そう感想を洩らした。

この港では、最新のMSであるケンプファーやザメル、ガルバルディにゲルググ等の姿もまだ少ないが探せば見つけることができる。「ここは台湾の五大防衛拠点を支える心臓部だからね、数日滞在すればビッグ・ザムの姿も見れるかもしれないよ」

カイはそう言いながら、自分の機体が母艦から下ろされるのを待つ。

その近くでは、台湾からの観光客が興奮した様子で潜水母艦や戦艦から下ろされるMSの写真を撮っていた。

ここは軍港なのだが、台湾人ならば観光することができ、最新のMSを間近で見る事が出来るようになっていた。

写真を撮って居るのは、MS系統のマニアらしい。

先ほどからMSを撮るシャッターの音が、絶え間なくカイ達の耳に聞こえて来る。

特に今日は運良くビグ・ザムが軍艦から港に下ろされる日だったようで、観光客とMSマニアは入り乱れながらビグ・ザムの写真を何枚も撮っていた。

そして、ついにカイのマラサイとシュウイチのハイザックが港に下ろされる。

MSマニア達は自分が知らない珍しい色の機体が下ろされるのを見て驚くが、指は無意識の内にシャッターのボタンを押している。

「新しいMS……しかも、あの色は赤鬼<sup>オーガ</sup>の専用機体!？」

マニアの中にそう言う者が居てその言葉を聞き、カイはこめかみを押さえた。

（オーガの名前がこのまま定着したら……不味い何とかしないと）

カイはそう考えるが、自分から厨二臭い二つ名を自称する事は絶対にしたくないとカイは思っているので、最早どうしようもない事かもしれない。

全てのMSは一度収納庫に運ばれるので、カイ達は収納庫に向かう。

「観光客に写真を撮らせてもいいのか？  
情報が漏れる可能性がかなり高くなるぞ」

「ああ、監視は完璧だから大丈夫だよ」

シュウイチの言葉にカイは危機感もなく答える。

偵察機は勿論、軍港内から外への無線は台湾軍独自の特殊な電波以外は妨害されるし、警備の為に軍港には3000機MSが待機している。

「よし、機体も問題なく動く。  
早速出発しようか」

カイはマラサイに搭乗し、シュウイチがハイザックに搭乗するのを

待ち、そしてマラサイを港の外まで歩かせる。

港は厚い合金の壁で周りを囲まれており、門もMSやMAを通過させる為に巨大な造りとなっている。

カイは港を出て、マラサイのモノアイから周りを見ると、やはり先には整備された道が続いているが、周りには森が広がっていた。

この辺りは未だBETAが侵入した事がない地域なのだ。

BETAが侵攻できるのは、この先の台湾が誇る五つの要塞まで。

この森はの自然は要塞が突破されない限り、残しておこうとカイは思っていた。

「わかると思うけど要塞を越えたら、そこはもうBETAの支配下だ。そこで新型の性能を一度試し、その後一先ず北へ向かおう」

「了解、このMSの性能には期待させてもらおう」

シュウイチの返事と共に二機はホバー移動を開始し、高速で舗装された道を走り抜けていく。

流石に最新機なだけあって、今までのどの機体よりも二機は速く街道を駆け抜けていた。

「一度推進剤を要塞で補給するんだよね？」

シュウイチがハイザックを走らせながら、前を走るカイに尋ねる。

「いや、補給はしない。

マニュアルに自動補給と武器変換システムについて載っていただろう？」

「あれは冗談じゃなかったのか」

シュウイチが冗談だと思っていたのは、ハイザックに付けられている武器の弾や燃料をボタン一つで補給できるシステムの事だ。

シュウイチがそれを使用する度にカイはポイントを支払う事になるのだが、それは微々たる物だ。

シュウイチからしたら、物理的にあり得ない機能だったので、悪い冗談だと思っていたのだが、カイから事実だと聞きそれでも信じる事が出来ずにいた。

シュウイチは試しに機体の推進剤を回復させるよう操作してみた。

結果、画面に映されるデータ上は推進剤が満タンまで補充されてい

る状態に戻っていた。

「前からおかしいと思っていたが、カイは魔法でも使えるのか？」

「魔法ではないけど、まあそれに近い物を行使できるよ」

「……そう言われた方が、下手に科学技術だと言われるより納得できるな」

シュウイチは達観したような表情でそう言い、この色々おかしい機能については考えない事に使用と決心した。

カイ達は一度要塞で停止し、要塞の指令に挨拶した後、要塞から出た。

要塞の外には最早自然はなく、荒れ果てた大地が広がっていた。

稀に草や苔は生えているが、とても人間が住めるような所とは思えない。

最もそれはここで頻繁に戦いが起こるからで、要塞から少し離れれば草木が生い茂っている場所も、無いわけでは無かった。

（やはり大地は荒れているな、核を使つたせいで汚染も酷いようだ

し)

カイはそう思い自分とシュウイチ、そして二機のMSに放射線自動除去機能を追加した。

台湾の要塞でも、門に自動で放射線を除去する装置が付けられ、要塞の周りにはは放射線を通さない特殊なフィールドと、対レーザーフィールドが常に張られている。

「む、二時の方向から光線が飛来してきてるみたいだ」

カイは危機察知のお蔭でいち早くレーザーの飛来を感じ取ると、機体を停止させ巨大な盾を生産する。

カイはマラサイに巨大な盾を装備させ、レーザーが飛来してくる方向に盾を構える。

「俺を狙ってくるみたいだから、シュウイチはレーザー級を撃ち抜いてくれるかな？」

「ザクマシンガンで長距離射撃は無理だ」

「武器を変更すれば、マゼラ・トップ砲を装備できるよ」

カイの言葉を聞き、シュウイチは機体を内に存在する画面を操作する。

するとシュウイチが操作するハイザックの前に粒子が集まり、マゼラ・トップ砲が出現した。

「もう俺は何も言わんぞ」

シュウイチはそう言いながらマゼラ・トップ砲を構え、レーダー機能をカイが盾を向ける方向に広げる。

すると前方にBETAの群れがいる事を確認、マゼラントップ砲の角度を調節した。

最新式のレーダーは、BETAの種類も判別できる。

カイの盾に重光線級のレーザーが命中し熱によって周囲の空気が炸裂する音を聞きながら、シュウイチはマゼラ・トップ砲を斜め上に向けて発射した。

少しして、シュウイチがレーダーを確認すると、重光線を示す点が一つ消滅している。

どうやらきちんと命中したようだ。

しかし、今度はお返しとばかりにシュウイチのハイザックに向かっ



て二本のレーザーがシュウ飛来してきた。

しかし、シュウイチのハイザックの前にカイのマラサイが割り込み、シュウイチの機体の前で盾を構える。

カイが持つ盾にも勿論対レーザーコーティングは施されており、飛来してきた二発のレーザーをカイの盾は見事防ぎきった。

そして、マゼラ・トップ砲が二発、三発と空中に放たれていき、リーダーから光線級を示す点は無くなった。

「レーザー級はいなくなったか、後は接近して叩こう」

カイが巨大な盾を放棄すると盾は粒子となって消え、マラサイはブースターを背中から噴射して空中を飛ぶ。

「了解」

シュウイチも続けてハイザックで追いかけて、しばらくするとBETAの群れを目視できる距離まで近づく。

シュウイチは空中でハイザックの武装をマゼラ・トップ砲からザクマシンガンに変更すると、無難に空中からBETA達を射撃していく。

一方カイもマラサイの両手にザクマシンガンを装備させ、ザクマシンガンを連射させていたが、それは空中から降下しながらだ。

カイは着地の瞬間にマラサイの足からブースターを噴射させながらザクマシングンを捨てさせると、すぐにマラサイはヒートランスで周りに群がるBETAを尻ぎ払っていく。

そしてカイはマラサイに武器を振るわせながら周りを確認し、戦術機が何機かBETAと戦っている事を確認する。

戦術機は恐らく中国の機体だろう。

カイは中国の戦術機に対してはいい思い出が無かったが、見殺しにするのは後味が悪いと感じ、恐らくと中国軍の戦術機に向かうと思われるBETAを、カイのマラサイは優勢的に溶断していく。

「シュウイチ、レーダーの白い点は中国軍の戦術機だったようだ。危なそうだったら援護射撃をしてくれ」

カイがそう言うと、シュウイチから了解と言う反応が返ってくる。

カイはその言葉に安心し、遠慮無くBETAを狩りとっていった。

カイが遠慮なくBETAを狩っている途中、中国軍の戦術機から連絡が入る。

「こちら台湾軍MS部隊、ご用件は？」

「緊急です、近くに逃げ遅れた民間人が数名まだ近くに居ます。救助をお願いできませんか？」

「了解、要請を受諾します」

カイはそう言うのと近くのBETAを尻払い、戦術機部隊から送られてきたデータに載せられた場所へ高速で機体を走らせる。

中国軍の戦術機部隊も光線級を撃破でき、大分数を減らせる事ができたので、何とか持ちこたえる事ができると思う。

カイはシュウイチに報告し、戦術機部隊への援護を続けて貰いながら、レーダーを確認すると目的地に小型のBETAを示す点が近づいているのを発見した。

（前方に小型のBETAという事は……まずい！！）

マラサイの黒い模様が赤く輝き、カイが乗るマラサイは更に加速する。

すぐに機体のモノアイからカイはBETAの姿を見ることができ

距離まで移動する事ができたが、その頃には既に小型のBETAが逃げ遅れた女性とその子供を追い詰めていた。

「届け！」

カイはマラサイにザクマシンガンを発射させ、小型のBETAを爆散させていく。

親子の周りにはまだ小型のBETAが補食しようと接近していたが、カイはヒートクレイモアで一掃し、親子は間一髪何とか無事だった。

この時代このような状況はたくさんあるが、助けられる事は希なのだ。

今回も、カイの機体で無かつたら親子を助けられなかったかもしれない。

「一先ずBETAは一掃しましたが、まだここは危険です。一度この機体に取り込んで頂けますか？」

カイは機体を修理し、冷却させながら外部スピーカーで目の前にいる二人に話しかける。

親子はしばらく放心したような表情をしていたが、子供はしばらくすると泣き出し、母親まで助かった安心感から泣き出してしまった。

カイはこの状況に少し困ったが、とりあえずMSに乗ってもらい、

シュウイチと合流した後二人を要塞に送り届ける事にした。

運の良くまだ台湾の要塞からは離れていない、自分に敵意の無い民間人を見捨てる程には腐っていないいつものカイは、人を助けた事による充足感に浸る。

「あの、助けて頂き本当にありがとうございました。私はペルネ・マナンドルと言います、この子はタリサ・マナンドル」

母親の方は何とか落ち着き泣き止んだようで、カイに英語で自己紹介をしてきた。

カイはチラリと二人を見て東南アジア系の人かな、と思っていたので相手が英語を話した事に驚きながらも、カイは英語で自己紹介に応じる。

「俺の名前は船頭海里と申します、台湾軍MS部隊のに所属しています。」

民間人を助ける事は軍人にとっては当然の事です。できれば、台湾軍の要塞から台湾に避難して頂きたいのですが」

カイがそう言うと、ペルネは頭を下げカイにお礼を再度した。

カイはシュウイチに連絡をすると、BETAは粗方片付けたらしい。

合流した後、要塞に戻る事をシュウイチに伝え、カイはシュウイチがいる方向へ、親子二人が負担にならない程度の速度で進ませて行った。

## 放浪し救済する（後書き）

裏設定として、カイがこのまま助けなかったら、母親が子供を逃がして補食され、子供は何とか国連軍の戦術機に助けられる感じになっていた。

閲覧ありがとうございました m ( ) m

まだ見ぬ日本へ（前書き）

更新遅れてしまい、申し訳ありませんでした m ( m



## まだ見ぬ日本へ

カイが機体の中で親子に話を聞くと、どうやら二人はネパール王国の出身らしい。

父親の方は兵士として国に徴兵され、二人はBETAの大群から中国へと逃げて来たようだ。

しかし、今や中国もBETAによって侵略され、地獄と化している。

最早このユーラシア大陸に安全な場所等何処にも無いのかもしれない。

（難民を受け入れる為のマンションを建設させるようアンドロイドに伝えてはいるが、受け入れにも限界がある。  
海の埋め立てを更に進めていかなければな）

海の埋め立てには住民からの反対もあるかもしれないが、国土が狭い台湾では海を埋め立てるしかないのだ。

しばらくは台湾で難民を養い、難民達の心が安定してきた所で簡単な仕事に就いてもらおうとカイは考えていた。

そして、カイが要塞に親子を預け、丁重に扱うようカイが兵士に言った時、事件は発生した。

「おじちゃん、ありがとう」

まだ幼いタリサがカイに言った言葉。

それがカイの言葉に深く突き刺さり、カイは思わず動きを硬直させた。

カイはポイントを消費して老化を多少遅らせてはいるので外見年齢はまだ20歳程だが、確かにカイはこの世界ではおじさんと呼ばれる年齢に差し掛かっていた。

(…………おじさん、おじ…………さん)

カイは頂垂れると、ゲームの画面を開く。

自らの肉体を強化する欄を選択し、老化を停止させる為のコストを確認する。

老化停止    5000000

カイの指は一瞬躊躇いを見せるが、意を決した様子でカイはボタンを押した。

カイは特に体の変化を感じなかったが、これで老化は停止したのだろつ、カイがついでに画面を見ながらめぼしい物を探していると、ニュータイプLv1という物も発見した。

（ニュータイプか、人の感情を感じたり先読みしたり出来るように反面、死者の念を感じて人を殺せなくなる可能性もあった筈）

カイがコストを確認すると、Lv1は1000000ポイント必要だった。

カイは少し考えると、ニュータイプ能力を会得する。

すると、ニュータイプLv2というものが画面に映り、必要ポイントは3000000ポイントだった。

カイはそれにもポイントを振るか迷うが、ポイントの消費量が余りにも多すぎる。

これ以上ポイントを消費すると諸々に支障が出るため、カイはニュータイプLv2を諦め、画面を閉じた。

「さて、と。ここにはもう用はないから、再び出発するか」

カイは要塞で一泊する事も考えたが、カイは出来れば早く旅を再開したかったので、二人は直ぐに要塞から出る事となった。

そして、カイ達は中国の沿岸部に沿って北へとMSで進んで行く。

沿岸部では中国がまだ涙ぐましい努力を続けているのか、無事な町を見かける事ができた。

「今日はあの町で泊まるう。MSにカモフラージュ機能があるから、それでMSの色を緑色にしてくれるかな」

カイがそう言うのと、シュウイチのハイザックは元々の色に戻り、カイのマラサイも独特なペイントが緑色に変わった。

二機ともザクに似た見た目をしている機体なので、色さえ直せばそれほど怪しまれはしない。

カイ達が町に近づくと、戦術機のファントムが近づいて来たが、必要以上に警戒している様子は無い。

どうやら時々この町にBETAが攻めて来るとき、要塞からMSが派遣される事があるらしい。

その為町の警備兵は町に近づくMSに、そこまで警戒心を抱いてはいないようだ。

カイ達は一泊この町に泊まりたいと伝え、思いの外簡単に了承された。

カイ達はMSを警備兵に預けると、警備兵に教えてもらった宿屋へと向かう。

カイは歩を進めながら町の様子を観察する。町の中は活気があるように見えるが、警備は物々しくBETAに追いやられた結果この町に行き着いたボ口を纏ったような人々表情は暗かった。

（やはり難民は大量にいるが、中国はBETAに必死で構っていないみたいだな）

カイはそう思い、難民になった人達の事を可哀想だとは思うが、そういう全ての難民を助けようと思うに至る程ではなかった。

彼らが台湾へ向かい、自ら助けを求めるならば手を差し伸べるだろうし、彼らが目の前でBETAに襲われていたらカイはおそらく助けるだろう。

しかし、自ら助けを求めている相手を助ける事は、相手の意思をねじ曲げる事になるとカイは考え、緊急の時以外はしないようにしているのだ。

最も他にも大量の難民が流れた事による治安悪化等の問題もあるの  
で、カイは打算も含めて求められない限り助けないという選択肢を

選んだという所もある。

その割に目の前で襲われていたら助けるのだから、カイはやはり矛盾しているのかもしれない。

しかし、矛盾した行動を取るのも人間らしいと言えば人間らしいのかもしれない。

カイとシュウイチは宿屋に着くと、部屋が空いているかカイは宿屋の主人に尋ね、一泊泊まりたいと申し出た。

主人は了承するが、代金は先払いで貴金属か食料を要求してきた。

どうやらこの辺りでは、最早紙幣は通用しなくなってしまったようだ。

カイは背中に下げていた鞆にを下ろすと、鞆に手を入れながら画面を操作し、ポイントを消費して鞆の中に食料を出現させる。

そして、カイは乾パンや果物の缶詰めを取り出し、宿屋の主人に支払った。

その後、カイ達は借りた宿屋の部屋へ向かう。

「どうやら紙幣すら通用しなくなっていたとは、驚いたよ」

カイはベッドに腰掛けながらそう言いつと、カバンからペットボトルに入ったスポーツドリンクを取り出して喉を潤す。

「仕方がないだろ、中国も今や後退し続け、住民を守る事さえ難しくなっているんだ。

住民は紙幣何て言う紙切れより、現物の方がほしいんだろう」

シュウイチはそう言つとカイの隣にあるもう一つベッドに倒れ込む。

どうやら疲れが溜まっているらしい、久しぶりの実戦の為に精神的に疲れているようだ。

「俺も今日は寝る事にするか」

（警備無しでは安全に寝れなさそうな町だから、俺達のMSを見張る偵察機を増やし、俺達の周辺にも偵察機を放つか）

カイはそう思うと、少しポイントを消費して偵察機を辺りに放ち、自分は床についた。

そして、次の日になるとカイ達はMSを更に北へ進めて行く。

「BETAを見ない、まだ一応ここら辺は無事みたいだな」

シュウイチはレーダーを確認しながら、カイの機体と回線を繋げてそう言った。

「いや、散発的にBETAがこの辺りにも攻めてくるようだから、最早戦線も抜けられつつあるのかもしれないよ」

カイはそう言いながらも、レーダーは見ない。

要塞から出た後、一度だけBETAの群れと戦闘したが、各種能力上昇とNT能力を組み合わせる事で、どんな奇襲も回避できる事が証明できたからだ。

そして、カイ達は上海、徐州に観光も兼ねて2日ずつ泊まり、やつと青島に到着した。

青島にはまだ港があり、ここから日本へ船で行くことができる。

日本政府と中国政府には事前に武器や食料等の物資を賄賂として贈っているのだ、向かう分にはそれほど問題はない。

しかし、カイ達がそのまま今の機体で日本へ向かい旅するのは少々不味い。

なので、カイ達は上海に着いた時点で対策を取っていた。



MS偽装Lv17という能力を、カイはマラサイとハイザックに施す。

すると二機に粒子がまとわりつき、見た目をザルークに近い見た目に変える。

この状態にしている時に分解されても、強化を施したザルークを分解するのと同じくらいしか技術は漏洩しない。

ただし、機体の性能も偽装を解除するまでは、第2、5世代戦術機程度まで落ちるので、注意が必要だ。

移動の最中は偽装を解除していたので、移動速度は変わらなかったが青島についてからは、もう迂闊に偽装を解除できない。

カイ達は青島で船に乗り、日本の大阪へと向かう。

カイは船の欄干に座り、まだ見ぬ遠い日本に視線を向けていた。

まだ見ぬ日本へ（後書き）

閲覧ありがとうございました（＾・＾）／

## 幼き魔女（前書き）

今回は難産でした（・ ・ ・）

更新遅くなり、申し訳ありませんでした。

次回はさくさく進められればいいな、と思っています。

## 幼き魔女

「ははは、日本よ私は帰っ……ごほっ、ごほ。  
すまない、少し興奮してしまったようだ」

シュウイチが啞然とした表情で見て来るのを感じ、カイは咳払いをした後そう弁解した。

二人が船から降り、早速大阪を観光しようとなると、一人の男が船の前で二人を待ち構えていた。

「帝国斯衛第20独立警護小隊から派遣されました。鎧衣 左近と申します！」

本日から、貴方様方の案内を務めさせていただきます！」

カイ達の目の前にいる男はそう言うのと敬礼した。

男の外見からかなり若い事がわかるが、カイは何故か目の前の男が油断ならない奴だと感じる。

（日本政府も、流石に国内を見張り無しで自由に見回らせるような事はしないか）

カイはそう思うと、目の前の男の情報を入手しようとして、途中で止めた。

相手がどんなに秘匿とされようと、カイの情報網ならば直ぐに情報を得られてしまう。

しかし、それでは面白くない。

（俺達の日本漫遊の間にこの男は俺達から、どれだけの情報を得られるか見物だな。）

目の前の男は、今のところカイの地位や名前すら知らない筈だ。

カイは台湾でも表に出ることは無く、補佐のアンドロイドに自らの命令を仲介させている。

カイが中将だと知り、しかもその顔を知っている者シュウイチ以外にはもうこの世界にはいない。

それ以外の知っていた者達は、以前のクーデターで文字通り消したんだ。

「こちらこそ、中華民国MS部隊大佐の海堂千里と申します。よろしく願います」

カイはにこやかな表情で偽名を名乗ると、目の前で真面目な表情を

作る青年左近と握手をした。

「ワタシハ、天童秀逸デス、チュウカミンコク、チュウサ、ヨロシク」

シュウイチは片言だが何とか日本語でそう言い切ると、左近と握手をする。

シュウイチは父親が日本人だったようだが、軍に入隊してからは親元にあまり帰らなくなり、日本語を話す機会もかなり少なくなっていた。

しかも、父親も中国語を話す事が出来たので、日本語を聞く機会が元々多くなかった。

その為、シュウイチは日本語を一応話せるが、片言でしか話せないようだ。

シュウイチの名前だが、シュウイチは元々特殊部隊に所属しており、シュウイチの情報は秘匿とされていたので、本名を言っても問題は無いと二人は判断していた。

カイとシュウイチが大阪に到着したのは丁度昼頃で、二人はまだ昼食を食べていなかったので、三人はまず昼飯を食べに行った。

左近に案内されて入ったのは、日本らしい木造建ての食堂だった。

最近の台湾では、木造の建物が少なくなってきたので、カイは自分の祖父が住んでいる家を思い出して懐かしく思った。

（そういえば最近醤油を使った料理も、味噌を使った料理も食べていないな）

カイはそう思いながらメニュー表を見て、刺身定食を選ぶ事にした。

シュウイチはカイが生魚料理を頼んだのに驚くが、左近も同様に不思議に思ったようだ。

（刺身か、親父に聞いた事はあるが流石に生はな……無難に魚のフライ定食にするか）

シュウイチはメニュー表をある程度読む事ができたのに安心し、魚のフライ定食を頼んだ。

シュウイチの家には日本語で書かれた絵本や本があり、シュウイチはそれを幾つか読んでいたので、それが功をそうしたのだろう。

左近は昼食を既に食べていたらしく、飲み物を頼んだだけだった。

「お二方は日本へどんなご用件で来られたのか、お聞きしてもよろしいですか？」

窓から外の景色をぼんやりとカイが眺めていると、左近が話しかけてきた。

「そこまで畏まる必要はないですよ、無理で無いなら普段と同じ話し方で結構です。

それで今回の用件ですが、ロイヤルガード特にはありません、ただの観光ですよ。まあ、しいて言うなら……ス衛の実力を見せてもらいたいとも思いますが」

カイはそう言うと、一瞬だけ剣呑な光を目に宿らせ、その後直ぐに穏やかな表情に戻った。

「お言葉に甘えさせて頂きます。

いやはや申し訳ないのですが、私實力はさっぱりでして。

武士の家柄に助けられて斯衛になれたようなものなんですよ」

左近は恥ずかしそうな表情で頭をかく。

「そうですか、人には得意不得意がありますからね、家柄で決まるというのは戴けない気もしますが、所詮他国の人間がそう言った所で意味は無いですね」



カイはにこやかな表情で皮肉を言うと、出された刺身定食を食べ始めた。

漁港の近くの食堂だからか、刺身は新鮮で旨い。

カイは久しぶりの味噌汁を啜り、白味噌なのを残念に思ったが堪能した。

（髪の毛の色は気にしない、絶対に気にしないぞ）

食堂から出た時に紺色の髪をした女性を見ながら、カイは自分にそう思い込ませる。

台湾が特殊なのかとカイは今まで思っていたが、残念ながら日本にもなかなか特殊な色をした人間がいるようだ。

「やはり京都に行きたいですね、名古屋にも行きたいですがここからは遠いですし」

赤味噌は今度輸入しようとかイは考え、今回は諦める事にした。

カイ達は用意された車で京都に向かい、MSも後から京都に送られるようだ。

（この左近とかいう者というと、何故か不思議な感じがする。そういえば、マナンドル親子を見た時感じたな。

とはいえ、ほんの少しの違和感、もしかしたら慣れない旅で疲れているのかもしれない）

カイは左近と会話しながらそう思い、車の窓に目を向ける。

窓の外には平和な町が広がっている、中国とは大違いだ。

まだ前線国家ではなく、この国では庶民でも頑張れば天然食材を食す事ができる程だ。

豊かなのだろう、しかし中国の光景を見てきたカイには、この雰囲気は逆に危うく感じられた。

平和だが、危機感が無いのだ。中国が崩壊の危機にあっても所詮は他人事なのかもしれない。

（本当に危機感を抱いた時、最早手遅れになっていなければいいがな）

カイはそう思うと、外で楽しそうに遊ぶ子供達から目を逸らした。

京都に着くと、カイ達は観光名所を巡り歩いた。

金閣寺に銀閣寺、清水寺等のベタな所を周りながら、中学の時に行った修学旅行を思い出し、有名な観光地はほとんど変わりが無い事に安心した。

「いや、素晴らしい。流石日本の首都ですね」

カイがそう言うのと左近は謙遜し、シュウイチもそれなりに楽しめたらしく、どら焼きを頬張っている。

「あら、鎧衣じゃない、お久しぶりね」

カイ達が歩いている途中、左近の知り合いだと思われる、紫色の髪をした少女が突然話しかけてきた。

「あはは、久しぶり」

「その様子だと任務中？なら、お邪魔してしまったかしら」

左近が笑顔で挨拶を返している間に、目の前の紫色の髪をした少女は三人を観察するとそっけない声音でそう言った。

「いえ、左近さんには観光案内をして頂いてるだけですから構いませんよ」

カイはそう言うと、目の前の少女を観察する。

目の前の少女からもカイは何かを感じ、しかもその感じは左近やマナダル親子から感じた感覚よりもはっきりと感じる。

しかし、それが何なのかはわからず、カイは困惑していた。

「香月夕呼と言います。よろしく」

目の前の少女はカイに手を差し出してきた。

握手する習慣等日本には馴染みの無い筈だが、もしかしたらこの世界の日本にはそういう習慣があるのかもしれない。カイはそう思いながら握手する。

「はじめまして、中華民国MS部隊大佐の海堂千里と申します  
敬語ではなく、普段通りの話し方で結構ですよ」

カイがそう挨拶を返すと、目の前の少女……夕呼は興味深そうな表情をカイ達に向ける。

その後夕呼はシュウイチとも握手を交わし、再度夕呼は二人を交互に見る。

「へえ、今話題の台湾からの軍人、しかも佐官クラスが二人なんて、凄く興味が湧いてくるわ。」

観光しているそうだけど、付いていったらお邪魔かしら？」

夕呼の言葉にカイは考える。特に夕子が付いて来ても問題は無さそうだとカイは判断を下そうとするが、安易に許可するのも不味いような気がする。

（まあ、何かイベントが起きてもいざとなれば幾らでも手はある。ここは許可するとうとうか）

カイはそう結論を出して、夕子の同行を顔に笑みを作りながら許可した

その後、四人はしばらく京都の観光を続けた。

シュウイチの口には八つ橋は合わなかったようだが、どら焼や饅頭は気に入ったらしい。

お土産の饅頭をシュウイチは三箱程土産屋で購入していた。

更にカイ達が歩いていると、カイ達の前を戦術機が通り過ぎていった。

「ファトム……いや、瑞鶴ですか」

カイは目の前を通りすぎて行く機体を見て、そう呟く。

日本に合わせてある程度改造を施されているが、第一世代の機体だ。

「純国産、いつ開発できるんでしょうね」

カイがそう言うが、日本の純国産の開発計画は一応機密になっている。

左近は表情こそ変えないが、カイが何故知っているのか不思議に思っているのかもしれない。

「ま、機密とは言ってもアメリカとイーグルのライセンス生産について堂々と交渉してたら、普通はあっさりバレるわよね。」

それにしても、他が第二世代を配備して第三世代を開発してる時に、

「こちらはまだ第一世代が主力なんて悲しくなるわね」

夕呼はそう言うのと頭を手で押さえ、苦々しい表情をしていた。

技術力が足りないなら、他の国から技術を援助してもらうのが手っ取り早く技術力を上げる方法だ。

しかし、日本には日本の意地がある。心情的には他国の力を借りたくは無い。

そのため日本は現在、アメリカの助けを借りるか借りないかで、長く議論し合っている。

（国とはなかなか上手く纏まらない物だ。  
纏めたいなら、邪魔者全てを粛正すればいい。  
最も両陣営の力が拮抗していたら、共倒れになるだけかもしれないけどな）

カイはこの国を一日見て回ったが、絶対に助けたいという感情が沸く事はなかった。

確かに日本と酷似しているこの国を見て郷愁の念に駆られるが、その一方でこの国は日本ではないと確信できる。

カイはそういう点で、この国に来て良かったと思った。

日本がBETAに襲われた時に、判断を下す材料ができた。カイが色々と思いを巡らせている時に、一人の軍人が近づいてきて左近に何かを伝え、去って行った。

「お二方の戦術機が到着したようです。  
見に行けますか？」

左近がそう言うとシュウイチは頷き、カイも機体が分解されていないか心配になり、見に行くことにした。

一応二機とも、二人以外は操作できないようになっていたので、無断で操作される心配は無い。

「うーん、今は戦術機の技術の蓄積を行っているみたいですし、私のザルクカスタムを起動させて、瑞鶴と勝負させてみませんか？  
此方としても、日本人の技量を拝見したい所です」

カイがそう言うと、左近は躊躇うような表情を見せるが少し考える  
と了承し、カイ達を戦術機を収納する施設へ案内して来た。

そこは軍の施設らしく、普通ならば一般人の夕子は入れない筈なの  
だが、何故か普通に夕子が付いてきている。



まあ、左近が何も言わない所を見ると、いいのだろうとカイは判断し何も言わなかった。

カイが中を観察していると、どうやらここは軍の訓練場らしいという事がわかった。

左近は施設の上官に話をしに行き、しばらく施設内のロビーで待っているとかイ達は訓練場の中へ案内される。

「なかなか準備が早いですね、相手はもう既に準備していますか」

カイは訓練場の真ん中で佇む瑞鶴を見てそう言つと、カイも施設内に収納してあつたマラサイに搭乗した。

しかし、現在カイが乗る機体は偽装が施され、性能は大幅に低下している。

だが、それでも瑞鶴より性能は遥かに上なので問題無い。

訓練場の周りには様々な機械が設置され、帝国の研究者達が忙しそうに駆け回っている。

カイがしばらく機体の中で腕を組み、沈黙しているとようやく戦闘の許可が出た。

カイは直ぐに目を開け、それと同時に機体を横にずらす。

するとカイの機体がさつきまでいた場所をペイント弾通過し、訓練場の壁をカラフルな色に染めた。

カイはザルークに長剣を構えさせながら、目の前で銃を構える白い瑞鶴へとザルークを接近させる。

相手の瑞鶴が放つチェーンガンの連射は普通ならば避けられない筈だが、カイは自らの能力でチェーンガンの発射を事前に察知し、弾丸を避けながら瑞鶴との距離を詰めて行く。

ザルークがある程度の距離まで近づくと、相手の戦術機はザルークに向かってチェーンガンを投げつけると、刀を抜く。

カイの緑色の機体は剣で飛来してきた銃を受け流し、舞鶴はその間に距離を詰めてザルークに向かって長刀を振るう。

カイは直ぐ様長剣で舞鶴の斬撃を受け止める。

機体に無理な動きをさせた為にザルークの関節が磨耗したとデータ上は出たが、データ上の事でありカイは気にせずザルークの長剣を持つ手に力を込めさせる。

両機は少しの間つばぜり合いを演じた後、素早く飛び退いた。

カイは口元に笑みを浮かべると、ザルークを敵戦術機に向かって再び突撃させる。

「む？」

そこでカイは不思議に思う。

敵の戦術機が反撃もせずに硬直しているからだ。

カイは不思議に思いながらも罨かと警戒し、ザルークに突撃を止めさせてチェーンガンの銃口を敵に突き付ける。

しかし、一瞬後にカイは自分の判断が間違っている事に気づく。

（そういえば、他国の戦術機は動作の合間に何故か隙が出来るんだった。

すっかり忘れていた！）

カイが思い出した頃にはもう遅い、相手は再び動き始め、カイがザルークに発射させたチェーンガンの弾が幾つか直撃し、舞鶴の白い機体が他の色に染まっているがまだ動けるようだった。

長刀を瑞鶴は振るい、カイのザルークはそれをチェーンガンで受け、チェーンガンは長刀に斬りつけられた部分に赤い線が走り、チェーンガンは破損したという判定が出た。

カイはそれを見て、ザルークにチェーンガンを投げ捨てさせると長剣で瑞鶴の長刀を受け止める。

そして、ザルークに腰から短剣を抜かせると、舞鶴の胴体を短剣で薙いだ。

舞鶴の胴体に青い線が走り、舞鶴に破壊判定が出る。

（少し遊び過ぎたか、もう少し速く倒せた筈なのにな）

カイはそう思いながら、ザルークを収納庫へ歩かせる。

「嘘でしょ。何で硬直時間が無い上に突撃を停止させれたの？しかも、あの動きはパイロットに衝撃がいかないように、計算され尽くしているようなね。」

従来のOSを整理し、更に改良を加えたのかしら」

シュウイチの隣にいる夕呼はそう呟くと、顎に手を添えて何やら考え始めた。

（OSについてはカイはそれほど知識が無いようだったから、ある程度俺も助言したがその通りに改造できいたとは、台湾の科学者も捨てたものではないな）

シュウイチはそう思い、自分の要求をほとんど叶えたOSを見て感

心していた。

「あの台湾製のザルークは一般の機体に比べてデザインが少し異なっているけど、どれくらい性能が上昇してるの？」

夕呼が隣にいるシュウイチに尋ねる。普段通りの話し方を許可されたからか、最早敬語は使わないようだ。

しかし、尋ねられたシュウイチは困った。

夕呼が何を言っているのか、相手が早口で喋ったので理解できなかったからだ。

シュウイチが黙っていると、夕呼は無視されたと思ったのか、むっとした表情になる。

「すまない、シュウイチは完璧に日本語を話せる訳ではなくてね、ちなみに先ほどの機体の性能だが2、5世代レベルだよ」

先ほどまでの話を聞いていたのか、カイが三人に近づきながらそう言った。

「やはりシュウイチのアドバイス通り、硬直時間の緩和とキャンセル機能を追加させたのは正解だったよ」

カイの言葉を聞いて左近が素早くメモを録っていたが、カイは別に

重要な情報ではないと判断していたので気にしなかった。

「へえ、あの機体は貴方が開発したの？」

「いや、俺はMSの開発の方が専門なんだ。まあ、ザルクもMS技術から流用されてる部分があるんだけど」

夕呼の言葉にカイは首を横に振って答えるが、夕呼は逆にMSという言葉で余計にカイに興味を持ったようだ。

カイの腕に抱きつきながら、MSの事についてカイに尋ねてくる。

カイはその年頃にしては大きく柔らかい感触を右腕で感じ、顔が赤面しそうになるのを鋼の自制心で耐えようとした。

カイは現実とこの世界の年齢を合わせると、魔法使い差し掛かっている。

アンドロイドには欲情しないし、この世界の女性は所詮ゲームのキャラクターなのだとカイは思い、まともに見ようとはしていなかった。

しかし、何故か最近その心境が変わりつつあるのを、カイは自覚していた。

紫色の髪が似合う、現在でもかなり美人な女の子がカイを見つめてくるのだ。

カイは陥落しそうになるが、NT能力と悪意への察知能力にカイは助けられた。

NT能力については、何故かNT以外の相手の心情も多少は読めるように何故かになっていた。

そして二つの能力により、カイは目の前の夕呼から何となくカイに対する感情を感じることができた。

打算と好奇心、その二つが夕呼のカイに対する感情のほとんどを占めている。

カイの心はそれを見て一瞬で冷却し、頬の微かな赤みも無くなった。

相手はカイを利用できないかと考えているのだろっ。

ロマンも何もあつたものではない。

（まあ当然か、見ず知らずの男に惚れる女などいな……）

カイはそこまで思っただけで思考を一瞬停止させる。

何故なら夕呼のカイに対する感情の内、一割程だけだが好意が混じっていたからだ。

（何で会って直ぐの相手に好意を懷けるんだ？

確か恋愛関連の項目にはポイントを振っていないから、そんなゲームの主人公みたいな事は起きない筈なのに）

カイは困惑し、夕呼はその間にカイを丸め込もうとするが、流石にカイもそれは回避する。

左近とシュウイチは夕呼の強かさに少々呆れていたが、止めに入る事はなかった。

それからカイとシュウイチは京都にしばらく滞在していたが、その間は夕呼が頻繁に尋ねて来て、カイをあの手この手で落とそうとしてきた。

だが、幸いカイが夕子に完全に魅了される事はなかった。

しかし、カイ達が帰国する間際には夕呼はカイに手紙を必ず送るよう念を押し、カイもそれをついには了承させられていた。

それはもしかしたら夕呼の打算と好意の割合が変わったからかもし



れないが、それはカイにしかわからない。

## 幼き魔女（後書き）

閲覧ありがとうございます。

フラグ……とまではいかないかな？

でも腹黒同士お似合いかもしれないですね。

## ハイヴ攻略新たなBETA（前書き）

キングクリムゾン！

10000文字……執筆するのにかなり手間取りました（・ ・ ・）

## ハイヴ攻略新たなBETA

台湾に戻ったカイは着々と準備を進めていった。

ヒマラヤ山脈を盾にしたインド亜大陸の各国軍は、BETAとの絶望的な戦いに疲弊し、徐々に消耗し戦線は後退していった。

しかも、更に事態は悪化する。

1990年、インド領マツディヤ・プラデーシュ州ボーパールにBETAの巢であるハイヴが建設され始めた。

インド亜大陸の各国は、早急にハイヴを叩く事を会議で決定し、ハイヴ攻略計画で立案された内容をそのままボーパールで実行する事になった。

それは、軌道上からハイヴへの突入と爆撃。

しかし、その作戦を実行するにはまだ少し時間がかかりそうだ。

そして、BETAはインド亜大陸の各国と戦いながらも更に東進を開始、東南アジア各国とBETAとの戦いの火花が切って落とされた。

東進してきたBETAの中には台湾を目指すBETAの群れもいたが、MS軍団の活躍で死傷者は数十人ですんだ。

現実ならば数十人死亡するだけでもニュースになる可能性があるが、この世界では逆に死傷者が少な過ぎてニュースになるレベルだ。

そして、カイは更にMS部隊に活発にBETA狩りを行わせながら、宇宙用のMSを開発し、旧来のMSを宇宙でも対応できるよう改造させていく。

ハイヴ攻略作戦から更に具体的になってきて、作戦名が変更されたスワラージ作戦で実験を行う予定の物も幾つか開発させ、着実に準備を進めていく。

特にスワラージ作戦では、様々な問題から戦術機を主力にする必要がある。

よってカイは、迷う事なく大量のCPUを生産していた。

（今回はあくまでデータの採取が目的、無闇に人材は減らせない。安い戦術機に安いCPUを装備させて、鋼鉄の盾としながら作戦を遂行すればいい。  
最も、策はそれだけではないが）

カイは様々な事を行い、増減していくポイントを眺める。

今ポイントはギリギリ収支が0になっているが、それは生産を工場で行う事でポイントの消費を抑えているからだ。

そしてカイは、食料や雑貨の生産から、MSの改造まで幅広く行っているが、それにはBETAが必要不可欠だ。

今やカイはBETAは大事な資源の一つだとさえ、思うようになっていた。

ちなみに一応他国の戦術機や戦艦を撃破する事でも、ポイントは手に入る。

そして、相手の位が高いほどポイントは高い。

だが、だからと言ってMSで他国を蹂躪するのは流石にカイもやりたいとは思わないし、BETAを殺してポイントに変えた方が、敵の数の関係もあり効率が良い。

（やはり中国にある要塞が、この国の心臓だな。  
だが、心臓がここにあるのは些か問題かもしれない。もし、MS部隊がやり過ぎて中国からBETAを駆逐したら、土地は中国に返却し要塞は撤去しなければいけなくなる。  
しかも、BETAが全滅すればあらゆる産業はストップだ）

カイはそう思い、スワージ作戦が行われる場所がインド亜大陸で行われる事になり、本当に良かったと安心した。

この作戦にはソ連が暗躍し、台湾が割り込む事に対しては良い顔をされなかったが、別の作戦の同時決行をソ連に打診し、しばらくソ

連と協議した結果何とか台湾軍の作戦への参加も認められた。

しかし、役割はほとんど捨てゴマと言っている程なので、CPUの生産は正解だったとカイは思い、安堵した。

そして1992年、ついにスワラージ作戦が決行された。

国連軍、東南アジア諸国、インド亜大陸各国等の様々な国が宗教という壁を越えて一致団結し、インド亜大陸の命運を賭けてハイヴ攻略に望んだ。

宇宙軍による軌道爆撃からの、戦術機の軌道降下。

再突入殻で身を覆った戦術機は、ハイヴに向かって落下していくがそれだけでも生存率91%

幾つかの戦術機は、何もする事なく再突入殻が破損して空中で暴散した。

一方、台湾軍の戦術機部隊も宇宙軍の連絡と共に進行を開始する。

その機体は何故か全て戦術機であるザルークであり、その数も3000機程だ。

各国の戦術機投入数と比べると驚異的な数だが、前にMSで防衛戦

を行った時に比べると数は少ない。

ザルークの部隊は迫り来るBETAを、機体数を減らしながらも蹴散らしながらどんどん進撃していき、突然部隊は急激右に曲がって目標地点に到着した。

目標地点には巨大なバルカン砲とマゼラ・トップ砲が設置されており、カイの予想通り生物ではないのでBETAには破壊されていなかった。

ザルーク達がバルカン砲を起動させてき、周りにいたBETA達をバルカン砲の弾で撃ち抜いていき、ザルークの残機数は後1500機ほどになってしまったが、周りのBETAをある程度駆逐するのに成功した。

しかし、それも一瞬だ。

ハイヴから直ぐに大量のBETAが沸きだし、光線級と重光線から光線が一斉にザルーク部隊に向かって発射される。

だが、光線に対しての何も対応をしていない等ありえない。

光線級達がエネルギーを溜め始めた瞬間に地面から合金の壁が出現し、ザルーク達を覆う。



設置された武器の銃口部分とザクのモノアイがある位置には穴があるが、そこに丁度光線が命中したら諦めるしかない。

それ以外の部分に当たれば、対レーザーコーティングと耐熱装甲を幾重にも重ねた壁が、敵の光線から機体を守る。

この対レーザーコーティングを使う為に、わざわざ劣化品とはいえ対レーザーコーティングをアメリカに提供したのだ、使わなければ無駄になる。

対レーザーコーティングを開発したという事になっているアンドロイドは順調に出世しているが、今回の対レーザーコーティングの活躍次第では更に出世し、手札が増えるかもしれないというカイの思惑もあった。

そして当初の予定通り、光線級達のレーザーにより集中攻撃を受けた機体以外は破壊されたものの、それ以外の機体は無事光線を防ぎきった。

そしてザルーク部隊は直ぐに反撃を開始する。マゼラ・トップ砲を装備するザルークはレーザー級が多く居る場所を砲撃していく。

他のザルークはバルカン砲を発射して、近づくBETAを射殺していくがこちらは流石に数が多すぎ、BETAの群れは止まらない。

要撃級、突撃級、戦車級、闘士級、近づくBETAの数が多すぎて判別しにくい、大体その四種類で群れは形成され、その後方には要塞級の姿が見える。

戦術機と群れとのは残り100メートル程。

数の差は圧倒的にBETAが勝り、外にいるBETAだけで三万以上は存在する。

そして、ハイヴからは今も次々とBETAが泉のように沸きだし、枯れる様子を見せない。

残り80メートル、光線級の第二射が放たれ、12機がレーザーの集中攻撃によって溶解し、ザルクは反撃とばかりに光線級に向かって、マゼラ・トップ砲を放ち撃ち殺していく。

そして、BETAがザルクから60メートル地点に侵入、CPUはプログラムされた内容を忠実に行う。

60メートル地点に最初BETAが踏み入れた瞬間に、地面に仕掛けられた幾つかの爆弾がMSの周りを囲むように爆発する。

それだけで、ザルク部隊の周りには深い穴ができた。

作戦が可決してから準備の時間はたくさんあった、カイが仕掛けを

ハイヴ付近に作るには十分に。

ステルス機能を施されたアッグの部隊がひたすら地面を掘り進め、完成した穴は最早崖と言ってもいい程巨大だった。

崖の壁は起伏がなくツルツルと滑り、飛行できないBETAでは脱出する事は不可能だ。

そして、BETA達が落ちた穴には先へ進む為の一本の長いトンネルがあり、ほとんどのBETAは何も考えずそのトンネルを直進していく。

長い長いトンネルだが、終わりはある。

BETAは一度トンネルの壁を破り、進もうとしたが壁は凄まじい強度を誇り、孔を空けられる事はできなかった。

そして、ついに戦闘のBETAがトンネルから飛び出した。

そこはハイヴから大分離れ、他国の目も光ってはいない場所。

BETAが出た先は円上に広間が広がり、崖のせいで行き止まりになっている。  
そして

「いらつしゃい」

台湾軍の兵士の一人がそう呟く。

崖の上で待ち構えるのは、MS軍団総数30000機

更に加えてヒルドルブやビッグ・ザム等が3000機程起動しており、広間に向かって砲身を向けていた。

獲物を見つけ向かってくるBETAに対して、雨霰と尽きる事ない巨大な弾丸の雨を浴びせていく。

MSの情報は知られたくない、ならば目のつかない所で使えば良いのだ。

最早戦いは一方的だった。

普通数万のBETAとの防衛戦になれば、いくらMSの大部隊でも死者は出る。

しかし、硬く滑るせいで登れない壁の上からの射撃は、死者を出すことなく一方的に淡々と行われていく。

BETAの死骸で広間が埋まり、そのうち広間は満杯になるだろう。

その時になったら、ようやくBETAとの接近戦が始まる。

しかし、そのときには既に勝負ありだ。

B E T Aが飛べない限り。

「カイ様、やはりハイヴから特殊な電波が他のハイヴがある方向に向けて流されています。」

ハイヴとハイヴ同士でやはり連絡を取り合っているようです。」

アンドロイドがそう連絡すると、カイは作戦を実行させる。

一瞬、ハイヴの周りを囲むように光る膜が現れ、消える。

「ハイヴ間の通信妨害に成功しました。更に、ハイヴから比較的近距离にいるB E T Aへの指示電波の妨害にも成功。」

カイはその結果を聞くと、笑みを浮かべる。

ハイヴ間の通信断絶、これが完成した事による恩恵は計り知れない。

もし、今回の事態に対策がとられ、飛行型のB E T Aが現れても、その飛行型が現れるのはこのハイヴだけだ。

他のハイヴからも突然、飛行型のBETAが生産される事は恐らく無い。

だが、これにもまだ問題があり、このハイヴが崩壊しどうなるかはカイにはまだ予想できないが、仮にこのハイヴを破壊したらBETA達が他のハイヴに移動するのだとしたら、そのBETA達によって情報が他のハイヴにもたらされる事になる。

故にハイヴ付近のBETAは殲滅しなければならない。

ハイヴの周辺にはザクカスタムが潜んでいるが、一匹残らず狩れるかは微妙かもしれない。

そして、ようやく軌道爆撃と軌道降下が始まった。

投下された爆弾をレーザー級が撃ち落とそうとするが、ザルク部隊の射撃によってレーザー級の数が少なくなってきた。

未だにBETAがハイヴから沸き出し続けるが、地面を埋め尽くす程の数から心持ち少なくなった気がする。

そして、遂に起動上から戦術機の降下が始まった。

戦術機を入れる棺桶のような再突入殻は、高度2000メートルで戦術機と分離し、レーザー級の迎撃にたいする盾にもなる。

「MS部隊、そろそろミッションを開始するよ」

その様子をレーダーで見ながら、カイはMS部隊の精鋭達に声をかける。

戦術機は当初の予想よりも遥かに被害が少ない状態で、降下に成功した。

やはり光線級の数減らした事が、成功の鍵だったようだ。

戦術機部隊は直ぐにハイヴへの突入を開始、地獄へ続くのではないかと思う程深く暗い穴は、戦術機を飲み込んでいく。

カイはそれをMSに取り付けられたモニターで確認し、突入した戦術機の数を確認する。

「168機中17機が降下失敗、9機が光線級に撃ち落とされ、2機が着地失敗か。」

残り140機、予想以上に生き残ってはいるが、入り口の時点で更に数は減っているな」

カイはそう呟くと、時計を確認しザルークの部隊の様子を見る。

ザルークの部隊は光線級と近づく要塞級を狙って攻撃を続けている

が、光線級に戦術機を守る壁を貫通される事態が何回か発生し、ザルークの数は緩やかに減り始めている。

このままいくと全滅する事になるが全て無人機であり、作戦上仕方のない犠牲だ。

（戦術機の数が50を下回ったら突入開始だ、下手した俺も死ぬかもしれないな。そういえば、遺言を書き忘れた、うっかりしてたな）  
カイがそう思っている間にも、ハイヴの内部で戦術機は破壊され、兵士が志し半ばで散っていく。

「よし、いくぞ」

何もない空間に電気のような物が走り、100機のザルークに見えるMSが出現する。

全て見た目はザルークだが、それは外観だけだ。

100機のザルークがBETAを切り裂きながら、ハイヴへと直進し始める。

その100機のパイロットは全員、台湾軍の中でもエース級のパイロット達だがハイヴに着くまでに全員無事という訳ではなかった。



途中突撃級に衝突されたり、要撃級の腕が頭に直撃したりして少しずつ部隊の機体数は減っていく。

ハイヴに突入するまでに9機が脱落し、部隊の数は残り91機になった。

「外装解除しろ、ヒート系武器も解禁する」

ハイヴに入った瞬間に、ザルークの外装が解除されザクカスタムやドワッジ、ケンプファーやグフカスタム等が姿を表した。

重い外装が外れ、身軽になったMS達は高速でホバー移動をしながら、横坑<sup>ドリフト</sup>を進んでいく。

横坑のいたる所からBETAが沸き出し、MSに向かって飛び掛かってくる。

特に戦車級は厄介だ。尋常ではない数に加え、その頑丈な歯でザクカスタムの装甲にかじりつき、少しずつザクの装甲を削っていく。

更に狭い横坑の中で全力で突撃してくる突撃級のせいで、隊員達は一秒たりとも気を抜く事はできない。

モノアイがある頭部に戦車級が飛び掛かり、視界が塞がった瞬間に要撃級が機体を殴り、突撃級が硬い鋭角でMSの装甲を貫く。

「いくら何でも多すぎだろ!？」

自信満々な表情でハイヴに突入した、MSのパイロットは顔からおびたらしい量の汗を流しながら、ザクマシンガンをザクカスタムに連射させていく。

横坑を抜けるとMS部隊は、広場に出た。

そこで目を光らせながらMS部隊を迎撃するのは、光線級の群。

対レーザーフィールドに過信した兵士は一斉射撃を受け、跡形もなく消滅した。

（精鋭とはいえ、命を賭ける戦いを経験した数はやはり他国に比べて劣っているか。

だが、まだ83機は生き残っている。ぎりぎり最奥まで行けるか）

カイは最終的に自分一人になっても、最奥にはたどり着こうと思いつながら、マラサイにヒートクレイモアを振るわせ、光線級を切り裂くと先へと進んでいく。

その後を追いかけるのは黒いハイザック、シュウイチの機体だ。

シュウイチも脱落することなくここまで来ることができたが、ハイ

ヴの内部が流石にここまで地獄のような空間だとは思っていなかった。

360。何処からでもBETAは現れ、MSに向かって飛び掛かって来る。

パイロットの兵士の神経はすり減り、精神力が尽きた瞬間にMSは群がる戦車級に食われていき、要撃級に止めを刺されていく。

パイロット達は今自分がどの位置にいるのかすら、生きるのに必死で確認していないようだ。

しかし、隊から離れたら死ぬというのは理解しているのか、死にもの狂いで前のMSに追い付こうとする。

（必死な者もいる一方で、まだ余裕がありそうな奴も数人いるか、俺は自分を強化しているからわかるが、他の奴等は素のまま……化け物かよ）

カイはそう思いながら先頭を走り、冷静に向かってくるBETA達を溶断していく。

広場を抜け、カイ達の機体は二層へと降りて行く。

途中、戦車級に機体中を集られ、食いつかれたせいで機能停止にな

った戦術機を見かけたが、助ける余裕も無い。

戦車級に機体を喰い千切られ、パイロットが恐怖の声を上げているを感じながらもカイは心を鬼にして先へ急ぐ。

三層目に到達して直ぐにカイ達が見た物は、大量のBETA達に対して奮戦する14機の戦術機達。

100機以上いた状態から、最早三層目の時点でここまで数を減らしたようだ。

「こちら台湾軍、加勢する！」

カイは短く戦術機部隊の兵士達に回線を繋げてそう言うと、カイの部下達も援護射撃を開始する。

目の前にいるのは師団規模のBETA達、辺りには戦術機の残骸が散らばり今もなお戦術機は破壊されている。

（数体アンドロイドを戦術機部隊に侵入させたが、生き残っているのは2体だけか）

カイはそう思いながら、BETAの群に突入し、BETAの群の中で鬼神の如く暴れ回る。

「無駄だ全て見える。死角は無い。刈り取られる」

カイがヒートクレイモアを振るい、シュウイチのハイザックとザクカスタムのザクマシンガンが援護する。

だが、敵は多くMS部隊は少数、カイは仕方なくザメルとドワツジに乗る兵士に指示を出した。

ザメルの680mmキャノン砲とドワツジの420mmロケット砲が一斉に後方から発射、BETAの群の中心で炸裂した。

その巨砲の威力は凄まじく、しばらくすると先への道が見えた。

「今の内に進むぞ！」

カイはそう言うと、カイが先頭に立ってBETAを切り裂きながら突き進み、グフカスタムとガルバルディがザメルとドワツジを守りながら通路へ向かう。

通路をMS部隊と、更に数を減らしたがまだ生き残っている戦術機が突き進み、また広場に出た。

「うつ」

そこでカイが見た光景は、カイが今まで見た中で最もグロテスクな光景だった。

脳みそだけになった者、全身の皮を剥がされて触手のような物で四肢を貫かれている者、四肢を切断され切断された部分を触手で繋がれている者……カイは吐き気を覚えるがそこで働く小型のBETAを踏みつけ、助けられない事を心の中で謝りながら先へと進んだ。

「皆後少しだ、踏ん張れ」

カイはBETAに破壊され残り60機程となった隊員達を激励し、強い熱反応を示すハイヴの最奥である大広間にたどり着いた。

「ここがハイヴの最奥か、アンドロイドA、作戦通り機器を取り付けろ」

カイの命令でアンドロイドが乗ったザクカスタムが、目の前の反応炉に機器を取り付け、調査を開始する。

一方、唯一ここまで付いてきた二機の戦術機の内、一機のパイロットはここで何をするべきなのか考えていた。

てっきり、ハイヴの最奥にはボスのようなBETAがいるものだと思っていたのだが、最奥には反応炉しか無い。

しかも、生き残っていた戦術機の内、ロシアの戦術機はMS部隊が援軍に來た途端、隙を見て脱出して行った。

おかげでここには、戦術機は二機しかない。

戦術機二機のパイロットは二人とも国連軍だが、出身アメリカだ。

本来はオルタネイティブ3のリーディングを行う際の、弾除け扱いだったのだが本人達を知ることにはなかった。

カイが反応炉の調査をアンドロイドに行わせていると、大広間が突然揺れ始めた。

「はは、遂にBETAのボスが御出座しになるみたいだぞ、皆気を引き締めろ」

カイはレーダーを見ながら、戦術機を含めた全員に回線でそう伝え、各MSは警戒を強める。

カイのレーダーに映る反応は、過去にBETAが地下から進行してきた時にもあった反応と同じ。

(UNKNOWNの御出座しか)

大広間に巨大な穴が空く、巨大……要塞級と比べてもまだ巨大な敵の姿が目の前壁を突き破り現れる。

(要塞級の三倍……150メートル以上はあるぞ)

まるで山だな)

余りに巨大なBETAの出現に、カイの後ろにいるMS部隊の兵士達も呆然とした表情をしている。

カイにとってもこれほど巨大なBETAの存在は予想外だったが、これで地下進行をどのようにして行っているのか判明した。

「鈍重な要塞級より更にでかいんだ、動きは鈍い筈。これを倒して早く帰って旨い飯でも食おう」

カイはそう部隊の兵士達に言うと、ヒートクレイモアを構えて突撃しようとする。

その瞬間、目の前の超巨大BETAは口を開けた。

どのような攻撃が来るかわからない、口から火炎を吐くのか、溶解液を吐くのか、それともレーザーを発射するのかもしれない。

全ての機体は直ぐに目の前のBETAの射線から離れる。

すると、目の前の超巨大BETAの口から、大量のBETAが吐き出される。



その中には驚く事に、全高50メートルもする巨大過ぎてハイヴの中にはいない筈の、要塞級も混じっていた。

「要塞級はこうやって地上に輸送しているのか」

カイのマラサイはザクマシンガン改を連射し、近づくBETAを撃ち殺していく。

「カイ、いい加減アレを使うぞ」

シュウイチはそう言うとかイの返事も待たずに、ハイザックの装備を変更させる。

ハイザックの持っていたザクマシンガン改が、更に巨大なマシンガンに換わり、銃口が目の前の巨大なBETAに向けられる。

「ザクレールマシンガン、ファイヤ」

ビグ・ザムに搭載されていた超電磁砲を小型化した、次世代のザクマシンガンの弾丸が超巨大なBETAの体を貫いていく。

BETAの巨体がつねり、天井から瓦礫が落下して来るが、シュウイチは構わず砲身が焼けるまで超電磁砲を連射し続けた。

「……撃ち止めた、止めをさせ」

「「うおおおお！！！！」」

シュウイチの言葉で超巨大なBETAにザメルとドワッジの部隊が一斉射撃を加える。

「ふう、終わったか。」

さつさと反応炉を破壊して帰ろう」

カイはそう言うと、ザクレールマシンガンをマラサイに装備させ、銃口を反応炉に向ける。

アンドロイドから、データの採集が完了したという報告があった。

最早反応炉には用は無い。

「危険、反応炉のG元素が大幅に消費されました。  
未確認BETAが産まれます」

アンドロイドの言葉と同時にカイの機体が構えるザクレールマシンガンが、何者かに弾かれる。

「ここでまた新種か！？」

カイはザクレールマシンガンを弾いた触手のような物が、機体に更に迫るのを感じて回避した。

（止めをさせると思っただけで油断した。不覚だ）

カイの目の前にいるBETAはたった一体、身長はMSと同じ18メートル位、人型に類似した見た目をしている。

足は二本で更に尻尾が二本生え、触手のような腕が左右に三本ずつ肩のような部分から生えている。

更に頭部が存在し、目が一つ中心にあるだけでそれ以外の機関はない。

全身は真っ白だが、触手のような六本の腕だけは赤く、ザクレールマシンガンを弾かれたマラサイの腕が破損しているのを見ると、触手には要撃級の腕以上の硬さと柔軟性がある事がわかる。「ゾック、ドワッジ部隊は大広間に侵入してくるBETAを叩け！

後の隊員で新種を倒すぞ！」

カイがそう言うのとマラサイの黒い模様が赤く輝き、機動力が急激に上昇する。

カイが片手でヒートサーベルを振るい、防御するBETAの触手ごと切り裂こうとするが、触手は熱にも強くなっているのか溶断でき

ない。

カイの機体は片腕しか使えず、一方相手は六本の腕を全て使用できる。

カイの先読みの力が無ければ、あつという間にやられていただろう。

シウウィチやその他のMSが、針の穴に糸を通すような射撃でカイを援護し、グフカスタムがカイとBETAの剣舞に加わりうとヒートサーベルを構えて近づく。

すると、BETAの頭部にある目玉が光り、レーザーを照射してグフカスタムに命中させた。

対レーザーコーティングと光線は激突し、爆発してグフカスタムは後ろに吹き飛ばされる。

（こいつ、光線級的能力も兼ね備えているのか！？）

カイはそう驚く半面、弱点が判明した事を嬉しく思う。

瞼のような膜で目をBETAは守ってはいるが、ヒートサーベルならば切り裂ける。

カイは覚悟を決め、更に一步目の前の敵に近づいた。

だが、敵も簡単にはやられてくれない。

二本の尻尾が地面を叩き、凄まじい俊敏性を目の前のBETAはさせる。

尻尾は武器であり、MSのブースターのような物らしい更に頭部のビームも使い、まるで全身が武器でできているのかと思う程の変幻自在の攻撃を見せる。

その頃、生き残りの戦術機も反応炉の破壊に取り組んでいた。

しかし、戦術機の武装では火力不足なのか、反応炉を破壊する事ができない。

（何か、何かないのか！？）

戦術機のパイロットは弾が切れたチェーンガンを放り投げると、辺りを見回す。

そして、見つけた。

BETAによって弾き飛ばされた、ザクレールマシンガン。

「あれを、ブツ放すぞ」

パイロットは唯一生き残った僚機にそう言うと、ザクレールマシンガンを回収し、反応炉に銃口を向ける。

すると、戦術機の背中をもう一機の戦術機が支えた。

「これで反動も問題無い。安心して放て」

「ああ、これで終わりだあああああ……！！！！！！」

僚機の言葉に力を貰い、ザクレールマシンガンの引き金が引かれる。

音速を越える速度でザクレールマシンガンの弾丸は反応炉……後に頭脳級と名付けられるBETAを貫き、その機能を遂に停止させた。

世界初、戦術機によるハイヴの破壊。

歴史に残る快拳がここに達成された。

そして、反応炉が破壊された瞬間、ボーパルハイヴ周辺のBETAが全てその活動を一瞬停止させた。

カイはその一瞬で新種の頭部をサーベルで貫き、更にその肉体を両断した。

「終わった、か」

カイはそう言う息を吐き、大広間に押し寄せていたBETA達は潮が引くかのように一斉に撤退していく。

大広間にいる英雄達は何も言わない、全ての労力を使ったその数時間の出来事で、一生分の労力を使ったかのようにここにいるパイロット達は疲労してしまっていた。

（特別給は勿論、特別休暇も与えよう）

カイはそう考えながら、去っていくBETAに向かってザクマシンガン改に残る弾丸を放ち、隊員達に帰還命令を出した。

この出来事は世界に大きな波紋を生むだろう、第二世代戦術機がハイクに止めを刺したのだ。

世界がどう変わるかは、ま誰にもわからない。

## ハイヴ攻略新たなBETA（後書き）

カイ良いところ取りされて、実は内心涙目だったり。

ザクレールマシンガンは反応が気になります、批判きますかねえ  
（ ; ）

でも、批判でめ感想頂ければ嬉しいです。

今回も閲覧ありがとうございますm（——）m



## 世界の価値（前書き）

今回も多少長めになりましたが、時間が掛かった割にはボリュームが無いかもしれません。

## 世界の価値

「ふう」

カイは大浴場で一人、リラックスしきった表情お湯に浸かっていた。

正直後何回か突入したら一度は死ぬ、カイはハイヴでの出来事を思い出してそう思った。

カイの階級は現在中將から大將に昇格し、ハイヴ攻略によって英雄という名の名声を勝ち取った。

カイにとっては一応予定通りだ、しかしカイの予想よりもハイヴの難易度は些か高い事が実際に突入した結果判明した。

（ニュータイプと先読みが合っても気を抜いたら死ぬって、難易度が高過ぎるな。単純に俺の機体操縦レベルがまだ足りていないのか？）

カイは万全の準備をしたつもりだった。用意したレールガンはビーム兵器と比べても遜色の無いレベルの兵器だった。

そしてハイヴ内での情報収集にも成功し、ハイヴに関する様々な情報を手に入れる事ができた。

「良いこと尽くしじゃないか、ハイヴの難易度が予想より高かったという問題なら、新たな機体を開発しより操作の訓練を行えばいいことだ」

カイは自分に言い聞かせるように小さくそう呟く。

（最後のミスは自分の未熟が原因だ。結果が良くても過程が駄目ならば、いつか失敗する事になる。今回は運が良かったただけだ）

反応炉への止めの瞬間、カイは完全に反応炉を破壊できると確信してしまっていた。

あの瞬間新種のBETAの攻撃が、マラサイの腕では無くコックピットに命中していたらカイはそこで息の根を止められていた。

運に助けられ、ゲームオーバーにならなかったという結果をカイは反省し、精神を鍛える必要があるとも思った。

カイは風呂から出ると、珈琲牛乳を飲みアイスクリームを食べる。

その後、日本からわざわざ輸入した食材で作った五平餅を食べながら、ハイヴ内で手に入れた情報が書かれた書類と、世界の現在の動

向について書かれた紙を読む。

今回でわかった事はかなり多く、それはほとんど全て有益な情報だった。

しかし、これを全て世界に流すのは早計だろう。

だが、全て秘匿とする訳にもいかない。

ある程度他国に譲歩し、有益な情報を開示しながらも台湾の国益を守り、かつ台湾の名声を上げながら他国との友好関係を維持する必要がカイにはある。

そしてカイが考えた結果開示した情報は、ハイヴ突入の様子を映した映像だ。

勿論、ある程度修正してあるがほぼ正確なハイヴ内部の様子は、他国も喉から手が出るほど欲しがっている。

しかも、ハイヴ攻略の様子の中には新たなBETAの情報まで付いていた。

映像に映し出された母艦級BETAの情報によって、BETAの大規模地下侵攻の原因がわかり、映像の最後の光景を見て反応炉の破

壊を行う事でハイヴが壊滅することが判明した。

更にもう一体の新種のBETAの情報についてだが、他国はその個体能力の高さに脅威を感じ対策を練っている。

そして、アメリカについてだがその映像を見て国民は大いに喜び、アメリカ上層部の人間も満足していた。

何故なら アメリカ人が史上初となるハイヴに止めを刺すという偉業を達成したからだ。

今、反応炉に止めを刺したアメリカ人兵士二人は、アメリカで英雄扱いされている。

そしてTV番組に出演し自らの武勇伝を、そして戦術機によるハイヴの突破は可能だと語った。

更に、G弾反対派企業が開発した対レーザーコーティングの有用性は台湾軍の戦術機部隊によって証明された。

そのせいで、G弾推進派が大きく力を削がれたのだが、これはカイの予想通りの結果だ。

ハイヴに突入するアメリカ人はアンドロイドの兵士一人でも生き残れば良く、実際にそうなるだろうとカイは予想していたが、まさか生身の人間が一人生き残るとは思っていなかった。

アメリカで英雄扱いされるのも、生身の身体でかつ第二世代戦術機でハイヴ内を生き残っていた事を思うと十分納得できる。

しかも、その上台湾軍の武器を使っただけにしても、ハイヴに止めを刺すという結果を残した事にカイはその兵士を称賛していた。

そしてスワージ作戦の結果アメリカと台湾の国際的地位は向上し、ハイヴ跡地についての駆け引きが各国で行われる始める。

台湾の国際的地位は向上したが、それでも跡地を占有できる程では無い。

裏でカイはアメリカの技術協力を見返りに、ハイヴの権利をアメリカに譲渡した。

カイは顎に手を当てじつくりと各国からの要請を受けるか考える。

各国からは、母艦級と呼ばれるようになった超巨大BETAを倒し、反応炉に止めを刺したザクレールマシンガンの購入について要望が殺到している。

しかもそれだけではなく、日本にいる香月夕呼からもカイはザクレールマシンガンをねだられていた。

（小型化した超電磁砲のバッテリーには特殊合金を使ってるから、技術が漏洩する可能性は殆ど無い筈だが、夕呼に渡したら武器の情報が解明される可能性が若干上がりそうだな。）

カイはそう考え、日本にいる異常な頭脳を持つ女性を思い浮かべた。

「ふむ、ブラックボックス化しているから解析するのはいいが、技術を流すのと特許を取るのは止めてくれと彼女には お願い して譲るか」

こう言いながら彼女に譲り、なおも相手が超電磁砲を解析し特許を取ったら、多少台湾にも損害はあるが日本との関係もそれまでになりそうだ。

（まあ、あの人がそんな愚策を起こす事はないだろう。あの人の頭脳はなかなか興味深いからな、彼女が危機的な状況に陥ったら協力するのも吝かではない。）

カイは割りと夕呼の事を好意的に思いながらも、夕呼にもう一つおねだりされていたMSの提供については、完全に断っていた。

MSは台湾だけの兵器、あらゆる部品がパンドラの箱になりかねな

い。

最もポイントによるブラックボックス化を嚴重に行っているので、流石の夕呼でも解明出来ないとかイは思っている。

続いてカイは緑茶をアンドロイドに淹れさせ、羊羹を用意した後ハ  
イヴ解析の結果を見る。

（どうやらBETAはG元素とやらを消費して生産されているよう  
だな）

カイはそう思い、G元素がかなり万能な元素のようだと睨んだ。

反応炉はこのG原素を消費する事で、BETAを呼び出すようだが、  
やはりBETAの種類によってG元素の消費量が変わるようだ。

一番G元素の消費が激しいのは、やはり最も巨大な母艦級のようだ。

次いでG元素の消費が激しいのは重光線級。

極寒の星ならばG元素を消費量上げて全てのBETAに低温に対  
する耐性を持たせ、灼熱の星でも同様なようだ。

勿論、太陽にはBETAは存在しないので、G元素の消費によって



付けられる耐性を越える星ではBETAは繁殖できないようだ。

それでもその適応能力は極めて高い、カイがビーム系統兵器を大規模に使い始めたらBETAはG元素を使いビーム系統を無効化してくる可能性もある。

（ミノルフスキー粒子に対してG元素がどう反応するかは、流石にまだわからないな  
研究させる必要がある）

カイはそう考え、隣で待機するアンドロイドに話しかける。

「仮に全BETAにビーム兵器の耐性をG元素を使って持たせたら、どうなるか計算は可能か？」

「正確にはできませんが構いませんか？」

「ああ」

カイがそう言うと、隣で待機するアンドロイドはしばらく黙り込み、計算を開始する。

「BETAの生産数が現在と比較して53%低下すると予想されます」

カイはそれを聞くと考え込む。

現在のBETAの生産数が半分になるならば、ビーム兵器を使いわざと全てのBETAに耐性を持たせて、BETAの生産数を減らしてから実弾兵器を使って駆逐すればいいんじゃないか。

カイの脳内でそういう考えが浮かんた、そしてカイはその策がなかなか有効では無いかと考え始める。

特に宇宙でなら、各国も煩くない。

問題は、どのくらいの速さで対応してくるかだが、ミノルフスキー粒子という未知の粒子に対しての対応策が数日で出来るとはいくら何でも思えない。

最低でも一週間は、対応に時間を掛けられると思われる。

（検討の余地は十分あるな）

カイはそう思うと、新種のBETAについての報告を見る。

原因は最初に戦術機が反応炉を破壊しようとして、中途半端な威力の銃弾を撃ち込んだのが原因と思われる。

一応生きているらしい、反応炉の生存本能が働き、しかも銃弾によ

り反応炉の機能が暴走。

結果として、一週間ほどBETAが産み出せない程のG元素を使い、不安定で無駄のある新種が産み出されたようだ。

確かに強かった、しかしBETAの生産を一週間止めて産み出す程の強さはなかった。

あれは不完全なBETAと言える。

しかし、その情報が他のハイヴに行かなかったのは行幸だった。

（もし、あの新種が他のハイヴに伝わって完成したらと思うとゾッとするな。）

カイはそう思い、情報遮断の成功を喜ぶ。

その他、地球にはBETAの親玉にあたる上位存在がいる。や、BETAは反応炉の生死を反応炉から発せられる特殊な熱で感じる等という情報も見た後、カイは書類をまとめてようやく一息ついた。

やることは多いが、カイの身体は一つしかない。

羊羹の最後の一切れを食べながら、息抜きをする必要があるとカイ

は思い始めた。

疲れを取ると言えば、やはり温泉が一番だとカイは考える。

（久しぶりに故郷に一人で帰るのもいいかもしれないな）

思い立ったが吉日、カイは台湾の港からお忍びで日本へと向かった。

今回は完全にお忍びの旅行、行き先は静岡県の熱海市だ。

（温泉に浸かれば疲れなど、一瞬で消えるのは自明の理だ）

現実世界ならば予約する必要があるが、現在進行形でBETAが侵攻しているこの世界で温泉に浸かってのんびりしている者等そうはいない筈。

念のためカイは旅館が現在空いているか電話して尋ねた所、天然物の食材を出すらしく値段は凄まじく高かったが、部屋は空いているようだった。

カイは大阪に到着すると、電車で静岡へと向かう。

カイの母校は静岡にあったのだが、熱海の温泉にはそう何度も行った事は無い。

しかし、カイは爺臭いかもしれないが温泉が好きなので、久しぶり

の天然の温泉と和食を楽しみにしていた。

最もカイは薄味の和食より洋食派なのだが、たまには和食が食べなくなる。

カイは長い時間電車で揺られ、夜行列車の中で一泊。

そして、ようやく熱海に到着した。

（夜行列車の部屋が空いてたのは行幸だった。  
帰る時は事前に予約しておこう）

カイはそう思いながら、温泉街を歩く。

休日だからか割りとお人で賑わっており、旅館の値段もピンからキリまであるようだ。

カイはシューイチが饅頭が好きだったのを思い出し、帰りに買っていこうと思いながら旅館へと向かう。

途中少し迷ったが、土産屋の親切なお婆さんに道を教えて貰い、お礼に温泉饅頭を買ってカイはそれを頼張りながら案内された通りに旅館へと向かった。

カイは旅館の女将さんに案内され、かなり値段が高かった部屋に案

内された。

もしかしたら、普段は軍の高官等が予約する部屋なのかもしれない。

カイは案内された部屋で少し寛ぐと、早速温泉に行こうと思いタオル等を準備し始めた。

その後カイは浴衣に着替えると、旅館内を歩く。

客は何故かないない。高級旅館のようだが、今日は人が少ないのだろうか。

カイは不思議に思いながらも、いつものように長く考える事はしなかった。

カイは痩せてはいるが、短髪黒髪で背はそれほど高くなく、典型的な日本人の体型だ。

浴衣を着ても全く違和感が無い。カイが日本人だから当然かもしれないが。

しかし、この世界では紫色の髪や水色の髪をした日本人がいるのだ。

水色の髪をしたおっさんが浴衣を着ている場面を想像し、カイは直ぐにその想像を脳内から掻き消す。

違和感が有りすぎて、リアルに想像出来なかったのはカイにとって幸運だった。

「ふう」

カイは体を洗った後風呂に入り一息つく。

サウナが無いのは残念だが、そこは仕方ないと諦めた。  
カイはゆっくりと思考の海に沈んでいく。

この世界は現在以上にえげつないとカイはつくづく思っていた。

アメリカ人は笑顔で台湾人や日本人と握手しながらも、裏ではイエローモンキーと黄色人種を罵っているのをカイは知っていた。

更に同じ黄色人種の日本人でさえも、元植民地人だと裏では台湾人を見下しているのを知った時はカイは現実とこの世界の日本人の差に頭が痛くなった。

「儘ならないものだ、しかし物語臭い台詞だが完全な世界等は存在しないのだろう」

カイはそう呟くと、完全に脱力して無心になる。

心地好い温かさを感じ、思考が停止する。

悩みが消える事はないが、カイは一時的に全ての重荷から解放され、ただ温かさに身を任せる。

カイは誰かが自分の浸かる露天風呂に入ってきたのを感じ、一瞬目を開けて誰が入って来たか確認する。

「ここは男湯の筈ですが」

そして、確認したカイの視界に見知った顔が入り、カイは問い掛けるような口調で目の前の女性にそう言った。

「知ってるわよ、だけど大体予想はついてるんでしょ？」

「ええ、ここに来るまでスムーズ過ぎましたし、休日にも関わらず旅館には俺以外の客がいないのは外の様子を見ておかしいのはわかりましたよ。」

ふふ、日本の諜報能力は素晴らしいですね。  
俺の訪問を直ぐに感知しましたか」



カイは露天風呂に入ろうとする目の前女性……香月夕呼に向かって  
そう言った。

「プライベートに邪魔してすまなかったわね。

あなたに会えるのなんて、この機会を逃したら何時になるかわかり  
そうになかったから、乱入させてもらうわよ。中華民国の大将さん  
……いや、確か赤鬼<sup>オーガ</sup>と呼ばれているんだったかしら？」

夕呼の言葉にカイは偽名も偽物の階級もバレたか、と思ったが別段  
驚きはしない。

カイは派手に動き過ぎた。探せばカイのプロフィール位は見つけら  
れるのだろう。

「んー、日本の女性はおしとやかで羞じらいの心を持った大和撫子  
何だと、聞いた事がありますが、現実はいつも残酷で厳しいもので  
す」

カイは嘆くような口調でそう言い、天を仰いだ。

現代の日本では最早絶滅危惧種と言っても良い大和撫子が、この世  
界ならば見られるのでは無いかと言うカイの希望は残念ながらまだ  
叶えられていない。

「……悪かったわね、おしとやかじゃなくて。  
こんな女は嫌いかしら」

夕呼はカイに身体を寄せながらそう尋ねてくる。

18歳になった夕呼の身体は最早完成された女性の身体と言っても良く、大人の色香を放っていた。

「一つ聞きたいのですが」

その夕呼の瞳を真っ直ぐカイの両眼が射ぬき、カイは真剣な表情で夕呼に問いかける。

「この世界は貴方の身体、そしてその才能を全て犠牲にしてまで守る価値がありますか？」

カイに近づく夕呼の身体が止まる。

カイにはこんな身体を売るような行為をしてまで、この世界をBETから守る価値があるのか、この世界の住人に訪ねてみたかった。

「あるわよ、命を……それ以上のモノを差し出しても守る必要がある位にはね」

夕呼は力強い口調で答えると、自分の顔をカイに近づけそしてカイを睨む。

「そうですか、俺には貴方の言葉に共感する事は出来ませんが、その言葉には偽りが無い事は感じられました。俺も少しはこの世界に

価値を見出だせるように、努力したいと思います」

「夕呼と呼んでもいいわよ？」

私も一人の人間だから、全てを一人では行えない。

つまり、貴方には手伝う義務があるわけ。

早くこの世界の価値に気付きなさい」

無茶苦茶だ、カイはそう思うが今の状況はよろしくない。

夕呼が話しながら身体をカイに密着させ、夕呼の胸がカイの身体にタオル越しに当たり、形を変化させている。

カイは思わず頷き、夕呼の虜にされてしまいそんな心を精神力を費やして何とか止め、夕呼を見返すと夕呼はまるでしてやったりと言っているような表情で笑みを浮かべながらカイを見ていた。

「精神衛生上よろしくないので、少し距離を開けてくれませんか？」

「私と婚約しなさい、そうすれば離れてあげるわ」

カイの要求に対して、夕呼はその要求を呑む為の条件を提示してくる。

その内容も相変わらず無茶苦茶だが、夕呼の色香に思わず頷きそうになる所が愚かな男の一人であるカイにとっては辛い所だ。

だが、カイは何か騙されずに済みそうだ。何故ならカイの能力で夕呼の打算の感情が否応なしにわかるからだ。

カイは内心でロマンチックさの欠片も無いと嘆く。

一応カイに対しての恋愛感情もあるらしいが、それは全体の感情の二割程。

打算を大いに含み婚約を持ち掛けてくる相手を、幾ら相手が美女だろうがカイは受け入れる程の度量は無い。

（せめて打算と恋愛感情の比が逆なら考える所だが、最早ここまでわかってしまうと、取り消せない俺の能力は呪いなのかもしれないと思えてくるな）

カイの気持ちは更に落ち込み、さっさと風呂から出ようとする。

しかし、カイは風呂に入る時のマナーに則り、タオルを腰に巻いてはいない。

そして、カイはそれを忘れて風呂から出ようと立ち上がったのだ。

結果風呂場に甲高い悲鳴が響き、その後肉を打つ音が何度か聞こえた。

「今回は俺の失態ですから、仕方ないですね」

風呂から出てロビーの椅子に座りながら、カイは隣に座る夕呼を横目で見ながらそう言った。

カイの両頬は微妙に膨れ、カイは痛む自分の頬をそつと撫でた。

一方、カイの隣に座る夕呼も両頬を赤く染めているが、それは風呂上がりだからというだけでは無いだろう。

そして、カイは責任を取らされ、婚約はしないが先ずはお付き合いからさせて頂く事になってしまった。

「たまには……いや、頻繁にこっちに来なさいよ?」

夕呼に上目遣いで睨まれながらそう言われ、カイは後ろめたさもあってか頷くしかない。

「そんな顔もするんですね、意外でしたよ」

カイはせめてもの反撃とばかりに赤面する夕呼をそうからかって、夕呼に肩を叩かれたのだった。

「料亭の料理も美味しかったです、蕎麦も久しぶりに食べるとやはり美味しいですね」

カイは蕎麦を啜り、緑茶を飲んだ後そう言った。

「貴方が本当に台湾人なのか、疑う要素があり過ぎるわね」

夕呼は目の前で美味しそうに蕎麦を啜るカイを観察しながらカイの言葉にそう返す。

「あはは、でも日本に俺の戸籍はないでしょ？  
つまり俺は日本人ではないという事です」

カイは海老天ぷらを食べ、目の前の料理が全て無くなったのを確認すると蕎麦湯を注文する。

「戸籍に何らかの理由で登録されていない、という可能性があるでしょう？」

夕呼の言葉にカイは肩をすくめ、明確な返事はしない。

うどん蕎麦屋から二人は出た後、カイは土産屋に寄って温泉饅頭を購入した。

（これで土産はいいだろう、そろそろ帰る時刻だし彼女にも置き土産を贈るのもまた一興）

カイは腕時計で時間を確認すると、夕呼に笑みを浮かべながら向かって話しかけた。

「そつえば、ハイヴに突入し調査した結果わかった事なんですが」

カイが日常会話をするような口調で話し始めると、夕呼の顔つきが微妙に変化する。

ハイヴ攻略の際にわかった事、それは夕呼が現在最も気になっている事の一つだ。

聞く雰囲気からも一字一句聞き逃す事のないよう、耳を凝らしているのがわかる。

「でも結論だけ言っても面白くないので考えてください。

地球上ではBETAとの会話で争いを止める難しい、二重結合や三重結合しにくいから。

まあ、自他共にみとめる天才の夕呼ならば直ぐに解ける問題でしょ

う？」

カイは本心から、恐らく夕呼ならばそれだけのヒントで答えにたどり着くだろうと思っている。

「俺も一応大将で司令ですからなかなか時間が空けられませんが、時間の都合がいたらまた訪ねさせていただきますよ」

カイはそう言つと何やら考えている夕呼の頬に、軽くキスをする。

そして、顔を真つ赤に赤面させ、何やらカイに言っている夕呼にいたずらっ子のような表情でカイは手を振りながら、わざわざ迎えに寄越したアンドロイドが操作するMSに乗って日本を後にした。



## 世界の価値（後書き）

閲覧ありがとうございますm(\_\_\_\_\_)m

今回は微糖な感じにしてみました。

一つ思ったんですが、因果的に落とせるヒロインって夕呼くらいしかいないですか？

いや、霞とかなら……でも無理矢理になりそう……

恋愛原始核チート過ぎる(・・・)

恋愛原始核を持つ白銀武はモテない男の敵。

つまり抹殺されて然るべきではないのか、難しい所です。

まあ、ぶつちやけ意外と作者は白銀武が嫌いではないんですけどね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1342z/>

---

マブラヴ暴走機械

2011年12月25日20時49分発行